

セラレ江代へ差越、半隊長ニ挙ケラレ、其後病氣相煩ヒ、
歸郷致シ帰順仕候也、

日向国諸県郡第百七小区小林郷

明治拾一年三月

山口榮喜

六三 中村周兵衛上申書

明治拾年旧四月十日勇義拾六番隊小隊長トナリ、鹿兒島
県下久見崎村へ番兵、同十六日病氣ニテ帰宅致シ候也、

鹿兒島県下高江郷

明治十一年三月

中村周兵衛

六四 面高源之丞上申書

明治十年第二月十五日第三大隊六番小隊分隊長ニテ鹿兒
島県発程、同廿一日熊本県川尻へ着シ、翌廿二日黎明ヨ
リ両軍ノ炮声天地ヲ轟キ、煙焰ノ揚ルヲ望ミ、我兵雲合
霧聚シテ奮激シ、諸隊ト先キヲ争ヒ殆ント落城ニ垂ント
スルノ報アリ、疾ク馳セテ攻撃シ、昏ニ及テ勝敗決セス、
亦本營ノ指揮ニテ該地ヲ転シ、白川安政橋ヲ隔テ右傍ノ

堤ヲ堅守シ、防戦スル事兩三日間官兵衝突烈戦ス、互ニ
死傷アリ、亦本營ノ指揮ニテ該地ヲ転シ、出京町口へ出
張シ、直ニ城際へ押寄せ、翌ヲ築キ兵ヲ潛メ堅守シ、暗
夜ニ処々篝火ヲ張り防戦スル事徹夜、我兵間々死傷アリ、
三月廿四日城兵黎明ヨリ巡鎮ノ兵ト相見へ三四中隊我營
へ呐喊突出シ、双方発銃抜刀ニテ格闘スル事良々久シ、
及昏テ官兵城内へ退卻ス、官兵ノ死伏填ニ塞街衢ニス、我
兵刀創二名、遂ニ余午後四時過銃創ヲ蒙リ、直ニ川尻病院へ
入り療養致シ、其後戦地ノ景况顛末不相分、夫ヨリ日向
路ヲ經テ延岡へ転院、夫レヨリ同所戦地トナリ、長井村
病院ニ於テ帰順仕候也、

鹿兒島県第一大区四小区

明治拾一年三月

面高源之丞

六五 有馬八五郎上申書

明治十年二月拾五日第二番大隊六番小隊兵士ニテ鹿兒島
ヲ発シ、同二十一日熊本へ着セリ、直チニ安政橋ヲ守ル
事始ト三日、夫ヨリ大津へ転シテ数日此ニ固守シ、旧正
月廿五日応援トシテ田原坂へ進軍、同所豊岡邑ノ官兵ト

二 宮 城 県 上

数々交戦互ニ勝敗ヲ分タス、終ニ旧(三月廿日)二月六日我軍敗レテ
植木(植木町)向坂へ引退テ相守ル、官軍大兵襲来リ烈戦數刻官軍
大ニ敗レテ四方へ散乱ス、我軍逃ヲ追テ大利ヲ得タリ、
夫ヨリ植木ノ大木迫ヲ守ル事數日ニシテ昼夜連戦勝敗決
セス、二十七日ノ戦ヒニ銃創ヲ受ケ木山病院ニテ療治シ、
旧三月廿日帰県シ、八月初旬頸娃郷警視派出所ニ於テ自
首帰順仕候也、

明治十一年四月

鹿兒島県下第拾七大区四小区

有馬八五郎

六六 成尾常彦上申書

明治拾年旧正月三日第一大隊六番小隊兵士ニテ鹿兒島県
出発、同九日肥後川尻へ着、翌十日戦争相始リ正面ヨリ
攻城、十四日夜高瀬(玉名市)へ出兵、同十五日午前八時頃ヨリ戦
争、午後六時ニ至リ伊倉(玉名市)へ引揚ケ一泊、翌日午前七時二俣(玉名市)
ニ至リ守兵、十九日吉次峠味方敗軍ニ付応援トシテ翌廿
日午前八時ヨリ戦争相始マリ、遂ニ官兵散乱逃去ル、廿
一日二俣へ進撃味方大ヒニ苦戦ス、其夜遠大寺村(日大寺 植木町)へ引揚
ケ、翌廿二日午後七時比ヨリ田原へ進軍、十余日間連戦

互ニ勝敗アリ、廿七日銃創ヲ蒙リ、川尻病院へ入室、三
月初旬木山へ転院、夫ヨリ馬見原へ移リ候処銃創モ平癒
致シ候ニ付帰隊イタシ、同廿日午後十二時比鹿兒島へ着
陣、翌日城山へ進撃スレトモ拔ケス遂ニ小野村(鹿兒島市)へ引揚ケ
四五日滞陣、其時押伍トナル、旧五月拾四日武ノ岡敗軍
味方次第退テ岩川ニ陣ス、翌日百引へ進撃大ニ勝利ヲ
得タリ、此日再ヒ銃創ヲ蒙リ諸所病院ニ於テ療養、官騎
ニテ雷撃七番中隊右半隊長ニ編入セラレ、佐土原・美々(日向
町)津・門川等ニテ味方利ヲ失ヒ、遂ニ延岡ノ内長井村ニ取
囲マレ、八月拾八日榎ノ嶽ノ官軍ヲ打破リ、鹿兒島ノ様
進軍ノ途中病氣ニテ飯野(えびの市)ヨリ隊ニ後レ、九月廿日帰順仕
候也、

明治拾一年四月

鹿兒島県第一大区

成尾常彦

六七 寺師權右衛門上申書

明治拾年三月廿六日第九大隊二番小隊分隊長ニテ鹿兒島
県出発、熊本県下矢部村(矢部町)へ四月上旬着、夫ヨリ木山へ進
ミ五日滞陣、四月二十日武宮へ進撃利アラスシテ矢部へ

引キ(長崎藩七中隊長)干城九番中隊トナリ、人吉ヲ経テ鹿兒島県下大口郷

ヘ引揚、旧三月二十七日山野(大口市)ヨリ深川(水俣市)ニ到リ接戦ス、五

月上旬久木野(水俣市)ヘ転陣、戦敗レテ山野(大口市)ヘ引テ守ル、夫ヨリ宮

之城・横川等ノ戦ヒ利ヲ失ヒ、七月上旬進給一番中隊(上村友右衛門隊長)

半隊長ニ挙ラレ干城六番中隊ト合隊シ、旧六月拾四日(七月廿四日)財

部敗軍ヨリ帰宅シ、八月三十一日帰順仕候也、

鹿兒島県第一大区四小区

二百四拾壹番地

明治拾一年四月 寺師權右衛門

六八 木原壯之丞上申書

明治拾年五月廿日鹿兒島出発、日向国郡代取締トシテ同

廿四日宮崎へ着、三日ヲ経テ佐土原紙幣製作掛リトナリ、

八月初旬官軍攻撃ノ砌延岡大武村(延岡市東海岸)へ引退キ、同拾五日第

四旅団へ降伏仕候也、

鹿兒島県第一大区八小区

明治拾一年四月 木原壯之丞

六九 稻田新平上申書

明治拾年二月十七日(六)四番大隊二番小隊兵士ニテ鹿兒島発

足、同廿二日熊本県下川尻へ着、翌日山鹿駅へ進軍、翌

日腹切坂ニ進撃、利アラスシテ再ビ山鹿へ引揚ケ、三月

中旬田原敗軍ノ際植木へ転シ、三日経テ川尻へ転シ同所

ニテ押伍トナリ、夫レヨリ木山(益城町)・矢部ヲ経テ人吉ニ至リ、

破竹五番中隊付属トナリ、十余日ヲ経テ其中隊長病氣ニ

付代理トナリ、小畑(大畑カ)ニテ中隊長帰隊相成リ候ニ付再ヒ付

属トナル、同所敗シテ鹿兒島県下飯野(えびの市)へ引キ、雷撃炮隊

兵士トナリ佐土原(日向市)・美々津ノ戦ヲ経テ、延岡ノ内長井村(北川町)

へ囲マル、八月十八日榎(可愛岳)ヲ破リ鹿兒島県下城山ニ拠

ル、隊伍編製七番小隊兵士トナリ、病氣相煩ヒ入院致シ、

九月廿四日降伏仕候也、

鹿兒島県

明治拾一年四月 稻田新平

七〇 鳥丸榮太郎上申書

明治十年旧三月廿日振武拾八番小隊兵士ニテ出軍、(福山町)福山海辺ニ番兵、翌日甲突川尻ニ於テ戦ヒ勝敗決セス、引テ(鹿兒島市)武村ヲ守ル、此ニテ半隊長トナリ、四月十日官軍襲来リ利ヲ失ヒ引テ帰ル、五月十四日再ヒ官兵襲来リ終日激戦、我兵遂ニ敗シテ國分ニ引キ、深川ニ於テ戦ヒ敗シ出ルニ途ナク山中へ潜匿、六月廿八日帰宅、廿九日帰順致シ候也、

小林郷

明治拾一年四月

鳥丸榮太郎

七一 藤井清茂上申書

明治十年二月拾六日(網野利秋隊長)第四番大隊九番小隊半隊長ニテ鹿兒島県下出發、同廿二日熊本県下ニ到リ、即日ヨリ(熊本町)向坂ニ於テ開戦、台兵ヲ追退ケ、翌廿三日山鹿駅ニ進撃ノ際右肩ニ銃創ヲ蒙リ、直ニ病院ニ至リ療養、夫ヨリ人吉ニ転ス、銃創少シキ愈ユルヲ以テ雷撃本營ニ随從セシカ、同所

戦争利アラスシテ大畑ヲ經テ小林ニ転ス、夫ヨリ恒吉郷(大隅町)

ニ赴テ奇兵本營ニ随從シ、大崎ニ進撃大ニ勝利ヲ得、兵器其外諸品分捕、夫ヨリ又岩川ヲ追撃終ニ敗戦シテ末吉(大隅町)

ニ引揚ケ、亦敗レテ都之城・宮崎等ヲ經テ、美々津敗軍(日向市)ノ砌鹿兒島ノ様帰宅、拾月上旬自首仕候也、

鹿兒島県第二大区一小区

明治十一年四月

藤井清茂

七二 平瀬宗兵衛上申書

明治十年二月拾六日(永山弥一郎隊長)第三大隊六番小隊兵士ニテ鹿兒島県発足、廿二日熊本県下向江町着、廿三日守兵トシテ出京町へ転陣、四月中旬川尻遂ニ破レ諸隊木山へ拠ル、又竹(熊本町)宮ニ於テ戦争利ヲ得、次第二引テ人吉ノ内湯ノ前村ニテ(湯前町)隊伍編製、正義五番中隊半隊長ニ挙ラレ、四月下旬三田(高千穂町)井へ転陣、夫レヨリ鏡山ニ進撃大利ヲ得ルト雖トモ彈藥乏シキ故三田井へ退テ陣ス、五月初旬官兵襲来ル、終ニ我兵敗走シ中村ニ引揚ケ、夫レヨリ又破レテ長井村ニ取(日之影町)阻マル、八月中旬長井村ノ囲ヲ打破リ、鹿兒島城山へ拠ル、九月廿四日落城ノ砌降伏仕候也、

鹿兒島縣第二大区二小区

(年月日脱)

平瀬宗兵衛

七三 鎌田龍次郎上申書

明治拾年二月十五日(村田新八隊長)第二大隊一番小隊押伍ニテ鹿兒島県
 下出発、大口ヲ經テ熊本県下水俣へ出、同廿一日川尻駅
 へ着、同日夕刻高橋(熊本)へ出張海軍ノ上陸ニ備フ、翌日熊本
 攻城、其翌日大津駅へ繰込ミ一週間滞陣ス、三月二日頃
 田原坂ニ壘ヲ堅テ防戦ス、同月拾四日七本村(熊本)へ官軍襲来
 ノ節応援トシテ分隊ヲ率ヒ出張ス、於此地銃創ヲ蒙リ川
 尻病院ニテ療養致居候処、彼地敗戦ノ砌木山(益城)へ転院、夫
 ヲリ矢部・馬見原(蘇陽)・高千穂(高千穂)ヲ經テ延岡病院へ移ル、此所
 へ官軍進入相成候ニ付八月上旬長井村(北川)ニ到ル、同月中旬
 愛ノ嶽(可愛)ヲ敗リ地藏嶽及ヒ三田井(高千穂)へ出、夫ヨリ中軍ニ從ヒ
 旧延岡領ノ内七ツ山其他諸所山中ヲ越シ、夫ヨリ小林郷(諸塚)
 ヲ經テ鹿兒島城山へ攻入、九月廿四日同所落城之節帰順
 仕候也、

鹿兒島県下第三大区六小区

坂元村

明治拾壹年第三月

鎌田龍次郎

七四 鎌田央吉上申書

明治拾年二月十五日(蘇原田幹隊長)第一大隊一番小隊押伍ニ編入、鹿兒
 島県下ヲ発足、出水口ヨリ肥後水俣等ヲ經テ熊本川尻駅
 へ同廿一日午後六時頃到着、翌廿二日未明ヨリ同所出軍、
 先鋒トシテ段山口ニ進撃同所ヲ拔キ鬪戦スル事五六日、
 交代シテ高瀬攻軍ノ決策ヲ受ケ(日詳ナ)、高瀬川ノ流頭ヲ渡
 リテ同所八幡社(五名)下迄進軍争戦ス、夜ニシテ伊倉村(五名)ニ引揚、
 翌日策籬ノ変ニ依リ吉次峠(五名)ヲ固守シテ戦争スル事数日、
 其他大田尾峠(植木)・木留村等ニテ合戦ス、同四月拾四日川尻
 口敗軍ノ際全軍矢部ニ引揚ル、此地ニ於テ隊号ヲ行進志
(松岡博介中隊長)
 番中隊ト改名ス(日詳ナ)、鹿兒島進軍ノ策ヲ決シ向軍、同所
 吉野村(鹿兒島)ノ内ニ於テ分隊長トナル、防戦スル事幾許日官軍
 襲来ノ際味方川上村ニ退ク、翌未明返戦攻撃ノ策ニ決シ
 奮発鋭進激戦シテ終ニ原壘ヲ返取シ守ル事数日、亦出水
 口敗軍ノ日惣隊ヲ帖佐郷(谷良)ニ退軍ス、夫ヨリ財部・末吉郷
 諸所宮崎ヲ經テ美々津(日向)ヲ守ル、同所敗軍ノ砌輕創ヲ負ヒ
 山路ヲ越ヘテ帰県帰順仕候也、

鹿兒島県第三大区

第六小区

明治拾壹年三月

鎌田央吉

七五 中原尚政上申書

(池上四郎隊長)

明治十年二月拾七日第五大隊十番小隊押伍ニテ鹿兒島県下発程、同廿二日熊本県ニ着シ則チヨリ戦ニ及ヒ安政橋辺ヨリ攻城、同三十日頃官兵城中ヨリ襲来リ烈ク戦ヒ、午後第五時過ニ至リ官兵城中へ引揚ル、三月中旬頃県下境へ出張、翌日同所ニ於テ戦ヒ、敗テ小川へ引揚、翌朝迄進撃シテ大勝利ヲ得火川迄攻入、(永川、高原町)此時銃器・彈藥多数分

捕、当夜十二時頃我隊小川へ引揚番兵ス、兩三日在テ官兵進來苦戦ニ及ヒ同所引揚松橋へ番兵ス、翌日官兵進來リ爰ニ於テ勝利ヲ得、翌日攻戦暮ニ至リ相引シテ防戦ス、

上 鹿 城 宮 二

翌日烈戦ニ及ヒ敗軍シテ川尻へ引揚ケ杉島へ番兵ス、同所ニ於テ分隊長へ挙ラレ、四月上旬頃同所ヨリ進撃シ勝敗不決シテ引揚ル、同九日頃密柑ノ關ヨリ川尻堤へ出張番兵ス、同十一日官兵密柑ノ關へ襲来、応援トシテ戦フ事三昼夜連戦シ、同拾三日夜同所引上翌十四日未明ヨリ

進撃シ暫時戦ヒ敗軍シテ木山へ転陣ス、翌拾五日御舟へ(御船也)

出張、同拾七日苦戦(矢部町)金内へ引揚ケ、同十九日頃米良尻抜

へ転陣ス、同所ニ於テ半隊長ニ挙ラレ当所へ暫ク退陣ス、

七月上旬頃上板屋(西米良村)へ進撃シ同所へ番兵ヲ張り防戦ス、此

際三四度進撃スレトモ勝敗決セス、同中旬頃官兵進來リ、

敗軍シテ米良城下へ転陣シ此時官兵天堤へ番兵ス、七月

下旬頃進撃シテ勝利ヲ得、同日官兵ヨリ進來リ此時苦戦

シテ三里余隔リ番兵ヲ張ル、同所ニ於テ敗戦六里余隔リ

転陣シ、同所ニ於テ戦フ事二昼夜連戦ス、当所引揚日向

佐土原へ出軍、敗レテ高鍋へ引揚ケ同所ヨリ延岡へ転陣

ス、爰ニ於テ降伏シ、八月十八日帰県仕候也、

鹿兒島県下

第一大区四小区

明治拾一年三月

中原尚政

七六 有馬菊治上申書

(永山弥一郎隊長)

第三大隊九番小隊兵卒ニ編入セラレ明治十年丑二月拾六日鹿兒島県下ヲ発足シ、伊集院街道ヲ経テ肥後佐敷迄至ル、然ル処既ニ先鋒隊開戦ノ報アリ、然ニ依テ該隊昼夜

休泊ヲ得ス、本道ヲ經テ熊本県下川尻駅ニ着シ、同所ニ暫時休息、夫ヨリ城ノ前面干反畑ニ到リテ直ニ攻城、勝敗分タス此所ヲ守ル凡二週間、此時銃創ヲ受ケ川尻病院ニ入ル、医療ヲ受ル凡三十余日ニシテ創愈ヘ再ヒ帰隊ス、三月下旬頃植木ヘ転陣ス、此地ニ於テ守兵スル凡二拾余日、然ル処川尻口敗軍ニ因テ当所ヲ守ル事不能退テ竹之宮ヘ到ル、又此地ニ於テモ戰鬪ス、夫ヨリ矢部ヘ引揚ケ当所ニテ振武隊ト改称シ七番中隊トナリ、振武隊ハ鹿兒島進撃ト軍議ヲ決シ、人吉ヲ經テ鹿兒島城山及甲突川尻ヨリ攻撃スト雖トモ利アラス、伊敷村ヘ退キ守計ヲ為ス、同所ニ於テ眼病ヲ煩ヒ帰宅ス、五月下旬鹿兒島敗軍惣隊蒲生郷ヘ引揚ケタル明報アリ亦帰隊ス、於当所戦亦タ利アラズシテ加治木郷ノ内小山田村ヘ退キ、兩三日滯陣ノ後チ牛根郷ヘ屯在ノ官軍ヲ、振武三小隊ヲ分ケ攻撃シ海岸迄追退ケ克ヲ得テ末吉郷ニ引揚ケ、同所ニ於テ市成・百引・大崎其他各所ヘ官軍屯在ノ由ヲ聞キ、恒吉郷ニ振武隊全軍ヲ纏メ百引郷屯在ノ兵ヲ追撃ノ議ニ決シ、徹夜通行曉霧ニ乘シ哨兵ノ怠リヲ探偵シ一同ニ攻撃ヲ為ス、乃チ利ヲ瞬息ニ決シ生捕人上下百余名、死傷多シ、其他ノ分捕大砲二門・彈藥・糧米ニ至ル迄悉ク算シ難シ、其夜分捕

品ハ生捕ニ負ハセ殘品ハ之ヲ火シテ又恒吉ニ引揚ケ、翌日大崎郷ニ向ヒ進撃亦勝利ヲ得テ志布志郷ニ引揚ケ、兩三日滯陣ノ処、高原口ノ味方高原表ヘ進撃スルノ報アリ、因テ応援ノ為メ振武隊ハ彼ノ地ヘ向ヒ、兩度高原ヘ進撃スルト雖トモ利アラスシテ全軍ヲ上庄内ノ内山田村ヘ引揚ケ兩三日滯陣、此時分隊長トナリ、夫ヨリ福山口ノ行進隊岩川表ヘ進撃スト、因テ彼ノ隊ト交代シテ、末吉ノ内通リ山ヲ守リ一兩日滯陣、七月下旬頃都之城味方総敗軍ノ際負傷致シ、竊ニ間道ヲ經帰宅シ、迅速警視出張所ニ於テ帰順仕候也、

鹿兒島県

明治拾一年第四月

有馬菊治

七七 竹下勤兵衛上申書

明治拾年二月十五日第二大隊五番小隊押伍ニテ鹿兒島県下発足、大口筋ヨリ肥後水俣ヘ出、同月廿二日熊本城攻撃ス、午後六時頃八幡山下ヘ引揚ケ、同廿六日頃松橋ヘ出張当所ヘ守兵、三月上旬城下ヘ転陣、三月中旬比大津川ヘ出張候処、阿蘇郡黒川村ヘ官兵ノ斥候相見得候段報

知有之、我隊一分隊繰出シ黒川村へ守兵致居候処、三月

下旬官軍襲来開戦ノ処官軍敗走、同所ニテ分隊長ニ挙ラ

レ、四月上旬同郡(一の宮町)阪梨峠ヲ官軍引揚ノ報アリ、我隊直ニ

出張ス、官軍進撃シ来ル、味方敗軍新庄村へ引揚、四月

中旬(余部町)惣軍矢部へ引揚、馬見原ニ於テ半隊長ニ挙ラレ、四

月下旬江代(水上村)へ出ツ、奇兵隊豊後へ進軍、日向富高新町(日向市)へ

出、延岡ヨリ豊後竹田(竹田市)へ進軍、当所ニテ防戦、五月上旬

同所敗軍ニ付カシ(三重町)ノ峯へ退軍、五月中旬三重ノ市へ進軍

守兵致居候処、官軍ヨリ進撃セラレ官兵敗軍、当地引揚

ケ白杵(白杵町)駅へ進撃致候処終ニ乘リ取り当所守リ居候処、官

軍襲来味方敗軍ノ折再ヒ三重ノ市へ進撃致候へ共、利無

キヲ以テ三國峠(三重町、宇目町)へ守ヲ付ケ、同所敗軍候ニ付五月下旬熊

田駅(熊田町)へ引揚、六月中旬陸地峠へ守兵ス、官兵ノ進撃ニ逢

フ、官軍敗走、七月下旬鹿兒島方面ノ援兵トシテ佐土原

迄繰出、味方敗走ニ付美々津駅(日向市)へ退軍、当所川面へ守リ

付居候処味方敗ラレ終ニ困マレ、間道ヲ忍ヒ八月上旬帰

宅致シ、鹿兒島ニ於テ帰順仕候也、

鹿兒島県下

草牟田村

明治十一年三月

竹下勘兵衛

七八 桐原喜右衛門上申書

(四月六日)

明治拾年旧二月廿三日弾薬箱製造方トシテ鹿兒島出発、

同廿五日(えびの市)眞幸吉田へ着、同所へ旧三月廿三日迄滞陣、夫

ヨリ同廿四日(保徳)求摩人吉へ着、同所へ三十日余滞在、庄内(郡)

野々三谷ヲ經テ宮崎へ着、十日程滞在、夫ヨリ延岡へ引

揚製造ノ折、於同所旧七月十日帰順、其後鹿兒島襲来ノ

際一時本営迄出張直ニ帰宅仕候也、

鹿兒島県下第三大区一小区

二百壱番地

明治拾壹年三月

桐原喜右衛門

七九 二之方八十次上申書

明治拾年旧五月二日勇義隊第拾六小隊ノ半隊長ト成リ、

千代川(内市)口並郷内防禦致居候処、同月十一日ヨリ同拾二日、

十三日ニ及ヒ隈(内市)ノ城郷ノ内千代並ニ向田其他諸所敗軍、

敵スベカラサルニ因リ、同拾四日致解隊候也、

鹿兒島県下

明治拾一年三月

二之方八十次

八〇 石原近秀上申書

明治十年第二月十四日(村田新八隊長)第二大隊一番小隊給養トナリ鹿兒島発程、同廿日肥後川尻へ着、翌廿二日百貫關迄本隊繰出ニ付高橋(熊本)ノ様出張ス、廿二日熊本城攻撃応援トシテ同所ヨリ繰出攻撃ス、廿三日迎町へ引揚宿陣、同廿五日大津二重峠ノ様操出シ愛ニ守兵諸手当スル事凡十余日、三月上旬田原口ニ繰出ニ依リ植木町へ焚出設ケ置キ彼所ヨリ諸品運送ス、同所敗軍ノ節御馬毛ノ様引取手当同断、同月下旬頃本隊半隊長トナリ直クヨリ植木ノ様出張防戦スル事数日、川尻口敗軍ノ際本隊上鍋村迄引退、此時保田窪守口へ敵兵襲来シ我隊援兵トナル、此時大勝利敵兵斃ル、者數十名、亦々同所へ引揚守兵ス、翌日御舟口破軍ノ報ヲ得木山ノ様引揚ル、同所ニ於テ戦フト雖トモ利無クシテ矢部迄引揚滞陣スル事四五日間、爰ニ於テ振武二番小隊ト編制ス、此時振武全軍ヲ以テ鹿兒島進軍ノ決議ニ因テ、求摩人吉ヲ經、旧三月中旬頃鹿兒島県下下伊敷

村ニ着ス、爰ニ堅守スル事十余日、旧四月中旬頃求摩人吉へ援兵トシテ発程、五日間ニシテ同所ノ町へ達ス、翌日三方境ノ様守兵ス、同所敗軍ノ節馬襲村ニ於テ我一小隊ヲ以テ繰留メ戦フ、追々味方襲来リ一同ニ敵追フ事一里余、爰ニ防戦ス、我隊同夜城下迄引取休兵ス、翌日我隊外三中隊合シテ石坂ト云フ所へ進撃スト雖トモ、敵兵不屯在ユヘ空ク里余引退キ休兵スル処敵兵襲来、我隊直チニ敵中へ走込ミ戦フ央、味方三中隊モ駆付一同ニ杉木山迄追込ミ戦フト雖トモ、地形悪キ故ヲ以テ数丁引退キ堅守ス、此時大利ヲ得打斃ス者六拾余名、分捕銃弾数多、翌日テイカクドフ口破軍ノ際速ニ大畑迄引揚ル、同日味方各中隊モ同処へ引揚守兵ス、一週間位過キテ小林ノ様繰出シ同所ニ四五日滞陣ス、夫ヨリ飯野へ進撃スト雖トモ利ナクシテ同所ニ堅守ス、兩日過キテ須木ノ内皆越迄操込ミ、翌日本隊ヨリ四中隊大白毛山ヨリ間道ヲ經、我隊外二中隊植村坪屋ノ両所ヲ進撃ス、一時ニ台場乗取リ湯ノ前村迄追撃ス、暫時ニシテ敵軍兵ヲ纏メ援兵ト合シ一同ニ襲来ス、味方彈不足ノ故ヲ以テ皆越マテ繰引ス、翌日我隊小林ノ様引揚爰ニ三日滞陣、夫ヨリ都之城迄繰込ミ同夜岩川ニ進撃スト雖トモ敵兵大崎ニ引退ク、戦ハ

二 宮 城 県 上

スシテ恒吉郷(大崎町)ニ引揚ケ振武全軍ト合シ、翌日百引郷(福北町)ニ進撃ス、纒一時間余ニシテ大利ヲ得、敵兵斃ル、者百余名、生捕數多其他分捕不數知、本日味方全軍恒吉郷ニ引揚ケ、翌日大崎郷(大崎町)ノ内荒佐村(荒佐野)ニ進撃スト雖トモ、利ナキニ因テ一時同所ニ引揚ル、又翌日同郷ニ進撃此時日大勝利ナリ、同日志布志郷へ引退キ四五日間滞陣ス、夫ヨリ庄内ノ内山田郷(高原町)ニ進ミ、翌日高原郷ニ進撃スト雖トモ利無クシテ同郷ニ引取ル、爰ニ於テ振武拾一番中隊中隊長トナリ、四五日ヲ経又々高原郷ニ進撃ス、此日モ利無クシテ同郷ニ引退ク、爰ニ於テ末吉郷ノ内通山口ノ応援トナリ、翌日財部郷迄繰込ミ同所官原ニ堅守ス、爰ニテ一時戦フト雖トモ利無クシテ山ノ口郷迄引揚ル、板屋口敗軍ノ際綾郷迄引取ル、翌日宮崎ノ内時雨野(宮崎町)ニ進ミ守兵ス、爰ニ於テ二時間余烈數ク防戦スト雖トモ清武口(清武町)破軍ノ報ヲ得、宮崎迄引揚ル、夫ヨリ佐土原ニ引退キ川ヲ隔テ鬪戦スト雖トモ、米良口敗軍ノ際美々津ノ内飯谷村ト云フ所ニ引揚ル、同所ニ於テモ川ヲ隔テ、対戦ス、此時山家口敗軍ノ際(山崎、東郷町)川路村ノ様引揚ル、翌日我中隊外三中隊合シテ上井村迄進ミ守兵ス、爰ニ於テ敵兵襲来味方破軍ス、我左小隊川路村へ遊兵ノ故ヲ以テ直ニ繰出シ、同所川ヲ隔テ戦フ、

此時大利ヲ得追々味方モ走来リ爰ニ堅守ス、翌日延岡ノ内門并破軍ノ報ヲ得松山村迄引退キ、爰ニ於テ足痛ノ故ヲ以テ長井村山中ニ潜伏セシ時、同所敗軍ノ際敵兵ヨリ取囲マレシ時帰順仕候也、

明治拾壹年四月 鹿兒島県第二大区三小区 石原近秀

八一 久永喜兵衛上申書

昨拾年二月十七日第五番大隊壹番小队押伍トナリ鹿兒島(池上四郎隊長)発程、同廿一日熊本県下松橋へ着ク、同夜川尻マテ繰出シ翌廿二日熊本城攻撃、暫時ニシテ三間町へ転陣ス、同廿六日城ノ下ニテ戦ヒ勝利ヲ得、三月上旬田原口進軍、同地山手ノ西方ニ於テ進撃大ニ勝利ヲ得タリ、又此地ニ於テ防戦スル事十余日、同月中旬田原口敗レノ節植木口へ引揚ケ、同所町裏ニテ交戦大勝利、荒木村ニ転陣ス、同月下旬木留口進軍同地ニテ連戦、旧三月初旬矢部ニ引揚ケ江代ニ於テ正義五番中隊中隊長トナリ、夫ヨリ馬見原(本村)へ進撃、利無クシテ三田井へ引揚ケ、此地ニ番兵スル事(蘇陽町)數十日、旧四月初旬敵兵襲来此時敗軍ニテ延岡ノ内中村(日之影町)

町ニ引揚、此地ニ防戦スル事拾余日、旧五月三日楠原口(日之影町)進撃ノ際銃創ヲ受ケ延岡病院へ入室、旧七月上旬同所ニ於テ自首帰順仕候也、

鹿兒島県第二大区

三小区

明治十一年四月

久永喜兵衛

八二 宮之原良明上申書

昨十年丑二月拾六日(柳野利秋隊長)第四番大隊五番小隊兵士ニテ鹿兒島県発程、同月廿四日熊本県下植木へ着ク、番兵シ三月四日(玉東町)吉次ニテ戦ヒ其時官兵大敗也、同シク五日(玉東町)二保ニ到リ戦ヒ利無クシテ引揚、翌日ヨリ(植木町)圓臺寺村山ニ於テ暫時防戦致シ、終ニ同所相敗レ木留へ退キ二十日位番兵シ、數度相戦ヒ互ニ勝利ナク、四月六日同所引揚ケ、夫ヨリ同月九日御船ニ於テ交戦勝利アリ、同拾三日官兵寄せ来リ交戦味方終敗セリ、夫ヨリ矢部へ引揚ケ、夫ヨリ人吉諸所ヲ経テ鹿兒島へ歸リ、(タシノト)韃韃冬々(是レ地名ナリ)へ番兵ヲ張り數度相戦フ、六月上旬川内口相破レ後ロヨリ来リ戦ヒ、其時手負シ都之城病院へ入院致シ、亦宮崎ニテ帰隊、行進七番中(日置吉左衛門中隊長)

隊監軍トナリ、夫ヨリ諸所ニテ戦ヒ延岡長井村ニ於テ諸隊合併、分隊長トナリ、同所ニ於テ降兵、島ノ浦ヨリ九月廿日帰順仕候也、

鹿兒島県

明治十一年四月

宮之原良明

八三 町田實堅上申書

私儀(田代五郎隊長)第二炮隊兵士ニテ明治十年第二月拾七日鹿兒島発程、(球磨)求摩人吉ヲ経、同月廿一日肥後国熊本ニ着ス、本日同所花岡山ニ第一炮隊ト共ニ炮台ヲ据へ、城中へ攻撃スル事四五日、夫ヨリ四方地原ニ転シ炮六門ヲ据へ炮撃ス(此時花岡山ヲ第一砲隊、愛ニ於テ地形探索シ赤尾口ニ転ス、愛ニ炮二門ヲニ據ル)以テ炮撃スル事數日、亦出町口ニ移シテ炮撃ス、一週間位シテ川尻口破軍ノ際我炮隊モ出町口ヨリ旧三月三日頃登島村迄引揚ル、同五日頃木山ヲ経テ田原村ト云フ所ニ引ク、滞陣スル事四五日、此時振武拾番中隊半隊長トナリ、愛ニ於テ振武全軍ヲ以テ鹿兒島進軍ノ軍議決ス、因テ我拾番中隊モ求摩人吉ヲ経、旧三月中旬頃鹿兒島県下上伊敷村ニ着ス、愛ニ守兵スル事數十日、旧五月拾四日頃

上 宮 城 県

武村戦争ノ節左小隊ヲ以テ応援トス、同所炮台ニテ戦フ事終日、利アラス水上坂迄引揚ル、翌拾五日入來口ノ敵兵味方ノ背後ニ出ルヲ以テ同日午後川上村ニ引揚ル、同所ニテ翌拾六日半日位戦フト雖トモ利無ク蒲生郷ニ引上ル、同所ニテ同隊ノ小隊長トナリ、夫ヨリ加治木郷ノ内菑蒲谷ト云フ所ニ兩日滞陣、爰ニ於テ敵兵志布志郷ニ上陸致シ屯在セシ報ヲ得、其時拾番中隊並ニ外一中隊ヲ以テ末吉郷迄進軍、爰ニ一日滞陣翌日志布志ノ内山之口ト云フ所ニ進撃スト雖トモ、敵兵大崎郷ニ引退キ、故ニ戦ハスシテ我兵岩川郷ニ引揚ル、途中月野村ニテ暫時戦ヒ夜ニ入り利ナクシテ岩川郷ニ引揚ケ、翌日恒吉郷ニ進ミ振武全軍ト合シテ、翌日百引郷ニ進撃ス、敵兵斃者百余名、此日炮二門其他銃器・彈藥等分捕教知レス、生捕百余名、本日味方ノ兵ヲ恒吉郷ニ引揚ケ、翌日大崎郷ノ内荒佐村ニ進撃スト雖トモ利無キニ因テ一時同所引揚ケ、同郷麓ニ翌日進撃ス、此日敵兵斃ル者数十名、同日兵ヲ志布志郷ニ引揚ル、四五日滞陣ス、夫ヨリ庄内ニ進ミ翌日山田郷ノ内嶽脇村ニ進ミ、翌日高原郷ニ進撃スト雖トモ利無クシテ嶽脇村ニ引揚ル、四五日ヲ経又々高原郷ニ進撃ス、此亦利ナクシテ嶽脇村ニ引ク、爰ニ於テ末吉郷ノ内通山口

ノ応援トナリ、翌日財部郷迄進ミ、同所宮原ニ守兵ス、

爰ニテ一時戦フト雖トモ利無クシテ山ノ口郷迄引揚ル、

翌日學貫マテ引揚ル、板屋口破軍ノ際清武迄引ク、爰ニ

守兵、翌日戦ヒ利ナクシテ同日宮崎迄引ク、翌日木脇村

ニ引ク、兩日滞陣、夫ヨリ佐土原ニ引揚ケ、川ヲ隔テ対戦

スト雖トモ米良口破軍ノ際美々津ノ内飯谷村ト云フ所ニ

引揚ケ、同所ニテ亦々川ヲ隔テ対戦スル事兩三日、此時

山家口破軍ノ際敵兵ヨリ前後ヲ囲マレ、不得止山中ニ潛

伏スル事四五日、夫ヨリ山野ヲ慕テ第八月廿八日鹿兒島

ニ帰区ス、因テ第九月廿六日自首帰順奉願候処、処刑相

鹿兒島県

明治十一年三月

町田實堅

八四 永田嘉市上申書

明治十年旧二月十二日第九大隊二番小隊押伍トナリ鹿兒

島県発程、熊本県下人吉へ着陣、当所三日程滞陣、夫ヨ

リ同県下八代へ進軍、途中ヨリ戦争致シ官軍敗走二里余

モ追撃ス、終ニ八代へ攻撃、戦ヒ二昼夜ニシテ既ニ八代

モ敗レントスルニ、味方彈藥尽果テ不得止神ノ瀨村(深層村)へ引揚ル、当村へ滯陣スル事一週間ニシテ亦々八代へ進軍ス、攻撃スル事三昼夜ノ連戦ニシテ遂ニ味方敗ヲ取り尚神ノ瀨村へ引揚ル、当所へ十余日モ滯陣、夫ヨリ我隊鹿兒島県下大口郷へ転軍ス、当所ニ於テ本營邊見十郎太ノ指揮ニ依リ隊号ヲ常山ニ番中隊ト改メ、半隊長トナリ直チニ山野郷ニ進撃ス、戦ヒ半日ナラスシテ官軍敗走深川(水俣市)迄追撃ス、当所ニ守リヲ付ケ、翌日官軍ヨリ進撃有之一昼夜ノ戦終ニ味方敗レ、尚山野郷へ引揚ル、夫ヨリ曾木郷(大口市)へ進軍戦ヒ央ニシテ銃創ヲ蒙リ、直ニ都ノ城病院ニ入ル、在院二週間余ヲ過キテ倉岡病院へ転ス、程無ク傷平癒致シ、奇兵ニ番中隊へ兵士ニテ入隊、直チニ佐土原ニ転軍ス、当所守兵ニテ戦ヒ得ス空敷高鍋(日向市)、富高新町へ転軍ス、当所戦ヒノ節足痛ニテ延岡長井村病院へ入り、当所ニ於テ官ヨリ用マレ降伏ス、直ニ宮崎護送相成、私宅謹慎被申付鹿兒島ノ様帰県仕、直ニ帰順仕候也、

鹿兒島県第二大区八小区

郡元村

明治十一年五月

永田嘉市

八五 高崎親良上申書

明治十年二月十五日(村田新八隊長)第二番大隊十番小隊兵士ニテ鹿兒島発程、同二十二日熊本城ニテ初戦、夫ヨリ高瀬(玉名市)・山鹿(山鹿市)・岩村(三加和町)ニ於テ官兵ト数々交战、夫ヨリ山鹿ヲ守リ殆ント二十日連戦、夫ヨリ植木へ退キ此地或ハ鳥ノ巢兩所ニ於テ数日相戦フ、熊本城困ミ解テヨリ大津へ引揚ケ、旧三月三日・四日・五日此地ニテ戦争、官軍大敗、五日夜同所ヲ退キ矢部へ引揚、四月下旬延岡へ出ル、五月上旬鹿兒島へ帰ル、(鹿兒島市)坂元邑ノ台場ヲ守ル、夫ヨリ大隅ノ地へ転ス、(鹿北町)市成・大崎・末吉其他各所ニ於テ交战ス、市成ノ戦ニテ我半隊長銃創ヲ受ケ、然ル処半隊長心得ニ拳ラレ、八月十四日延岡門川ニテ戦ヒ、終ニ降伏ス、

鹿兒島県下市來郷

第二十三大区一小区四十四番地

十一年二月

高崎親良

八六 谷元延清上申書

明治十年二月十五日第一番大隊付大小荷駄ニテ鹿兒島発程、数十日間滞陣諸隊ノ賄方等ノ義ヲ致シ候、諸隊ハ植木其外田原諸所へ出張相成居候、然ル処四月十三日比ニ至リ川尻口敗軍ニテ矢部ノ様引揚ケ、爰ニテ諸隊編制相成候ニ付、夫ヨリ求摩人吉ニ至リ、八代口諸隊ノ大小荷駄へ關係シ、同所五月卅日比敗軍ノ節鹿兒島県下吉田郷(えびの市)へ引揚ケ同所へ数日滞軍致シ居候処、同所相敗レ候ニ付、飯野其外諸所ヲ經テ都之城ニ至リ数日滞軍候処、末吉郷(えびの市)其外諸所ノ戦ヒ利アラス宮崎へ転陣、暫ク滞軍イタシ、夫ヨリ延岡へ転軍終ニ長井村へ被囲候処、諸隊人員モ相減シ候ニ付惣軍ヲ前・中・後三分チ、八月十七日囲ヲ突出、中軍モ随ヒ山中或ハ間道ヲ經テ鹿兒島須木(宮崎県須木村)へ出ツ、夫ヨリ小林、飯野等ヲ經テ九月一日鹿兒島へ入城、諸隊ノ賄等イタシ九月二十四日降伏仕候也、

鹿兒島県第一大区一小区

十一年二月十七日

谷元延清

八七 上村勘之丞上申書

明治十年四月下旬勇義九番小隊兵士ニ加入、隈之城(川内市)向田へ番兵、五月下旬阿久根へ操出シ野田郷ノ戦ニテ疵ヲ受ケ罷帰リ、八月初旬隈之城警視派出所ニ於テ帰順仕候処、自宅謹慎被仰付在宅中、再ヒ鹿兒島へ襲来之際、与セン(川内市)ト平佐郷迄出張候処、官軍道ヲ遮リ空ク帰宅、九月中旬谷山郷警視出張所ヨリ御呼出シニテ、同月下旬長崎裁判所へ被差廻候也、

鹿兒島県下永利郷

十一年二月十七日

第二十七大区二小区十六番地
上村勘之丞

八八 石神音助上申書

昨十年旧二月十一日鹿兒島発足、県下大口郷ニ至リ、遊撃七番中隊兵士ニ編入、同月十九日熊本県二本木へ着スルヤ直ニ御船ノ町へ番兵致シ、其後矢部萬坂峠(矢部町)へ番兵スル事八九日、当所ヲ引揚ケ人吉へ転ス、速ニ当所ヲ引揚

ケ鹿兒島県下大口郷へ転ス、此所ニテ初戦闘ヒ利アラス

吉田郷へ引揚、同廿七日又熊本県下水俣ニテ戦フ事数日、

旧四月七日猪之嶽へ退キ都之城へ引揚ク、同所ニ於テ分

隊長心得ト成、当所引揚ケ宮崎、佐土原其他諸所ノ戦ヲ

經テ延岡ニ至ル、長井村ニ於テ亦兵士トナリ暫時戦ヒ、

終ニ降伏シ、高鍋ニ於テ自宅謹慎被仰付、直ニ帰宅致居候

処放免ニ相成候後、初発分隊長心得ノ処自訴仕候也、

鹿兒島県下市來郷

第廿三大区五小区五百六十六番地

十一年二月

石神音助

八九 兒玉實明上申書

明治十年(稱野利秋隊長)第四番大隊一番小隊ノ伍長ニ挙ラレ二月十六日

鹿兒島発程、同廿四日熊本県下山鹿へ着ク、翌廿五日同

所ニ於テ開戦、夫ヨリ永野原辺ニテ戦ヒ、三月上旬鳥ノ

巢ニ引揚ケ、同廿八日平病ニ罹リ木山病院ニ入室、四月

上旬帰県、六月中旬劔刀隊半隊長ト成リ、志布志郷ノ内肥

麦田川ノ戦ニ銃創ヲ被リ都之城病院ニ入り、九月上旬帰

郷ノ上帰順仕候也、

鹿兒島県下高山郷

第七十六大区三小区

十一年第二月

兒玉實明

九〇 尾辻佐八上申書

明治十年四月三日鹿兒島県発程、同七日熊本県下八代口

へ着ク、破竹五番小隊分隊長トナリ、該地明建山ニ於テ

戦ヒ利アラス、直ニ人吉へ引揚ケ、夫ヨリ諸所ノ台場ヲ

守リ、終ニ延岡長井村ニ官兵ニ被圍降伏仕候也、

鹿兒島県加世田郷

第六大区一小区

十一年二月

尾辻佐八

九一 帖佐正之進上申書

明治十年二月十七日(池上西郎隊長)第五大隊九番小隊兵士ニテ鹿兒島發

程、同廿一日熊本県松橋駅へ着シ、翌廿二日午前三時同

所出立同八時頃熊本城攻撃、同午後二時頃ヨリ植木口へ

進軍ス、已ニ日没ニ及ヒ同所へ番兵シ、翌廿三日木之葉

上 城 宮 二

村へ進撃シ、終日ノ戦ニテ遂ニ接戦トナリ官軍南ノ關ヲ差シテ敗走ス、味方死傷廿余名、官軍死骸百余名ヲ棄テタリ、同日官軍ノ本營ヲ抜キ同營ニテ小銃三百挺・彈藥三万発余・金五百円・軍馬壹疋分捕、味方ハ直ニ植木へ引上ル、同廿五日山鹿へ官軍襲來スルニ依リ、直ニ進撃シ半日ヲ過スシテ官軍百七名ノ屍ヲ遺テ、敗走ス、味方死傷十余名ナリ、直ニ味方植木へ引上ル、其後田原坂へ官軍ヨリ進撃アリ、終日戦ヒ遂ニ接戦シ、官軍七百廿余名屍ヲ遺テ、敗走ス、味方死傷三十余名アリ、味方ハ同所ヲ固ク守ル、其後木留口^(植木町)へ進撃ス、官軍田原ヲ差シテ敗走ス、我隊ハ同所へ守ヲ付ル、夫ヨリ諸方へ進撃ス、其後三月十五日ニ至リ木留口ナル奈知山へ大進撃ス、終日ノ奮戦ニテ追々近ツクニ味方彈藥尽キテ吉次越^(玉東町)へ守ヲ變ヘル、同所ニテ押伍トナリ諸方へ進撃ス、同所ヲ守ル事殆ント一週間ニシテ、遂ニ求摩人吉隊ノ守口ヨリ敗レ、止ヲ得ス邊田野村ニ引上ル、同所へ守ヲ付ル、官軍追々襲來シ直ニ官軍ヨリ進撃アリ、戦フ事四日間ニシテ遂ニ官軍屍或ハ銃ヲ棄テ吉次越ヲ差シテ敗走ス、味方ハ尚ホ堅ク守ルニ、川尻口敗戦ニ及ヒ各隊木山へ引揚ル、途中長峯村^(熊木町)ニテ戦ヒ直ニ諸隊野邊^(矢部町)へ引揚ル、夫ヨリ求摩ノ方へ引揚ル、同

所ニテ隊号ヲ行進隊ト変稱シ、直ニ鹿兒島へ赴キ吉野村^(鹿兒島市)へ守リヲ付ケ直ニ進撃ス、勝敗決セス、其後官軍ヨリ進撃アリ、半日ノ戦ニ味方大勝利ヲ得官軍五十余名ノ屍ヲ棄テ、敗走ス、味方討死ナシ、手負七八名、同日銃器三十八挺ヲ取ル、陸軍々曹壹名ヲ生虜ス、直ニ斬ス、其後官軍大進撃シ來ル、遂ニ味方撃破セラル、翌日未明ヨリ味方進撃シ直ニ撃破ス、官軍八百余名ノ死屍ヲ遺テ、敗散ス、同日銃器廿余挺・彈藥五千発余ヲ取ル、味方ハ死傷廿人ニ足ラス、其後官軍ヨリ武村^(鹿兒島市)へ大進撃アリ、終日ノ戦ニ彈藥尽果テ味方吉野村へ引上ル、一時同所ニテ防戦シ是モ彈藥乏キ故直ニ同県下加治木郷ニ引揚ル、同所ニテ敗戦福山郷へ引上ル、一時同所ニテ防戦、夫ヨリ末吉郷へ引上ケ、同所岩川村^(大隅町)へ邊見十郎太ノ指揮ヲ以テ進撃ス、遂ニ彈藥尽ルヲ以テ直ニ末吉ノ町へ引揚ケ、翌日官軍大進撃ニ付味方散乱シ、直ニ宮崎ヲ差シテ引上ル、途中諸所ニ戦フ、遂ニ宮崎ノ川ニ守ヲ付ル事一週間ニシテ終ニ敗レ美々津^(日向市)へ引揚ル、同所ニテ分隊長トナリ美々津本道ヲ守ル、戦フ事数日ニシテ終ニ敗レ富高新町^(日向市)へ引揚ントスルニ、遂ニ前後ヲ囲マレ止ヲ得ス同所山中ニ伏シ、夜ニ入り同所ノ川ヲ忍ヒ渡ントスルヲ、第二旅団ト出逢

ヒ遂ニ降伏シ、同八月下旬帰宅仕候也、

鹿兒島県第一大区五小区西田村

百九十五番地

明治十一年三月

帖佐正之進

九二 池田兼爲上申書

(編野利秋隊長)

明治十年二月第四大隊九番小队兵士ニ編入セラレ十六日出発シ、同廿二日熊本県川尻ノ駅ニ達シ、同日午前八時頃ヨリ熊本城攻撃、午後三時ニ至レトモ勝敗決セス、時ニ小倉方面ヨリノ援兵植木ニ着スルノ報アリ、直ニ進軍(北部町)鹿子木駅ニ至ルニ官兵ノ斥候間近ク来リ、午後七時頃ヨリ戦端ヲ開キ勝利ヲ得官兵敗走シ、此時味方敵ノ聯隊旗ヲ取ル、同廿五日山鹿ノ駅へ進軍ス、同廿六日ノ朝官兵襲ヒ来リ戦ヲ開ク、勝利ヲ得テ敵ヲ追退ク、此ノ日官兵ノ死屍百余名アリ、同廿八日南ノ關へ進軍ノ議決定アリ、(山鹿市)我隊八間道ヨリ進ム、時ニ敵ノ哨兵平山村ニアリ、速カニ追退ケ板橋迄進ミ、翌廿九日八時ヨリ岩村ニ進軍ノ処、午後三時ニ至リ敵退ク、味方モ山鹿ノ駅へ退キ是ノ処ニテ五タヒ戦ヒ悉ク勝利ヲ得ル、三月十八日田原坂敗レテ

(菊池市)

限府へ退ク、是ノ処ニテ戦フ事四タヒ、時ニ官兵味方ノ

道ヲ遮ルノ勢ヒニ依リ竹廻へ退キ、夫ヨリ応援トシテ鳥(竹道カ、合志町)ノ巢ニ至リ勝利ヲ得ル、是ニ防戦スル事四五日、時ニ川

尻口敗軍ニ及ヒ大津へ退ク、此ニ於テ戦フ事二度、勝利

ヲ得、夫ヨリ木山口敗軍ニヨリ矢部へ引揚ケ、又人吉迄

退ク、夫ヨリ延岡へ進軍、是ニ滞陣スル事四十余日、時

ニ豊後重岡へ進撃ノ決議アリ、吾ハ切込、谷口ヨリ進ミ容

易ニ官ノ砦ヲ取ルト雖トモ風雨烈シク守ル事不能(北川町)鑑名迄

退キ、夫ヨリ陸地峠へ進ミ此ニ防戦スル事十有六日余、

偶官兵大挙シテ襲ヒ来リ小ハ大ニ敵スル事不能遂ニ敗軍

ニ及ヒ、(北川町)矢ケ内迄退キ此ニ於テ分隊長ニ挙ケラレ防戦十

余日、時ニ延岡口敗走ニ及ヒ豊後口ノ兵ヲ挙テ延岡へ総

進撃ノ議決ス、進軍謀成ラス長井村ニ囲マル、八月十八

日敵ノ囲ヲ破リ、愛ノ嶽及地藏ヶ峯・堀川・三田井・七

ツ山・(南郷村)鬼神野・(高千穂町)全上・(猪塚村)(鬼神野)・(萩町)神門・岸野・横川・踊・溝邊・蒲生等ノ敵ヲ敗リ、

悉ク勝利ヲ得テ、九月一日鹿兒島城ヲ乗取り候際銃創ヲ

蒙リ、谷山病院ニ入り尔後帰宅仕候也、

鹿兒島県下栗野郷第五十五大区

一小区廿二番地

明治十一年三月

池田兼爲

九三 本田尚方上申書

二 宮 城 県 上

明治十年二月十七日第二炮隊押伍ニテ鹿兒島発足、同廿二日熊本県下ニ着シ則花岡山ニ炮台ヲ築キ、翌廿三日曉天ヨリ城中或ハ段山・八幡山・県庁・準中学校ニ向ケ炮撃止ム時ナシ、三月一日ニ至リ戸坂村ノ内ニ要地ヲ占シ(熊本市)我一分隊此地ニ転シ発撃ス、同八日頃我砲再ヒ花岡山ニ抛リ、同十一日段山或ハ八幡山ノ戦ヒ烈シク、此時横撃スル事一昼夜半、此時八幡山ヨリ東京巡查降伏シ来ル、因テ城中ノ形況ヲ問フ、曰、此ノ地ヨリ発スル所ノ炮丸悉ク達シ堪ヘ難キニ因リ、本管既ニ移転シ各所ニ於テ炮丸ノ為死ニ至ル者八十有余名アリト、同廿三日頃官兵城中ヨリ出町口ヘ襲ヒ来リ、互ニ炮銃相発シテ鬪戦、我隊応援トシテ到ル、午後六時頃ヨリ官兵城中ヘ退ク、我隊翌朝花岡山ニ帰り、同下旬頃松橋ヘ応援トシテ赴キ戦フ事、二昼夜ニシテ勝敗決セス、此所ニ於テ小隊長ニ挙ラレ、直ニ海岸ヘ番兵ヲ置ク、同日午後三時頃松橋敗軍ノ報アリ直ニ此地ヲ退キ、(天明町)二町或ハ板橋ニ壘ヲ築キ防戦、四月十一日未明太郎兵衛渡シヨリ密柑ノ關ヘ官兵進ミ来リ、(宇土市走馬)(天明町美登里)

我隊応援トシテ出ツ、同十三日迄連戦格闘、二町或ハ板橋ノ中央海岸一分隊ヲ以守ルノ処、此夜第九時頃ヨリ官軍数船ヲ以襲撃スルノ報アリ、則一小隊ヲ纏メ到ル、至レハ則官兵既ニ上陸セリ、乃奮戦此夜二時頃ニ至リ官兵漸ク増加シ我隊次第ニ減スルニ因テ引上ケ、翌十四日曉天ヨリ再ヒ各隊ヲ以テ進撃シ我隊既ニ接戦ニ及ハントス、時ニ銃創ヲ蒙リ病院ニ入ル、七月上旬療養ノ為帰県、八月十八日帰順仕候也、

鹿兒島県第一大区四小区

百十九番地

明治十一年三月

本田尚方

九四 池田正義上申書

明治十年第二月十五日(村田新八隊也)第二大隊一番小隊押伍ニテ鹿兒島発程、鹿兒島県下大口郷ヲ經テ水俣ヘ出テ小川ノ駅ニ至ル、時ニ熊本城内光煙天ニ輝ク、此夜川尻ヨリ報アリ、台兵道路各所ニ胸壁ヲ築キ道ヲ遮ルト、乃翌日黎明途ニ上リ、同廿一日已ニ川尻ニ達スレハ、則先鋒ノ兵已ニ戦ヲ開キ、台兵数人ヲ捕虜シ且銃器ヲ得タリ、人氣奮然此

日午後四時(熊本市)高橋ニ向ヒ官兵百貫石ヨリ城中ノ応援ヲ絶ン

ト之ニ備ル密也、然ルニ斥候隊百貫石ニ到レハ、官兵凡一

小隊小船ヨリ上陸セルニ際会シ開戦、戦卒数人ヲ捕ヘ本

部ニ護送ス、熊本城中攻撃ノ炮声天地ニ震ス、翌廿二日

城ヲ囲ミ戦フ、数刻後出町ニ引揚、翌廿三日大津ニ至リ

敵ヲ待ツ数日、同廿九日田原坂ニ進軍、奮戦格闘日ヲ經

終ニ銃丸ニ中リ、川尻病院ニアリ治療中、八代方面ノ我

兵数戦利ヲ失スルニ当リ(益城町)木山ニ転院、同所ヨリ帰県治療

中、旧三月中旬ニ至リ鹿兒島前ノ濱港ヘ軍艦数十艘ヲ以

ヒ来リ逼ル、此時勇義彦番小隊ノ小隊長トナリ、出水郷

其他阿久根郷等ノ各所ニ戦ヒ、各々敗潰、大口方面ノ官

軍鹿兒島ヘ連絡ヲ通シ、我進路ヲ遮断スルヲ以テ、帰宅

仕候也、

明治十一年三月

鹿兒島県下第廿四大区二小区

池田正義

九五 中根正胤上申書

(協同隊長)平川惟一・(薩軍本營誌)宮崎八郎・(半隊長)有馬源内等ト謀リ十年二月十八日
小川駅ニ至リ、先鋒別府晉介ニ応援セン事ヲ約シ、即日

熊本ヘ帰り同志ト会シ、薩兵各隊攻城ノ嚮導タラシメン

事ヲ八郎等ニ議シ、尚ホ廿一日八郎ト川尻ノ駅本營ニ到

リ、海軍ノ恐レアルヲ以テ防備ヲ嚴ニセン事ヲ主張ス、

則其議ニ決シ、直ニ先鋒隊ヲ導キ海岸ニ配賦ス、即夜軍

艦ヨリ遣ル処ノ水兵数名ヲ捕ヘ且端船式艘ヲ取ル、翌廿

二日攻城ノ戦況ヲ候フ、台兵固守抜ク能ス、又東兵山鹿

(玉名市)高瀬ノ諸道ヨリ来援ノ報アリ、則同志数名ヲシテ諸道ノ

嚮導タラシム、同廿四日曩ニ各隊ヘ分賦スル処ノ同志ヲ

纏メ出町小学校ニ集合シ、隊伍ヲ編制シ協同隊ト号シ、

投票ヲ以テ三官ヲ定メ、八郎ト自分ハ員外トナリ薩ノ本

營ニ屬シ斥候又ハ伝令使トナリ、高瀬・山鹿・田原其他

各戦地ニ奔走ス、八郎ハ邊見・別府ヲ大口ニ迎ヘ八代ヲ

襲ヒ遂ニ斃ル、四月廿日御船ニ於テ敗軍ノ際銃創ヲ受ケ、

日州地方ヘ引揚ケ高岡病院ヘ入ル、六月下旬疵愈ユ、我

協同隊大口方面ニ在ルヲ聞キ同地方ヘ発ス、途ニシテ大

口敗レ我隊本城ヲ守ルト聞ク、六月卅日横川ノ駅ニ至ル、

時ニ邊見十郎太ニ出会シ、夫ヨリ同人ニ屬シ即日加治木

ニ赴キ別府晉介ヲ問フ、邊見ハ即夜横川ヘ帰り余ヲシテ

同地ノ戦況ヲ見セシム、翌日東軍大崎ヘ上陸背後ヲ襲フ

ン事ヲ請フ、許サスシテ曰、是ヲ邊見ニ報セヨト、是ニ於テ南北ニ別ル、途ニシテ炮声ヲ聞キ疾ク馳テ横川ニ至ル、時ニ戰酣ナリ、本城ヨリ防戦數合兵疲レ防キ難シ、止ムヲ得ス(牧園町)、退キ夫ヨリ諸所ニテ防戦或ハ進撃スト雖毎戦利ナク、遂ニ各方面大敗トナリ、七月卅日(船原町)日州船引ニテ防戦ノ際左肺ヲ傷キ、延岡へ引上ケ治療ヲ加フ、日ナラスシテ同地モ戦地トナル、止ムヲ得ス近傍ノ民家ニ避ク、又日ナラスシテ官兵進入終ニ捕ハル、実ニ八月十五日也、

熊本県第四大区二小区

九百三番地

明治十一年第三月

中根正胤

九六 荒田彦七上申書

明治十年旧二月十四日第七番大隊四番小隊兵士ニ編入、

同廿三日大口郷出発、

(三月廿八日)
(四月十二日)

同廿九日八代口へ進撃、奮戦格闘

六日ニ至ル、終ニ敗レ退キ、佐伯ニ於テ(今木、声北町)鷗翼六番中隊右

小隊分隊長トナリ、同所ニテ戦ヒ大ニ利ヲ得タリ、夫ヨ

リ求摩ノ内尻屋ニ番兵、夫ヨリ宮崎敗戦ノ節帰郷仕候也、
(熊野カ、味磨村)

鹿兒島県下襲山郷

第六十三大区一小区

明治十一年第三月

荒田彦七

九七 最勝寺精一郎上申書

明治十年二月十六日三番大隊三番小隊ニテ鹿兒島発足、
(永山弥一郎隊長)

同廿二日熊本県下へ着ス、旧二月十二日植木へ進軍奮戦

銃創ヲ被リ、川尻病院へ入り、旧三月五日帰県、同五月

廿四日日本隊へ歸リ、(兒五軍次中隊長)正義一番中隊半隊長トナリ、日州門

川敗戦ヨリ帰宅仕候也、

鹿兒島県下襲山郷

第六十三大区二小区十四番地

明治十一年第三月

最勝寺精一郎

九八 赤塚源太左衛門上申書

明治十年二月十五日第一大隊十番小隊給養方ニテ鹿兒島
(藤原国幹隊長)

出発、同廿一日熊本城攻撃勝敗不決、長六橋ニテ戦フ事

数日、三月中旬本妙寺下へ転陣、同所ニテ戦フ事終日官

軍退ク、四月中旬飯田山并御船ニテ戦ヒ利アラス、矢部

へ退キ椎葉山ヲ経テ人吉ニ出、干城七番中隊ト編制アリ、

鹿兒島県下大口郷ニテ連戦終ニ利ヲ失ヒ、吉田郷へ退キ

又山野郷ニテ戦ヒ大ニ勝ツ、同所滞陣中干城隊大小荷駄

心得トナリ、大口郷小川内敗軍ヨリ、本城、横川、踊、庄

内へ転陣、庄内ニ於テ雷撃隊トナル、夫ヨリ山ノ口並ニ

宮崎ニ退キ、終ニ富高ノ内平岩村ニ於テ官軍ニ遮ラレ、

山路ヲ経テ襲山郷ニ出、同所ニ於テ帰順仕候也、

鹿兒島県第三大区三小区

五十八番地

明治十一年第三月 赤塚源太左衛門

九九 西牟田勝太上申書

明治十年第三月八日鹿兒島発足、同十二日熊本県求摩人

吉へ着シ、切隊二番隊兵士ニ編入、即チ鹿兒島県下福山

郷へ引揚番兵ス、旧六月五日柴立ニ於テ戦フ、同廿四日

敗戦帰宅、同廿七日帰順、旧七月廿七日我兵鹿兒島城へ

突入ノ際檄文ニ応シ、同郷ノ内石垣浦迄出兵赴路ヲ遮ラ

レ帰宅仕候也、

鹿兒島県下顯娃郷

第十七大区

明治十一年第三月

西牟田勝太

一〇〇 福島武二上申書

明治十年第二月十七日第五大隊七番小隊兵士ニテ鹿兒島

出發、同二月廿二日熊本城攻撃、翌廿三日木ノ葉ニ於テ

戦ヒ勝利ヲ獲、山鹿へ転戦、旧曆二月中旬鳥ノ巢并大津ニ

テ戦ヒ、敗レテ馬見原ニ退キ、同所ヨリ日州細島ヲ経テ

豊後臼杵ニ至ル、六月十六日分隊長ニ挙ケラレ、赤松谷ニ

於テ戦ヒ、延岡長井村ニ於テ帰順仕候也、

鹿兒島県下串木野郷

第廿四大区十二小区第四十一番地

明治十一年第三月

福島武二

一〇一 和田應介上申書

明治十年二月十五日第二大隊九番小隊兵士ニテ鹿兒島發

足、同廿二日熊本城ニテ開戦、夫ヨリ高瀬・木ノ葉・田

原坂ノ各所ニ於テ数々奮戦、夫ヨリ段山口ヲ守ル殆ント

式百五番地

十有余日、我兵熊本城ノ困ヲ解テヨリ木山へ引揚、四月

永山盛香

上旬御船并木山ニテ戦ヒ、矢部濱町へ退キ、五月上旬鹿

兒島県内山野郷或ハ大口郷ニテ戦ヒ、同所ニ於テ分隊長

一〇三 山名龜次郎上申書

心得トナリ、六月中旬横川郷大久保・財部其他諸所ニ於

明治十年旧曆三月廿日鹿兒島ニ於テ振武廿四番中隊兵士

テ戦ヒ、日向美々津へ転シ同所ノ戦ヒニテ散乱、本隊ニ

ニ編入、旧曆五月廿五日同県下武村ニ於テ戦争、同廿七

鹿兒島県下市來郷第廿三大区

日伊集院郷へ引揚、同所ヨリ帰宅、六月上旬帰順仕居候

一小区三百四十九番地

處、七月下旬我兵鹿兒島へ突入ノ際檄文ニ応シ喜入郷迄

明治十一年三月

和田應介

出兵ノ処官兵ニ遮ラレ直ニ帰宅、八月七日縛ニ就キ候也、

鹿兒島県下指宿郷

一〇二 永山盛香上申書

明治十一年三月

山名龜次郎

明治十年旧五月十五日郷邑発足、同十六日宮崎へ着、当

第十五大区二小区

地警戒凡十四五日、八月八日米良ノ内小川へ着スルヤ、

明治十一年三月

一〇四 椎原國幹上申書

直ニ戦ヲ開キ勝敗不決、同十日干城七番中隊へ編入小隊

昨十年二月十七日第五番大隊大小荷駄方ニテ鹿兒島発足、

長トナリ、同十二日天堤進撃終ニ戦ヒ敗レ、夫ヨリ銀鏡村

同月廿二日熊本城攻撃シ、同所春日村ニ隊々俱々一同敷

へ引揚二本松へ番兵ノ処、高鍋ノ内原村へ出張ノ官兵へ

十日滞陣、賄方或ハ彈藥等手配運送ス、其外植木・山鹿

自首イタシ帰順仕候也、

駅辺ニ隊々分配大小荷駄ニモ銘々相付進軍ス、然ルニ同

二 宮城県上

鹿兒島県第百四大区一小区

県ノ内川尻方面敗軍トナリテ同県下矢部ニ引揚、各隊編制トナリ夫故私モ給養方ニ差寄り相勤、又候求摩人吉へ同断、夫ヨリ同五月廿日頃鹿兒島県下諸郡吉田且八横(宮崎県えびの市)川郷滞陣ノ処、追々混雜成立、日州ノ内都ノ城並佐土原、高鍋、延岡諸所へ亦々同断、折柄手足へ痛所有之、步行等調ヒ難ク処ヨリ、行路ニ於テ同所七ツ山(龍塚村)ト申ス山中ニテ官軍ヨリ取巻レ、終ニ帰順仕、同所病院へ入室快方ノ上自宅謹慎被仰付帰県仕形行申出候処、警視御出張ヨリ御用召有之、直ニ仮檻倉ニ召留ラレ候儀ニ御座候、此段形行申上候也、

鹿兒島県第二大区一小区

明治十一年三月

(西郷隆盛敗走)
椎原國幹

一〇五 西方爲兵衛上申書

明治十年第三月九日鹿兒島出発、同十四日熊本県下春日村へ着、遊撃四番小隊給養ニ編入セラレ安政橋ヲ下ル、高田原へ守兵ノ処、城兵八代方面ノ官兵ト連絡ヲ通シテヨリ、矢部濱町へ退キ、夫ヨリ鹿兒島県下三田井へ赴キ(宮崎県高千穂町)一時守兵、同所ヨリ皆越(球磨郡上村)ノ援兵ニ赴キ大勝利、同所へ回

守スル凡三十日、又綾郷(綾町)へ引揚居候節半隊長ニ挙ラレ、同所敗軍佐土原へ退キ敗戦、美々津へ退キ河辺へ守兵ノ処、九月上旬富高新町敗潰ノ節美々津ニ於テ帰順仕候也、

鹿兒島県下日置郷

明治十一年三月

第十二大区一小区五百八十二番地
西方爲兵衛

一〇六 山口吉左衛門上申書

明治十年二月十五日(村田新八隊長)第二大区一番小隊兵士ニテ鹿兒島県下出発、同廿一日熊本県へ着シ、翌廿二日肥後ノ内大津へ進軍番兵、同廿九日ヨリ田原坂へ到リ即日開戦、銃創ヲ蒙リ川尻病院ニ入り療養、旧曆二月十日帰県、旧七月(三月廿四日)中旬帰順仕居候処、九月一日我兵鹿兒島城へ突入ノ際、翌二日応援ノ為メ西田町迄出兵候処、官兵ノ遮ル所トナリ半途ニシテ帰宅仕候也、

鹿兒島県下山谷郷

明治十一年三月

第四大区三小区七百四十八番地
山口吉左衛門

一〇七 椎野喜三太上申書

明治十年四月廿九日振武武拾番小隊兵士ニテ鹿兒島草牟

田村へ至リ、五月十二日於吉野村戦ヒ、翌十三日戦ヒ利

ヲ得、同十六日敗戦蒲生郷へ引揚、又上庄内へ同断、未

吉郷ノ内通山(財部町)ニテ旧六月十六日敗軍、本隊ニ離レ同廿日

帰宅、同廿二日九月一日再ヒ鹿兒島城へ突入ノ際、本營

ノ檄文ニ応シ途中迄出兵、官兵ニ遮ラレ帰宅仕候也、

鹿兒島県下谷山郷第四大区一小区

六百八十番地

明治十一年三月 椎野喜三太

一〇八 柏原勇之進上申書

明治十年二月十五日(永山脈一部隊長)三番大隊一番小隊兵士ニ編入シ鹿兒

島発足、同廿二日熊本ニ到着シ速カニ城ニ攻撃シ、筒口

ニ番兵スル事廿余日、同所ニテ痘瘡ニ罹リ川尻病院へ入

室、平愈セサルニ因リ帰県、平愈ノ後戸長募兵ノ小隊長

ニ選挙セラレ、志布志菱田川(有明町)ニ於テ戦争シ、夫ヨリ末吉

郷迄引揚ケ、奇兵隊六番中隊給養トナリ、延岡ノ内山陰戦(東郷町)争ノ際取囲マレ、山路ヲ経テ帰郷仕候也、

鹿兒島県下高山郷第七十六大区

一小区十四番地

十一年二月

柏原勇之進

一〇九 北方盛二上申書

明治十年旧三月八日(四月廿一日)鹿兒島県出発、同十五日熊本県当地(領屯)

口ニテ常山隊三番中隊分隊長ニ挙ラレ、同廿八日黒肥地(多良木町)

ニ於テ戦ヒ手負、五月廿七日帰県、同廿九日自首帰順仕

候也、

鹿兒島県下大始良郷

第八十二大区一小区

十一年二月

北方盛二

一一〇 梶原村右衛門上申書

明治十年四月十九日勇義五番小隊兵士ニ編入、同二十日

大村へ着シ小隊長心得トナリ、夫ヨリ熊本県久木野(永保市)へ操

出シ番兵ス、五月上旬給養方トナリ、夫ヨリ日向へ転シ
佐土原郡(マ)ノ郡ニ於テ降伏シ、高岡警視署ニ於テ自宅謹慎
被仰付罷帰居候処、十一月上旬鹿兒島警視派出所ヨリ御
呼出ニ相成り申候也、

鹿兒島県下市來郷

第廿三大区一小区四百十一番地

十一年二月

梶原村右衛門

一一一 土屋宗太郎上申書

昨十年旧四月一日遊撃隊八番小隊小隊長ニ挙ラレ鹿兒島
県出発、同二日出水郷ノ内米之津(出水市)へ着ク、同十三日出水
郷ノ内矢筈嶽(肥前國境)へ着ク、此所へ番兵、同二十一日交戦終ニ
利アラス、夫ヨリ宮之城へ引揚、同所ニ於テ旧五月十二日
交戦利アラス、夫ヨリ帰区、同二十五日帰順自首仕候也、

鹿兒島県下高尾野郷

第卅七大区一小区六十二番地

十一年二月

土屋宗太郎

一一二 永井矢藤太上申書

明治十年旧三月六日常山隊三番中隊兵士ニ編入、同日発
足、同十一日人吉本營へ着ク、半隊長ニ挙ラレ頭地へ番
兵スル事数日、湯之尾(豪州町)ニ於テ戦ヒ、夫ヨリ大木場交戦ノ
際手負当所病院へ入室、平癒ノ上帰隊、本營へ届出候処、
巡邏兵士ニ下ケラレ、日州延岡ニ於テ帰順仕候也、

鹿兒島県下南方郷

第十九大区五小区三百九十六番地

十一年二月

永井矢藤太

一一三 橋元甚助上申書

明治十年旧五月四日出兵、於福山郷剣刀隊十番小隊押伍
ニ編入サレ、同郷ノ内掛川(佳例川)ニ於テ哨兵、末吉郷ニテ分隊
長ニ挙ラレ於同所開戦、宮崎ニ於テ戦ヒ、旧六月廿八日(八月七日)
於同所帰順仕候也、

鹿兒島県下佐多郷

第七十九大区一小区

明治十一年三月

橋元甚助

処、亦撃破セラレシ砌り山中へ潛身致シ、直ニ飯野出張
警視分署へ旧六月下旬帰順仕候也、

一四 黒田清定上申書

鹿兒島県加世田郷

第六大区八小区七百五十八番地

明治十年二月十七日(池上四郎隊長)第五番大隊五番小隊分隊長ニテ鹿兒

島発足、同廿二日熊本へ着、則ヨリ攻城、同廿三日木ノ葉(玉東町)

戦争ノ節手負致シ、川尻病院へ入り、四月七日出立同十

五日帰県致シ、鹿兒島大迫村ニ於テ養生致シ居、九月廿

六日帰順仕自宅謹慎罷在候処、十月廿四日警視出張所へ

御喚出相成候也、

鹿兒島県下第三大区二小区

明治十一年第三月

黒田清定

一六 川上彌之助上申書

明治十年二月十五日(村田新八隊長)第二大隊十番小隊兵士ニテ鹿兒島発

足、同廿二日熊本城ニテ開戦、夫ヨリ高瀬・山鹿(三加和町)・岩村ニ

於テ官兵ト数々交戦、夫ヨリ山鹿ヲ守リ殆ント廿日連戦

ス、夫ヨリ植木へ転ス、此地又ハ鳥ノ巢(西合志町)ノ両所ニ於テ数

日戦ヒ、八代敗潰後ヨリ大津へ引揚、旧三月三日ヨリ五

日迄此ノ地ニ於テ戦ヒ、五日ノ夜退キ矢部濱松(鹿)へ引揚、

四月下旬延岡へ出ル、五月上旬鹿兒島へ帰ル、坂元村(鹿兒島市)ノ

胸壁ヲ守リ、夫ヨリ大隅地へ転シテ市成・大崎・末吉郷(龍北町)

其他諸所ニ於テ戦争、市成ノ戦ニテ分隊長代理ニ挙ラレ、

八月中旬美々津ノ戦ニ敗レ降伏仕候也、

鹿兒島県第二大区四小区卅六番地

明治十一年三月

川上彌之助

二 宮城 県 上

一一五 石塚金助上申書

明治十年旧四月三日鹿兒島発程、熊本県下人吉へ着、破竹

式番中隊右小隊兵士ニ編入セラレ守兵致居候処、旧四月(五月卅日)

十八日頃敗戦ニ及ヒ、同所大畑村迄引揚防戦凡二週間、(入吉市)

終ニ敗レ、鹿兒島県下飯野郷迄引揚暫ク对壘ノ処、半隊(えびの市)

長被申付野尻郷岩瀬口へ守兵、且ツ同郷雨ヶ谷(天ヶ谷、野尻町)へ転陣候

七月初旬帰順仕候也、

一七 渡邊伴助上申書

鹿兒島県加世田郷

第六大区一小区百十四番地

明治十一年第三月

永田林左衛門

(桐野利秋隊参)

明治十年第二月十二日第四大隊十番小隊兵卒ニ編入サレ
同十六日出兵、同廿二日熊本城攻撃、即日植木へ進軍、

翌廿三日木之葉村ニ転戦、同廿八日木留(植木町)ニ於テ戦ヒ、三

月七日田原坂ニ於テ手負川尻病院ニ入り療養中、三月廿

一日木山(益城町)へ転院、同廿三日帰県、六月卅日福山郷ニ於テ

剣刀隊一番小隊ノ分隊長ニ挙ラレ、高隈山ニ於テ敗戦、

七月卅日帰郷ノ上帰順仕候也、

鹿兒島県高山郷第七十六大区

二小区卅六番地

明治十一年三月

渡邊伴助

七月初旬帰順仕候也、

鹿兒島県加世田郷

第六大区一小区百十四番地

明治十一年第三月

永田林左衛門

明治十年五月中旬頃出発、鹿兒島県下吉野村(鹿兒島市)へ着シ、行進

十四番小隊半隊長へ挙ラレ同所番兵致居候処、六月十二

日ヨリ二日進撃、同二十日頃当所引揚諸処ヲ経テ延岡へ

着、八月十七日同所長井村ニ於テ帰順仕候也、

鹿兒島県永吉郷

第十大区一小区

明治十一年三月

肱岡勘左衛門

明治十一年三月

渡邊伴助

明治十一年三月

肱岡勘左衛門

一八 永田林左衛門上申書

二〇 永井四郎上申書

明治十年三月六日鹿兒島発程、同十一日熊本県二本木へ

到着、遊撃三番小隊分隊長へ編入、則ヨリ当県下海岸鹽(阿内町)

屋村へ番兵、四月十五日頃木山村へ引揚防禦、同廿一日

敗走ノ際銃創ヲ蒙リ、夫ヨリ矢部ヲ経テ帰県ノ上療養、

明治十年二月十七日第五大隊五番小隊兵卒ニテ鹿兒島発

程、同二十二日熊本城ニテ開戦、夫ヨリ木之葉井山鹿(山鹿)ニ

於テ数々交戦、夫ヨリ田原ヲ守ル殆ント十八日昼夜連戦、

於テ数々交戦、夫ヨリ田原ヲ守ル殆ント十八日昼夜連戦、

二 宮 城 県 上

夫ヨリ植木へ退キ我兵熊本城ノ困ヲ解テヨリ武宮ニテ戦

ヒ、四月上旬矢部濱町へ退キ、同中旬鹿兒島へ突入シ冷

水ノ胸壁ヲ守ル、六月上旬恒吉へ退キ同所ニ於テ分隊長

心得ニ挙ラレ、百引郷・大崎・末吉郷其他各所ニ於テ戦

ヒ、八月十八日延岡長井村ニ於テ降伏仕候也、

鹿兒島県市來郷第廿三大区四小区

八百七十七番地

明治十一年三月

永井四郎

一三一 土岐丑之助上申書

明治十年二月十六日四番大隊六番小隊兵卒ニテ鹿兒島発

程、同廿一日熊本城攻撃即ヨリ植木并木ノ葉・山鹿ニテ

戦ヒ、官軍悉ク退ク、同廿八日ヨリ田原ニテ連戦、三月

上旬分隊長ニ上ラレ、四月上旬木留ニテ戦ヒ、四月中旬

小隊長ニ挙ラレ木留退軍御船ニテ敗戦、四月下旬鹿兒島

県下吉野ニテ連戦、六月上旬ヨリ福山・岩川・末吉・宮

崎ニテ戦ヒ皆敗レ、八月上旬中隊長ニ上ラレ、延岡長井

村ニ於テ自首帰順仕候也、

鹿兒島県下第二大区四小区

明治十一年三月

土岐丑之助

一三二 二之方覺之助上申書

明治十年三月十七日頃出兵、大口ニ於テ第九大隊八番

小隊兵卒へ編入、肥後八代ニ於テ三月廿三日開戦、同四

月十三日肥後ノ内サイキ村ニテ手負、人吉病院ニ入り療

養、五月十日頃出院彈藥製造方へ入り、延岡ニ至リ炮隊

へ編入、同所ノ内長井村ニ於テ帰順仕、帰宅ノ後九月五日

同村副戸長ノ指揮ニ随ヒ同人ノ宅迄至リ、直ニ帰宅罷在

候処、九月廿二日鹿兒島警視出張所ヨリ御喚出相成候也、

鹿兒島県高江郷

第廿六大区三小区百卷番地

明治十一年三月

二之方覺之助

一三三 和田六郎兵衛上申書

明治十年旧正月五日第五大隊十番小隊兵士ニテ鹿兒島県

出発、同十日熊本城へ着、即ヨリ昼夜攻城、旧二月五日

板橋駅へ応援トシテ至リ多少争戦、同所砂川口ニ於テ手

負川尻病院ニ入り、夫ヨリ諸所転院、旧三月三日帰県ノ上帰順仕居候処、旧七月廿二日頃味方再ヒ鹿兒島へ突入ノ際本營ノ募ニ応シ伊集院郷迄出張ノ処、官兵ニ遮レ半途ニシテ帰宅仕候也、

明治十一年三月

横山矢次郎

一三五 有馬龍左衛門上申書

明治十一年三月

和田六郎兵衛

鹿兒島県下永吉郷

第十六大区二小区

一二四 横山矢次郎上申書

明治十年旧三月九日振武隊十五番隊兵士ニテ鹿兒島出発、同中旬頃熊本県人吉ニ着陣、夫ヨリ同月二十八日頃鹿兒島へ帰県、(鹿兒島市)上伊敷村へ十七日位番兵、旧四月十日再ヒ熊本県江代へ転陣、(水上村)同廿四日頃ヨリ処々戦争、皆越ニ於テ敗戦、夫ヨリ各所へ転陣佐土原へ引揚ケ、旧七月八日帰県ノ上帰順仕居候処、旧七月下旬鹿兒島へ突入ノ際本營ノ募ニ応シ近郷伊集院迄出張ノ処、官兵ニ遮レ半途ニシテ帰宅仕候也、

鹿兒島県下永吉郷

第十六大区一小区

明治十一年三月

横山矢次郎

一三五 有馬龍左衛門上申書

明治十年二月十五日(村田新八隊長)二番大隊七番小隊兵士ニテ鹿兒島出発、(三月四日)旧正月廿日熊本県下百貫石エ着陣、十日余番兵、夫ヨリ田原ニテ攻戦致手負、川尻病院エ入り、(四月四日)旧二月廿一日帰県ノ上旧六月中旬頃帰順仕居候処、旧七月下旬頃鹿兒島エ再ヒ襲来ノ際本營ノ募ニ随ヒ、近郷伊集院迄出張致候処、官軍ニ遮ラレ半途ニシテ帰宅仕候也、

鹿兒島県下永吉郷

第十六大区一小区十八番地

十一年二月

有馬龍左衛門

一二六 成田宗淳上申書

明治十年旧四月四日(五月十六日)鹿兒島出発、同九日熊本県下求摩人吉エ出張ノ処、振武二拾三番隊小隊長トナリ同所エ暫時番兵ス、夫ヨリ同所大畑ニテ旧五月二日戦敗シ、鹿兒島県下飯野郷エ引揚番兵ス、(七月廿八日)旧六月十八日野尻郷ニ於テ敗

鹿兒島県下永吉郷

第十六大区一小区

戦ス、故ニ自首帰順仕候也、

鹿兒島県下加世田郷

第六大区七小区百九十一番地

十一年二月

成田宗淳

番小隊半隊長ト成リ、熊本県武宮迄出張、四月廿三日戦
争致シ、同廿九日矢部迄引拳候際給与方へ転シ、八月十
八日帰順自首仕候也、

鹿兒島県下志布志

第百四大区一小区九十六番地

十一年二月

福山吉連

一二七 種子田太八上申書

昨十年旧二月十四日大口郷ニ於テ遊撃六番小隊押伍エ編
入、同十六日同所発程熊本県(熊本)二本木エ着シ、即ヨリ城番

(三月廿八日)

(熊本)

兵、川尻破戦ノ節竹宮エ引揚、同所守戦ノ際手負、同旧

(熊本)

(熊本)

三月十四日帰郷、平愈ニ付同五月四日帰隊ノ際常山一番

(高岡町)

(八月二日)

中隊左小隊分隊長トナリ、高岡破戦ノ節帰郷、同旧六月
廿三日自首帰順仕候也、

鹿兒島県下踊郷

第六拾四大区二小区四拾四番地

十一年二月

種子田太八

一二九 郷田彦兵衛上申書

明治十年二月十五日第二大隊八番小隊押伍ニテ鹿兒島県
下発程、大口街道ヨリ肥後水俣ニ出同廿一日川尻ニ着ス、

(村田新八隊長)

官軍百貫石ニ上陸シテ城内へ入ラントスルノ報知アリ、

(熊本)

(本市海岸)

直ニ川尻ヲ発シ午後五時頃斥候兵百貫石ニ達ス、海軍兵

凡一小隊上陸セリ、互ニ発炮、十余名ヲ獲テ本営へ護送

シ、尚ホ当地ニ在テ海岸ニ哨兵ス、三月中旬山鹿へ進軍、

壘ヲ築テ固守ス、官軍屢襲来リ悉ク追撃シ勝利ヲ得ル、同

下旬田原坂方面敗軍ニ付我半隊外二三小隊応援トシテ

植木へ至ル、此ノ地ニ於テ防戦一週間ニ余リ、左半隊ト

(西舎志町)

(大津町)

代リ、鳥ノ巢ノ壘ヲ守ル、四月十四日大津へ退ク、翌曉

官軍襲来ヲ散々ニ追撃シテ敵ノ本営ヲ乗取リ、夫ヨリ総

明治十年三月廿八日鹿兒島出發、先キニ於テ十番大隊一

一二八 福山吉連上申書

軍矢部^(矢部町)へ引揚右隊変称ス、我隊ハ奇兵五番小隊トナリ、

奇兵皆豊後口進軍ニ決シ当地ヨリ山路ヲ歴テ五月上旬日

州富高^(日向市)新町ニ出、細島^(日向市)・延岡ノ間ニ番兵ス、同中旬大分

県内佐伯へ進ミ、我一分隊海岸ニ哨兵ス、時ニ海兵凡一

分隊小船ヨリ来ルヲ密ニ堤ニ伏シ狙撃シ悉ク殲ス、同下

旬三重市^(三重町)へ転ス、深野^(大野町矢部)ノ官軍襲来リ我隊烈ク中央ニ鋭進

シケレハ、右翼ノ官軍退クニ道ナク多ク斃ル、追撃スル

凡ソ二里ニシテ敵ノ形勢ヲ探クルニ、大分県下迄退クト

聞、直ニ引揚、此夜十一時頃臼杵進軍トシテ発進ス、翌朝

既ニ先鋒三四ヶ所胸壁ヲ抜キ烈ク攻撃シテ城下ニ至ルニ、

警視隊ハ大分ヲ差シテ退キ、当地士族皆降伏ス、六月七

日ノ戦ニ銃創ヲ蒙リ延岡第二病院ニ入ル、五週間ヲ経治

シテ帰隊ス、時ニ我隊梓峠^(宇目町重岡)ニ壘ヲ築キ柵ヲ結ビ互ニ固守

ス、此時分隊長ニ挙ラレ、八月下旬延岡敗軍ヨリ終ニ総

軍長井村ニ囲マレ進退道ナキニ至ル、然ルニ決戦シ一方

ヨリ突出ノ軍議ニ決シ、大坂鎮台ノ守場愛^(可愛岳、北川町)ノ破リ、

山中難路ヲ経テ九月一日前軍鹿兒島城ヲ乗取ル、我小隊

八川瀬^(鹿兒島市)一本松辺ヲ守ル、三四日過テ官兵襲来リ防戦、終

ニ散々ニ敗レ山林ニ潜レテ、九月十八日自首帰順仕候也、

鹿兒島県第三大区一小区

明治十一年三月

郷田彦兵衛

一三〇 伊地知謙助上申書

明治十年二月十七日^(池上西郷隊長)五番大隊二番小隊分隊長ニテ鹿兒島

県ヨリ出発、熊本松橋駅へ廿一日着、熊本城へ廿二日進撃、

同日午時植木向坂ニ於テ戦ヒ、木之葉迄追打大勝利、亦

同日植木迄引揚、三月三日山鹿駅へ進軍、翌日同所ニ於

テ戦ヒ^(山鹿市)平山村迄追撃亦同所迄引揚、同五日平山村^(三加和町)板橋村

辺へ進軍大勝利、同六日山鹿駅へ引揚、同九日ヨリ十二

日迄同所ニ於テ連戦大勝利、同十五日亦同所ニ於テ戦ヒ、

其折致手負川尻病院へ至ル、同廿八日頃帰県致シ、同六

月中旬頃振武八番中隊給養代理ニ編入シ、同六月下旬頃

高崎郷ニ於テ戦ヒ、大勝利ニテ上庄内山田村^(山田町)へ引揚ゲ、

末吉郷ノ内通山ニ於テ戦ヒ敗軍、山ノ口迄退ク、七月上

旬頃宮崎ニ於テ戦ヒ敗軍、美々津迄退リ、其節官兵ニ遮

レ帰家致居候処、九月廿一日帰順致シ候也、

鹿兒島県第三大区一小区

明治十一年三月

伊地知謙助

一三一 土師 盛上申書

二 宮 城 県 上

私儀(船上四郎隊長)五番大隊二番小隊押伍ニテ候処、各隊ヨリ押伍一員
 ツツヨ本営護衛トシテ相勤ムヘキノ処其任ニ当リ、明治
 十年二月十七日日本営ト共ニ出軍、同廿日熊本県人吉へ出
 テ夫ヨリ求摩川ヲ下リ八代駅へ着、同所ヨリ舟ニテ松橋
 駅へ着、同廿二日各隊ヨリ熊本城へ進撃ノ報屢々ナリ、本
 営モ直ニ其県下迎町ノ内迄進ミ營ヲ置キ、同廿七日頃春
 日村へ転営護衛人員モ追々交代ヲ以テ本隊へ帰シ、我隊
 ヨリモ交代来リシニ、三月三日山鹿駅へ進軍相成居本隊
 へ同四日同所ニ於テ帰隊、同五日平山村へ進撃大勝利、
(三加和町)板楠村・(谷上七)十丁村辺迄追撃、翌日同所引揚亦々山鹿駅へ至
 ル、同九日ヨリ(山鹿市)鍋田村へ哨兵ヲ張り固守ス、是ヨリ十三
 日迄連日ノ戦利ヲ獲タリ、央ニ銃創ヲ被リ直ニ川尻病院
 ニ至ル、四月上旬療養方トシテ帰県致シ、日ヲ経テ全快
 ヲ得、五月上旬本城滞陣ノ雷撃へ帰隊、六月一日ノ戦利
(妻刈町)ナク引揚、横川郷ヲ経隔郷モ既ニ守リ難ク、(大塚 豊島町)荒
(郡城市)襲ノ戦ヒ利ナク、(高野村)張兵固守ス、中甸頃ヨリ荒襲・
 財部郷ノ内赤迫峠大峯辺へモ進撃致シ終ニ利ナク、上庄(都城)

内・都ノ城・山ノ口連戦敗軍、七月卅日清武防戦利ナク(清武町)
 宮崎・高鍋・美々津・延岡ヲ経テ、八月上旬諸口ノ敗兵
 ト俱ニ長井村ニ入ル、官兵四方ヲ囲ミ進退是レ谷ル、因
 テ八月十八日覆ノ嶽へ進撃大勝利ヲ得追撃、堀川・地藏(高千
(高千穂町)ヶ嶽ヨリ三田井ニテ連戦皆大勝利ヲ得、弾薬・銃器ハ勿
(可愛岳)論諸品等分捕、夫ヨリ七ツ山・神門・岸野ニテ連戦連勝
(諸塚村)分捕数知レス、米良ヨリ須木郷へ出テ小林ニ於テ官軍ヲ
(西米良村)追払ヒ、(えびの市)眞幸郷ヲ経テ横川郷ニテ我先鋒官兵ニ邀撃セラ
(山崎カ)レ、中軍ハ横ヲ出テ山田郷・吉田郷等ヲ経テ吉野ニ至リ
(鹿兒島市)帯追ニテ戦ヒ、九月一日終ニ鹿兒島へ突入官軍ヲ追払ヒ、
(舊)諸所ノ憤戦生捕・分捕数多アリ、各隊モ人員少クナリテ、
 城山ニ籠城ノ折各隊編制ノ節十二番隊分隊長へ挙ラレ、
 亦々官軍二囲マレ、程ナク九月廿四日落城ニ及ヒ其折縛
 ニ就キ降伏仕候、此段戦地ノ景況申上候也、

明治十一年三月 土師 盛

鹿兒島県

一三二 市來彌藤次上申書

明治十年旧正月五日第五番大隊五番小隊兵士三編入シ鹿
(二月十七日)

兒島県発程、同九日熊本県下松橋ニ着シ、同十日熊本城攻撃、同十一日木之葉迄進軍、夫ヨリ植木へ退キ同所へ

一週間滞軍、同十九日山鹿へ進軍同所へ一週間滞陣、田

原へ応援十八日間激戦、廣住へ退、廿五六日防戦ノ時分隊

長ニ選挙セラレ、竹宮へ移リ五六日滞陣、人吉ニテ振武

隊ト編制シ鹿兒島県下小野村ニ於テ交戦、吉田郷涼松へ

退陣、又半隊長ニ挙ラレ百引ニテ戦争大勝利、夫ヨリ高

原ニ於テ手負、都之城病院へ入室、漸々退テ延岡長井村

ニ於テ降伏仕候也、

鹿兒島県鹿兒島第二大区

一小区百三番地

十一年三月

市來彌藤次

一三三 井上治右衛門上申書

明治十年旧三月六日(四月十九日)鹿兒島県出發、同十二日求摩人吉へ

到着、切隊二番小隊兵士ニテ同廿日福山郷へ番兵、旧四

月四日同所ニテ防戦、同七日ヨリ病氣ニテ入院、夫ヨリ

帰郷自首帰順、九月一日再ヒ鹿兒島へ襲来ノ際郷内石垣

村迄出張、官兵ニ遮ラレ直ニ帰宅仕候也、

十一年二月

井上治右衛門

鹿兒島県下穎娃郷第十七大区
四小区百十八番地

一三四 内山仲七郎上申書

明治十年二月十六日(桐野利秋隊長)第四大隊一番小隊押伍ニテ鹿兒島発

程、同二十二日肥後川尻ニ着シ、則ヨリ出町ニ壘ヲ築キ熊

本城ヲ攻撃ス、同下旬山鹿へ進ミ堅ク守ル、官軍屢襲来

ルヲ悉ク追撃シ、銃器・彈丸ヲ取ル算ナシ、三月下旬田原

口敗軍応援トシテ植木へ至リ、当所鳥之巢ニ於テ戦フ事

数日、四月中旬川尻口敗軍ニ付大津へ退ク、当地ニアツ

テハ官軍屢襲撃スレトモ毎ニ味方大勝利ヲ得、此時半隊

長ニ挙ラレ、夫ヨリ矢部へ引揚我隊ハ奇兵七番小隊ト変

号シ、山道ヲ経テ日州富高新町ニ出、細島・延岡ノ間ニ

宿陣、五月中旬豊後佐伯へ進ミ海兵ト戦ヒ克ツ、同下旬

三重市へ転戦、然ルニ深野ノ官軍襲来リ戦半日ヲ過スシ

テ敵敗潰、大分県下ニ退ク、六月上旬白杵進軍ノ略ニ決

シ、此時小隊長代理ニ挙ラレ我隊ハ後軍トナリ城下ニ至

ル、前軍既ニ城ヲ拔キ敵ハ大分県下ニ退ク、同九日頃官

軍襲来味方苦戦、(宇目町)重岡ニ退キ、(宇目町)梓峠ニ壘ヲ築キ柵ヲ結ヒ固守ス、八月上旬延岡敗軍以來家ニ帰り、九月十八日帰順仕候也、

鹿兒島県第三大区一小区

明治十一年三月

内山仲七郎

一三五 山口新吉上申書

明治十年二月十六日(永山第一部隊長)第三大隊九番小隊押伍ニテ鹿兒島

県下出發シ、同廿二日熊本城ヲ攻撃スル凡三週間、同三

月中旬頃植木向坂へ応援トシテ到リ戦ヒ勝利ヲ獲、同所

ニ於テ連戦三週間ニ余リ勝敗不決、同月中旬頃(永家カ、熊本市)永岸村へ転

戦分隊長トナリ、同四月二十日(熊本市東部)保田窪村ニ於テ負傷、直

チニ延岡病院ニ入ル、同八月上旬頃長井村へ転院ス、同

月中旬鹿兒島県下へ再び襲来ノ際、中軍へ随從諸所へ転

院ス、同九月一日入城シ同二十四日落城ノ際再ヒ手ヲ負

ヒ、則縛ニ就キ候也、

鹿兒島県下第三大区一小区

明治十一年三月

山口新吉

一三六 早川兼知上申書

去ル明治十年二月十七日(池上四郎隊長)第五大隊六番小隊分隊長トナリ

鹿兒島県発程、所々宿陣、同二十日県下出水郷ヨリ乗船、

同日熊本県下(浦北町)佐敷へ上陸、翌廿一日同所ヨリ乗船同県下

松橋駅へ上陸、同夜熊本城下ニ当リ煙焰天ニ漲リ炮声数

々聞へ、我諸隊直チニ進軍川尻ノ駅ヲ経テ熊本城下へ着

スルヤ開戦、昼夜激戦大小炮撃数日ニ至ル、三月廿六日

松橋口へ援兵ノ為ノ転陣ス、同二十九日午天官兵襲来ル、

戦鬪已ニ半夜ニシテ官兵終ニ兵器ヲ棄テ、小川ノ駅ニ走

ル、翌三十日曉天官兵再ヒ大挙シテ襲フ、我兵防ク事不

能シテ(宇市)宇都駅へ退ク、四月一日官兵進ミ来テ三十町川ヲ

隔テ、固守ス、同二日夜半我諸隊拔刀或ハ炮撃互ニ奮闘

激戦双方死傷殊ニ夥シ、味方ハ再ヒ宇都ニ引上ク、同三

日川尻駅ニ転陣、同九日我諸隊進撃互ニ勝敗非ズシテ官

兵宇都ノ木原山ニ抛ル、味方ハ再ヒ川尻駅ヲ守、同十四

日夜半官兵突出我哨兵防ク不能、(御船町)御舟ノ渡シモ敗走シ、

防戦ノ節左腕ニ銃創ヲ蒙リ、其后戦地ノ景况頗未不分明、

夫ヨリ(益城町)木山病院へ入ル、熊本諸道ハ敗レ日州路ヲ経テ各

所へ転陣、鹿兒島県下加治木郷病院へ入室、鹿兒島県各地ノ戦所敗走、奇兵隊ハ末吉郷ニ引上ケ、其隊ニ随ヒ岩(大隅)川・市成(輝北町)・大崎・都之城等ノ諸郷其他所々ニ於テ屢々勝チ屢々敗ス、終ニ宮崎・佐土原・高鍋・美々津等(日向市)ノ戦ヲ經、当所耳川ノ壘敗レ官兵ニ中軍ヲ遮絶セラレ、終ニ本隊ヲ離レ、或ハ深山ニ潜伏シ樵舎ニ一宿シ廣野ノ民家ニ一泊、豊後ノ西境ニ潛行ノ際、我諸隊ハ已ニ豊後日州方面ノ諸道ヲ破リ鹿兒島ニ向ヒ突出シタルノ確説ヲ得、余モ又赴ント行路鹿兒島県下大村郷民家へ一泊ノ折、凶ラスモ警視隊十余名来リ突然捕縛相成申候也、

鹿兒島県第三大区二小区

明治十一年三月

早川兼知

一三七 中馬秀普上申書

明治十年二月十六日(桐野利秋隊長)番四大队二番小队押伍ニテ出兵、同二十二日熊本城へ攻撃、同廿四日山鹿へ進軍、同廿六日開戦、同廿八日岩村ニ於テ戦争ス、後鳥之栖(西合志町)、大津ニ退陣、矢部へ引揚同所ニテ半隊長トナリ、夫ヨリ延岡ノ内(日向市)富高新町ヲ經テ豊後国竹田ニ撃進、城ヲ拔キ大ニ勝利ヲ

得ル、後三重(三重町)ノ市へ退キ対戦、後臼杵ノ城ヲ進撃ス、其外佐伯各所ニ戦ヒ長井村へ滞陣ノ時小隊長トナリ、八月十八日同所困ミヲ破リ三田井へ出テ、横川ヲ越へ、九月七日帰宿、同廿七日降伏仕候也、

鹿兒島県下谷山郷第四大区

三小区

明治十一年三月

中馬秀普

一三八 前田慶左衛門上申書

明治十年二月十六日(木山弥一郎隊長)第三大队三番小队兵士ニ編入鹿兒島出発、同二十二日熊本県下三軒町へ着シ同所番兵、旧二月十二日植木へ転陣直ニ負傷、即日川尻病院へ入室療養、速カニ平愈ニ至ラス依テ旧三月十日帰県、大口郷へ官兵進入ノ際同旧五月四日帰隊、雷撃八番中隊右小队長ニ挙ラレ、六月下旬延岡ニ於テ帰順仕候也、

鹿兒島県下本城郷第四十七大区

一小区十六番地

明治十一年三月

前田慶左衛門

一三九 邊見甲之助上申書

明治十年二月十五日第一大隊九番小隊兵士ニテ鹿兒島出
發、同二十一日熊本城攻撃、同所ニ於テ三月三日手負、
則川尻病院へ入室、四月初旬帰県、六月上旬自首帰順、
再ヒ鹿兒島へ襲来ノ際本営ノ募リニ応シ、近郷喜入郷迄
出張ノ処官兵ニ遮ラレ半途ニシテ帰郷仕候也、

鹿兒島県下今和泉郷

第十四大区一小区廿三番地

明治十一年三月

邊見甲之助

一四〇 宮地貞明上申書

明治十年二月十五日第一大隊七番小隊押伍ニテ出兵、同
二十三日熊本城へ攻撃八幡山ノ台ニ迫ル、二三日城兵能
ク守リ終ニ拔事不能他隊ニ交代シ休兵ス、二十七日高瀬
へ進軍、未明ヨリ攻戦勝敗不決夜ニ入り我兵寡キヨ以テ
植木へ引揚ケ、其翌日ヨリ木ノ葉ヲ守ル、未明ヨリ官軍
襲来勝敗不決、其際深手ヲ負ヒ川尻病院へ送ラレ、同月

(篠原四幹隊長)

(玉名市)

(玉葉町)

下旬木山へ転院、同廿九日帰県ノ際官軍大軍海上ヨリ鹿
兒島へ来リ迫ル、傷未タ愈ヘサレトモ勇義隊ト募リニ応
シ、半隊長ニ挙ラレ阿久根、高城各所ニ於テ防禦戦争ス、
後敗軍シテ降伏仕候、

(川内市)

鹿兒島県

第二十四大区二小区

明治十一年三月

宮地貞明

一四一 有馬純治上申書

昨年二月十五日第二大隊六番小隊ニテ鹿兒島出發、同
廿一日熊本城攻撃、三月二日田原坂ニ於テ戦ヒ、同四日
同所ニ於テ手負、四月廿六日帰県、六月二十八日帰順、
九月上旬再ヒ鹿兒島へ襲来ノ際本営ノ募リニ応シ、近郷
出張ノ処、官兵ニ遮ラレ半途ヨリ帰郷、九月十四日捕
縛相成申候也、

(村田新八隊長)

(榑木町)

鹿兒島県下顛娃郷

明治十一年三月

有馬純治

一四二 飯牟禮吉兵衛上申書

(篠原固幹隊長)

昨十年二月十五日第一大隊一番小隊給養掛ニテ鹿兒島県出発、同廿二日熊本城攻撃、夫ヨリ同県下吉次(玉栗町)、木留(積木町)へ進軍数十日戦アリ、三月下旬同所ニテ大小荷駄心得トナリ弾薬・粮米ヲ各隊へ運送ス、然ルニ川尻方面敗軍トナリテ諸隊ヲ木山(益城町)、矢部等ニ引退、此所ニテ諸隊ノ編制アリテ行進大隊付属トナリ、鹿兒島へ向ヒ同所へ三十余日帯陣、戦ヒ利アラスシテ諸隊ヲ加治木諸所都之城へ退陣ス、夫ヨリ又日州高鍋及ヒ延岡へ引揚、同所長井村(金北町)へ総軍囲レ、遂ニ一方面ヲ破テ再ヒ鹿兒島へ突出、途中平病ニ罹リ山中民家ニ抛リ数日療養シ、鹿兒島へ帰ル、則警視出張所へ自首シ降ル、

鹿兒島県第三大区三小区

明治十一年三月

飯牟禮吉兵衛

一四三 種子島廉四郎上申書

(篠原固幹隊長)

明治十年二月十五日一番大隊五番小隊兵卒ニテ鹿兒島

足、同廿二日熊本城ヲ攻撃、同廿五日高瀬(宝名市)ニテ戦ヒ、二

十七日吉次・田原・木留ニ於テ連戦、四月上旬分隊長ニ上ケラレ、四月中旬木留退軍、同月下旬鹿兒島吉田ニ於テ戦フ、官軍退ク、五月上旬病氣ニテ門川敗軍ヨリ帰宿、

九月二十五日降伏仕候也、

鹿兒島県第一大区四小区

九百九十八番地

明治十一年三月

種子島廉四郎

一四四 宇田津之助上申書

明治十年五月十九日兵士ニテ出発、鹿兒島吉野村へ宿陣

守兵候処平病ニ罹リ、六月一日帰宅ノ上帰順仕居候処、

九月上旬鹿兒島へ再ヒ襲来ノ節本営ノ募ニ応シ、近郷伊

集院迄出張、官兵ニ遮ラレ半途ヨリ帰家仕候也、

鹿兒島県下永吉郷

第十大区一小区八番地

明治十一年三月

宇田津之助

一四五 樺山喜平次上申書

明治十年二月十五日(村田新八隊長)第二番大隊三番小隊兵士ニテ鹿兒島
出立、同二十日高瀬(玉名市)へ番兵、二十七日同所ニ於テ左股ヲ
打貫カレ川尻病院ニテ治療、夫ヨリ各所ヲ經テ佐土原戰
ヨリ出戰ス、夫ヨリ山陰(東郷町)・門川・延岡ノ戰ヲ經テ、八月
十八日長井村ヲ切抜ケ、櫻(可愛岳)ノ嶽・地藏ケ嶺(高千穂町)・三田井(高千穂町)・七
ツ山各所ヲ越へ、横川・蒲生ノ官軍ヲ破リ、城山ヲ取り
籠城ノ時分隊長ニ用ヒラレ、九月二十四日落城ノ際別働
一旅団ニ縛セラレ候事、

明治十一年三月
鹿兒島県下第三大区一小区
五十五番地
樺山喜平次

一四六 最勝寺半次郎上申書

宮城 県 上
昨十年旧正月三日(二月十五日)第二大隊九番小隊兵卒ニテ同日鹿兒島
発程、同九日熊本県下川尻町ニ着シ、同十日攻撃、同十
六日田原坂激戰、夫ヨリ城ヲ囲ミ守ル、同三月一日ニ至

(西照田、熊本市東部)
リ西牟田ニ於テ健闘銃創ヲ蒙リ、木山町病院へ入り、同
十日帰郷、五月廿四日帰隊、正義隊一番中隊右小隊半隊
長トナリ、延岡敗軍ノ際帰県、七月廿一日自首帰順仕候
也、

鹿兒島県下雙山郷

明治十一年三月
第六十三大区二小区五十七番地
最勝寺半次郎

一四七 富山吉彦上申書

明治十年二月十七日(五カ)第二番大隊八番小隊押伍ニテ鹿兒島
出発シ、同二十二日熊本へ着ス、即日ヨリ攻城シ、三月
初旬(菊池市)限府へ転陣ス、同中旬山鹿へ進撃ス、是時二半隊長
トナリ、同下旬植木口へ転陣ス、同所ニ於テ頗ル烈戦、度
々官兵ヲ撃破リ分取高名数知レス、夫ヨリ鳥之栖(西合志町)へ進撃
シ日夜接戦我隊毎ニ勝利ヲ得テ、銃器・彈薬ヲ頗ル分取シ
急ニ追撃ス、官軍大ニ破走シ死屍ハ山野ニ滿チテ何百ノ
数ヲ知ラス、其後(大津町)大津へ転陣シテ官兵ノ襲ヒ来ルヲ待ツ、
四月十六日官軍大ニ攻来リ我隊直ニ烈戦大ニ進撃ス、戦
フ事三時間ニシテ悉ク撃退ケ斬首無算、同廿日又大ニ戦

ヒ勝敗決セス、是役ニ銃創ヲ蒙リ矢部病院ニ入院シ、後延岡ニ転院シ、五月下旬帰県シ、後帰順仕候事、

鹿兒島県第一大区四小区

明治十一年三月

富山吉彦

一四八 市來政平上申書

昨十年二月十六日(桐野利秋隊長)第四大隊七番小隊半隊長トナリ鹿兒島

県下出程、同廿二日熊本県下ニ着、則チ攻撃スル事半夜、

植木駅へ進軍、同廿三日木之葉駅へ進撃官軍大ニ敗走、

死傷・首級・銃器・弾薬ヲ得ル殊ニ夥シ、時ニ地理悪ク

シテ其夜植木駅へ引揚ケ、翌廿四日山鹿駅へ進軍、同廿

六日官兵襲ヒ来ル、即チ邀へ撃、官兵大ニ隊伍ヲ乱シ敗走

ス、依テ山鹿駅へ引揚同日田原へ進撃、勝敗不決連戦壘

ヲ築テ固守ス、三月廿日ニ至(植木町)又七本村、(北部町)鹿之子木駅へ引

揚、植木向坂ニ進軍官兵敗潰追撃、夫ヨリ植木駅ヲ守リ

連戦廿余日也、四月十四日川尻口敗戦永峯村へ転軍所々

ニ於テ戦ヒ、同廿五日人吉ニ転軍、五月上旬鹿兒島県下

吉松ニ転陣其他各所ニ於テ戦鬪、七月下旬都ノ城ノ戦ヒ

ニ銃創ヲ蒙リ、宮崎・高鍋・美々津(日向市)ヲ経テ延岡ニ着ス、

病院ニ入り八月中旬長井村ニ転遷、同十八日囲ヲ解キ愛(可)
ノ嶽ノ壘ヲ拔キ、中軍ニ尾シ、諸所へ転院、九月一日鹿
兒島へ突入ス、同処病院へ入室、同廿四日陥城ノ際降伏
仕候也、

鹿兒島県下第三大区六小区

明治十一年第三月

市來政平

一四九 川北陽孝上申書

明治十年二月十六日(桐野利秋隊長)四番大隊七番小隊押伍ニテ鹿兒島出

発、同月廿二日熊本城攻撃、翌廿三日朝九時ヨリ木之葉

進撃、午後五時植木町へ引揚、同廿五日山鹿駅ニ操込(練)

廿六日官兵襲来候ニ付我兵迎撃大ニ之ヲ敗ル、同廿八日

朝九時南關ヲ進撃岩村ニ於テ戦端ヲ開キ、勝利ヲ得タリ

ト雖本營ノ令ニ依リ山鹿ノ町へ引揚ケタリ、三月一日田

原口応援ヲ為シ同所ニ於テ分隊長トナリ、同廿八日迄連

戦ノ処朝八時本道守兵敗レ、植木町へ引揚タリ、同所ニ

於テ小隊長代理トナリ、四月廿七日病氣ニ付帰県、八月

廿日鹿兒島警視出張所へ自首帰順仕候也、

鹿兒島県

明治十一年三月

川北陽孝

一五〇 有馬源内上申書

昨十年二月鹿兒島人等兵器ヲ携へ熊本県ヲ通行スルノ報アリ、我県士族所々ニ集合其旨趣ヲ求ル内、先方ハ我県水俣ニ至ルト聞キ、我同志宮崎八郎・中根正胤小川駅ニ至リ、先方隊長別府晉介ニ会シ、其旨趣ヲ聞キ直チニ応援セン事ヲ約シテ帰ル、同廿一日同志四十余人ヲ会シ議ヲ決シテ川尻駅ニ至リ、兵ヲ分チ方向ヲ定メ薩軍ノ嚮導トス、廿二日曉天直ニ進ンテ熊本城ニ迫リ大ニ戦フ、城固フシテ抜ケス、兵ヲ分テ之ヲ囲ム、廿四日京町学校ニ同志ヲ会シ隊伍ヲ編制シ、投票ヲ以テ三官ヲ定メ協同隊ト号ス、此ニ於テ半隊長トナリ、即夜一分隊ヲ率ヒテ山鹿ニ赴ク、同廿七日同所ニ敵ヲ邀ヘ撃テ大ニ之ヲ敗ル、士官六名ヲ斃シ斬獲無數、進撃スル事里余、再ヒ鍋田ヲ保チ(山鹿市)墨ヲ鍋田ニ設ケ之ヲ守ル、尔後時々敵ノ襲来ニ遇ト雖モ、毎ニ撃テ之ヲ退ク、其後南關ヲ進撃シテ長野原ニ戦フ事(三加和町)一昼夜、此時我隊小隊長平川惟一戦死ス、而テ本宮桐野利秋令ヲ下シテ山鹿ニ退ク、即日兵ヲ分ツテ田原ヲ援フ、後

チ鳥栖村へ退キ屢戦フテ毎ニ之ヲ退ク、夫ヨリ兵ヲ分チ(柳井市)限府町ヲ取ル、連日ノ戦毎ニ之ヲ退ク、数日ニシテ再ヒ

鳥ノ栖村ニ兵ヲ退ク、四月十四日川尻口敗ル、ノ報ヲ得、

兵ヲ木山ニ退キ中隊ヲ編制シ中隊長トナリ、御舟ニ進撃(益城町)

スレハ、官兵已ニ去ルヲ以テ戦ハスシテ御舟ヲ取ル、即

日敵襲来ル、直ニ撃テ之ヲ敗ル、翌日敵再ヒ来ル、我兵

力戦スレトモ遂ニ大ニ敗ル、此時銃丸ニ中リ脛ヲ傷キ、

矢部・馬見原並ニ三田井・米良等ノ諸所ヲ經テ人吉病院

ニ入り、創愈ルニ際シ日向延岡ニ至リ、奇兵本營ニ在テ

伝令等ノ事ヲ為ス、後チ奇兵炮隊監軍トナリ豊後口ニ在

ル内、各方面ノ敗ニ當リ長井村ニ於テ捕縛相成候也、

熊本県

明治十一年第三月

有馬源内

一五一 大寺伊右衛門上申書

明治十年四月七日小隊長トナリ出発、鹿兒島吉野へ着、(鹿兒島市)然ル処行進十四番小隊ノ兵士三編入、同所ノ内別府邸へ守兵候処、旧曆五月十二日官兵襲来味方敗軍下田村へ引揚、翌十三日中別府村迄進撃勝利ヲ得タリ、同十五日國

分へ転陣、同十八日頃同所ニ於テ敗戦、同廿日頃都之城ヲ経テ佐土原ニ至リ、夫ヨリ連戦悉ク敗レ終ニ延岡へ引揚、旧曆七月五日帰郷ノ上帰順仕候事、

鹿兒島県下永吉郷

明治十一年三月十八日

大寺伊右衛門

一五二 瀬戸口慶輔上申書

明治十年四月八日出発シ飯野郷本営へ届出候処、半隊長ニ上ラレ、熊本竹宮^(薩摩)へ進撃シテ利アラス、夫ヨリ人吉へ引揚、隊号ヲ正義四番中隊ト号シ兵士トナリ、夫ヨリ牛山郷^(大口市)山野へ進撃ノ処大勝利ヲ得テ深川迄進撃シタリ、而同所並久木野ニ防戦スル事卅余日、時ニ官軍ノ大進撃ヲ受ケテ敗軍シテ山野ニ退キ、防戦ニ日余ニシテ又高隈破レテ大口ニ退キ、同日又進撃シテ勝利ヲ得タリ、夫ヨリ湯之尾^(全上)・本城^(牧園町)・踊ノ戦悉ク敗レ毎戦終ニ利アラス、甕山^(国分市)・莊内^(日南市)・佐土原^(日向市)・美々津^(日向市)へ退キ、門川敗軍ノ際山路ヲ経テ帰郷仕候也、

鹿兒島県栗野郷第五十五大区

一小区五十四番地

明治十一年三月

瀬戸口慶輔

一五三 山口松次上申書

明治十年二月十五日二番大隊五番小隊兵士ニテ鹿兒島発足、同二十二日熊本到着、即日攻城昼夜戦、三月中旬黒川^(黒川)へ進軍シテ大ニ利ヲ得タリ、夫ヨリ板梨^(板梨カ、一の宮町)へ引揚守兵ノ中攻撃ヲ受ケテ敗走立野迄引退、同所へ守兵、矢部へ引揚、豊後臼杵へ進撃ノ際傷ヲ蒙リ佐土原病院ニ入り、同所敗軍ノ際帰郷帰順仕候也、

鹿兒島県日置郷

十一年三月十八日

山口松次

一五四 本山省強上申書

昨十年二月十五日二番大隊九番小隊兵士ニテ鹿兒島出発、同廿二日熊本城へ攻撃、夫ヨリ木之葉^(玉東町)并高瀬^(玉名市)ニ於テ戦ヒノ節手負シ入院、其後帰郷平愈ノ上更ニ雷撃九番中隊分隊長トナリ、鉄肥^(日向市)ニ於テ帰順仕候也、

鹿兒島県十五大区一小区

十一年三月十八日

本山省強

一五五 松岡岩次郎上申書

昨十年二月十五日第壹番大隊四番小隊分隊長トナリ鹿兒

(鹿原國幹隊長)

島県発程、同廿一日熊本城ニ攻撃、同廿五日ヨリ高瀬・

(玉東町)(榑木町)(全上)

吉次・田原・木留ニ於テ連戦或ハ烈戦、四月下旬矢部ニ

引揚半隊長ニ挙ラレ、是ヨリ鹿兒島県下吉野村ニ出張、

連戦スル事数日、六月上旬福山郷・岩川郷・末吉郷・宮

(北川町)

崎・美々津ニテ戦ヒ悉皆敗ス、八月下旬延岡長井村ニ於

テ敗走ヨリ帰宅、九月廿八日自首帰順仕候也、

鹿兒島県下第三大区七小区

百九十九番地

明治十一年三月

松岡岩次郎

一五六 海老原正兵衛上申書

明治十年四月廿二日振武十四番隊半隊長トナリ鹿兒島発

程、同廿六日熊本県人吉へ着、同所柳ヶ野ニ於テ戦利ア

(須木村)

(多良木町)

ラス、同廿九日鹿兒島県下須木郷へ転陣、同五月十日肥

後国上榑木戦ノ際傷ヲ蒙リ、直ニ鹿兒島県下高岡病院ニ

(多良木町)

入り創ヲ療治シ、同七月二十二日同県下綾郷ニ於テ正義

(綾町)

九番隊給養トナリ、同八月二十二日佐土原ヨリ病氣ニ付

帰県、同廿九日帰順候也、

鹿兒島県第一大区六小区

十一年三月十八日

海老原正兵衛

一五七 永池吉之進上申書

明治十年三月廿六日出発、大口へ着、即チ九番大隊十番

(坂本村)(八代市宮地)

小隊押伍トナリ、四月初旬熊本県八代郡阪本ヨリ古麓迄

(球磨村)

攻撃スルト雖、戦ヒ終ニ敗レ同県下人吉ノ内神之瀬ニ退

キ、五月七日中隊ヲ編制シ更ニ雷撃五番中隊半隊長トナ

リ、同月八日同所ニ於テ戦ヒ敗レ、同月中旬人吉へ引揚、

(えびの市)(高原町)

夫ヨリ飯野・高原所々ニ於テ毎戦利アラス、八月下旬美

々津敗戦ノ際自首帰順候也、

鹿兒島県指宿郷

(年月日ナシ)

永池吉之進

一五八 鹿次利左衛門上申書

明治十年三月下旬出発大口郷へ着、同所ニ於テ九番大隊
七番小隊押伍トナリ、四月初旬八代ノ内阪元村ヨリ古麓
宮地迄進撃ノ際戦ヒ利アラスシテ人吉ノ内神之瀬(球磨郡)へ退ク、五
月上旬中隊編制、更ニ雷撃二番中隊ト改称シ、同中旬同
所ノ戦ヒ破レ、旧曆四月下旬人吉へ退キ戦ヒ又破レ、飯野(えびの)
郷ニ退キ同所及高原等ノ敗利アラスシテ上荘内へ引揚、
半隊長ニ挙ラレ、夫ヨリ宮崎・佐土原ノ敗軍ノ降伏仕候
也、

鹿兒島県下田布施郷

百二十六番地

十一年三月十八日

末次利左衛門

一五九 吉富直賢上申書

明治十年第二月十五日第壹番大隊九番小隊半隊長トナリ
鹿兒島県発程、同廿一日熊本県川尻へ着、同廿二日熊本
城へ攻撃、当日手負翌日川尻病院へ入室、三月卅一日木

山病院へ転院、四月十三日木山発足、五月初旬頃鹿兒島
山下吉田郷温泉ニテ療養致シ、九月廿八日帰順仕候也、
鹿兒島県下第三大区

巷小区

十一年三月

吉富直賢

一六〇 宮原元右衛門上申書

昨十年二月十五日第七番大隊六番小隊兵士ニ編入セラレ
同日出發シ、熊本県下川尻へ同十九日着陣シ、同廿二日曉
天ヨリ熊本城へ攻撃、二日余ニシテ勝敗決セス、夫ヨリ
田原坂へ進軍シ此処ニテ防戦スル事六日、夫ヨリ鳥栖(西志郡)へ
応援トシテ至リ大ニ勝利ヲ得ル、又植木ニ於テ防戦十二
三日余ニシテ遂ニ川尻口敗走ニ及ヒ、拾壹繼橋へ引揚ケ
滞陣ノ時キ、官兵ノ斥候兵ト出会セリ、遂ニ四名ヲ斬ル、
夫ヨリ矢部並ニ人吉へ引揚ケ、此処ニ於テ編制アリ、正
義四番中隊ト改名セリ、夫ヨリ牛山郷山野へ進撃ノ処大
ニ勝利ヲ得テ深川迄追ヒ退ケ、同所並ニ久木野(永保郡)へ防戦三
十余日、時ニ官兵大挙シテ襲来リ遂ニ敵軍ニ及ヒ、山野へ
退キ防戦二日余ニシテ高隈敗走大口へ退キ、同日拔刀ニ

二 宮 城 県 上

テ切込ミ候処大ニ勝利ヲ得テ彈藥並ニ銃器多数ヲ取ル、
夫ヨリ湯ノ尾へ退キ防戦ノ時キ、本城敗軍ニ及ヒ踊並ニ
財部・庄内・山ノ口・船引引揚ケ、此地敗戦ノ際輕創ヲ
被リ、夫ヨリ佐土原、美々津へ退キ、遂ニ延岡長井村ニ
於テ帰順仕候也、

鹿兒島県下國分郷第六大区
四小区六十番地

十一年三月

宮原元右衛門

一六一 谷口政範上申書

明治十年陰曆正月四日三番大隊六番小隊兵士ニ編入鹿兒
島出発、同十日熊本県川尻駅着シ即日ヨリ囲城、川尻破
戦ノ節木山へ引揚、夫ヨリ求摩人吉ニ引揚中隊編製ニ付
分隊長トナリ、熊本県ノ内釘野ニテ守戦敗軍トナリ、大
口郷ニ引揚、同所ニ於テ小隊長トナリ、美々津敗軍ノ際
帰郷、陰曆七月十五日自首帰順仕候也、

鹿兒島県五十大区一小区
吉田郷

十一年三月十八日

谷口政範

一六二 塚田十右衛門上申書

明治十年第二月十七日第五大隊十番小隊半隊長ニテ鹿兒
島発足、同廿一日熊本県松橋駅へ着シ、翌廿二日熊本城
ヲ攻撃ス、勝敗決セス引続キ安政橋ノ傍ニ在テ攻戦スル
事第三月十九日ニ到ル、即夜当所交代松橋駅へ出張、翌
廿日氷川へ進軍、当地ヨリ小川駅迄ノ間ニ於テ屢戦互ニ
勝敗アリ、已ニ同廿六日野津村外面ニ於テ銃創ヲ蒙リ、
直ニ川尻病院へ入り療養、同卅一日木山町へ転院ス、第
四月九日当地発足、同十六日帰郷、無程蒲生郷温泉ニ到リ
保養ス、時ニ鹿兒島敗戦ニ付共ニ当地ヲ発シテ従軍、是
ヨリ大隅日向諸所ノ戦ヲ経テ第八月上旬長井村ニ到ル、
同月中旬当村ヲ発シ榎ノ峠ヲ破リ地藏峯及ヒ三田井へ突
出シ、是ヨリ前軍或ハ中軍亦ハ後軍ニ從ヒ、岸野・横川・
蒲生等ノ戦ヒ勝利ヲ得、益進軍ノ途中吉野村ニ於テ官軍
ニ中絶セラレ、致方無く諸在山谷へ潜伏シ透ヲ窺フト雖
モ城山へ入ル事ヲ得ス、日ヲ経テ私宅へ罷帰候也、

第三大区八小区拾五番地

明治十一年三月

塚田十右衛門

一六三 鮫島善之丞上申書

明治十年四月廿四日切隊拾六番隊小隊長トナリ人吉へ出陣、五月廿日同所ニテ戦争、六月六日鹿兒島県下大口郷へ引揚ケ、戦ヒ敗レ引テ飯野ヲ守リ、同廿二日帰順仕候也、

鹿兒島県下大輪郷

第百四大区一小区

十一年三月

鮫島善之丞

一六四 酒匂景繼上申書

明治十年二月十六日三番大隊五番小隊長トナリ鹿兒島県出発、同廿二日熊本県へ着、則ヨリ攻城、段山口へ守兵スル事十余日、三月八日木留口へ出張、同十三日三小隊ヲ以テ田原坂ノ後ヲ衝ント吉次ヲ越テ進軍シ背道ニ至ラントスル時、敵出テ禦ク故ニ其後ヲ絶ツ能ハス、終日戦ヒ黄昏ニ及テ兵ヲ引、其日死傷四名ナリ、同十五日奈知山進撃ノ際銃創ヲ負、同十七日川尻病院へ入室、同卅

日木山へ転院、四月十四日鹿兒島方へ引揚相成り日向路ヲ経テ五月上旬帰県、谷山郷中村ニテ療養仕、十月六日警視出張所ヨリ御呼出相成候也、

鹿兒島県第二大区

二小区六十五番地

明治十一年四月

酒匂景繼

一六五 中村郷兵衛上申書

明治十年二月十六日第三大隊七番小隊長士ニテ鹿兒島県発足、同二十二日熊本県川尻ニ着シ則ヨリ野出村ヲ守リ、三月初旬植木駅ニテ数日連戦、四月十四日川尻敗戦ノ報ニヨリ諸軍悉ク引テ木山ニ陣ス、夫ヨリ人吉へ転シ、四月中旬分隊長トナリ神ノ瀬ニ出張、同月下旬久木野へ進撃奮闘連戦スル七昼夜、五月初旬鹿兒島県下吉田郷へ引揚、夫ヨリ上庄内へ転シ高原へ進撃ス、然レトモ衆寡敵セス或ハ彈藥尽テ遂ニ拔事能ハス、引テ上庄内ヲ守リシカ下庄内敗軍ノ報アリ、諸軍宮崎川ヲ固守シ互ニ激戦、我軍利アラスシテ引テ佐土原ニ抛ル、八月上旬小隊長ニ挙ラレ美々津川ニ防戦シ、終ニ延岡迄敗軍トナリ、八月

二十五日帰県、九月十八日帰順仕候也、

鹿兒島県第三大区一小区

明治十一年四月

中村郷兵衛

一六六 大山直治上申書

明治十年旧三月鹿兒島県下出発、十二日人吉へ着、剣刀二番小隊半隊長トナリ十五日蒲生郷へ守兵、十九日戦ヒ敗レテ山田へ退キ、夫ヨリ國府、(國分市)末吉ヲ経テ志布志ニ抛ル、同所ニテ解隊、振武拾番中隊兵士ニ加入セラレ、旧六月ノ末高原進撃ノ際負傷ヲ蒙リ、諸所病院ニ於テ療養、(日向市)富高新町敗軍ノ砌降伏仕候也、

鹿兒島県

明治十一年四月

大山直治

一六七 池田兼長上申書

宮城県
明治十年二月十五日第一大隊十番小隊分隊長ヲ以テ鹿兒島県ヲ発程ス、同月廿一日熊本城ヲ攻撃勝敗不決、明午橋へ守スル事二十余日、三月下旬ヨリ本妙寺ニテ戦フ終

日、夜ニ入り城兵退ク、四月中旬川尻敗戦ノ報ヲ得テ木山

ニ退キ、夫ヨリ椎葉山路ヲ経テ人吉ヨリ神ノ瀬ニ到ル、

同所ニテ破竹壱番中隊中隊長トナル、三十余日飯瀬村ニ

守兵ス、五月中旬人吉ニ退キ同所並ニ大畑ノ戦皆不利シ

テ鹿兒島県ノ内吉田郷へ退キ、吉田越ニテ戦ヒ終日、夜

ニ入り官軍退ク、六月中旬飯野ヨリ小林ヲ経テ高原へ転

ス、同月下旬同所ノ戦又不利シテ都ノ城へ退ク、同所ニ

テ鷗翼一番中隊ト改ル、七月上旬高原へ進撃兩度、終ニ

不拔又同所へ退ク、七月中旬宮崎へ転ス、同所ノ戦大敗

ニテ佐土原へ退キ、美々津へ同断、四月中旬鳥川守兵中

同隊ノ監軍トナル、夫ヨリ川内へ退キ加草ノ敗戦ヨリ帰

邑帰順仕候也、

鹿兒島県

明治十一年三月

池田兼長

一六八 鷓木五左衛門上申書

宮城県
明治十年二月十五日壱番大隊一番小隊分隊長トナリ鹿兒島発程、同廿二日熊本へ着、即ヨリ攻城ス、同廿六日高瀬へ進撃、同日飯倉へ引揚、同廿七日吉次峠へ守兵、同廿九

日敵軍ヨリ襲撃ス、夕方ニ至リ敵軍退キ一里程追撃ス、同日右同所へ守兵ス、同三月上旬大田尾郷へ守兵スル事三週間程、三月下旬木留へ転守ス、四月中旬長峯へ引揚、同下旬人吉ノ様引揚、暫時有テ鹿兒島県下吉野村へ転陣、五月上旬同県下飯野郷へ応援トシテ転戦、勝敗不決シテ栗野郷へ守兵、同中旬國分郷新川村ニテ戦争終ニ敗走ス、夫ヨリ敷根・福山・末吉・岩川ノ諸郷へ襲撃スレトモ皆敗軍、夫ヨリ山ノ口へ引揚、夫ヨリ六月下旬清嶽へ転守ス、同月宮崎へ転陣、七月上旬敵襲撃終日ニシテ敗走、夫ヨリ高鍋、美々津へ転戦、夫ヨリ延岡長井村ニ於テ七月中旬帰順仕候也、

鹿兒島県下

第三大区二小区

明治十一年三月

鶴木五左衛門

一六九 中馬才助上申書

明治十年二月十七日第五大隊九番小隊兵士ニテ鹿兒島程、同廿一日熊本県松橋駅エ着シ、翌廿二日午前三時同所出立同八時頃熊本城攻撃、同午後二時頃ヨリ植木口へ

進軍ス、己二日没ニ及ヒ同所へ番兵シ、翌廿三日木ノ葉村へ進撃シ、終日ノ戦ニテ遂ニ接戦トナリ、官軍南關ヲ差シテ敗走ス、味方死傷廿余名、官軍死骸百余名ヲ棄タリ、同日官軍ノ本營ヲ抜キ同營ニテ小銃三百挺・彈藥三万発余・金五百円・軍馬壹疋分捕、味方ハ直ニ植木へ引上ル、同廿五日山鹿エ官軍襲来スルニ依リ直ニ進撃シ、半日ヲ過スシテ官軍百七名ノ屍ヲ遺テ、敗走ス、味方死傷十余名ナリ、直ニ味方植木へ引上ル、其後田原坂へ官軍ヨリ進撃アリ、終日戦ヒ遂ニ接戦シ官軍七百廿余屍遺テ、敗走ス、味方死傷三十余名アリ、味方ハ同所ヲ固ク守ル、其後木留口へ進撃ス、官軍田原ヲ差テ敗走ス、我隊ハ同所へ守ヲ付ル、夫ヨリ諸方へ進撃ス、其後三月十五日ニ至リ木留口ナル奈知山へ大進撃ス、終日ノ憤戦ニテ追々近ツクニ味方ハ彈藥尽キテ吉次越へ守ヲ変ヘル、同所ニテ押伍トナリ諸方へ進撃ス、同所ヲ守ル事殆ト一週間ニシテ遂ニ求摩ノ人吉隊ノ守口ヨリ破レ、止ヲ得ス邊田野村ニ引揚ル、同所へ守ヲ付ル、官軍追々襲来シ直ニ官軍ヨリ進撃アリ、戦フ事四日間ニシテ遂ニ官軍屍或ハ銃ヲ棄テ吉次越ヲ差テ敗走、味方ハ尚ヲ堅ク守ルニ、川尻口敗戦ニ及ヒ各隊木山へ引揚ル、途中長峯村ニテ戦ヒ直ニ諸

二 宮 城 県 上

隊野邊エ引揚ル、夫ヨリ求摩ノ方ヘ引揚ル、同所ニテ隊
 号ヲ行進隊ト変称シ直ニ鹿兒島エ赴キ吉野村(鹿兒島市)ヘ守リヲ付
 ケ直ニ進撃ス、勝敗決セス、其後官軍ヨリ進撃アリ、半
 日ノ戦ヒニ味方大勝利ヲ得官軍五十余名ノ屍ヲ棄テ、敗
 走ス、味方討死ナシ、手負七八名、同日銃器三十八挺取
 ル、陸軍々曹ヲ生虜ス直ニ斬ス、其后官軍大進撃シ来ル、
 遂ニ味方撃破セラレ翌日未明ヨリ味方進撃シ直ニ撃破ス
 官軍八百余名ノ死屍ヲ遺テ、敗散ス、同日銃器廿余挺・
 彈藥五千発余ヲ取ル、味方ハ死傷二十人ニ足ラス、其后
 官軍ヨリ武村ヘ大進撃アリ、終日ノ戦ヒニ彈藥尽果テ味
 方吉野村ヘ引揚ル、一時同所ニテ防戦シ是モ彈藥乏キ故
 直ニ同県下加治木郷ニ引揚ル、同所ニテ敗戦福山郷ヘ引
 上ル、一時同所ニテ防戦夫ヨリ末吉郷ヘ引上、同所岩川村
 へ邊見十郎太ノ指揮ヲ以テ進撃ス、遂ニ彈藥尽ルヲ以テ
 直ニ末吉町ヘ引揚、翌日官軍大進撃ニ付味方散乱シ直ニ
 宮崎ヲ差シテ引揚ル、途中諸所ニ戦フ、遂ニ宮崎川ヘ守
 ヲ付ル事一週間ニシテ終ニ敗レ美々津ヘ引揚ル、同所ニ
 テ分隊長トナリ美々津本道ヲ守ル、戦フ事数日ニシテ終
 ニ敗レ、富高新町(日向市)ヘ引揚ントスルニ遂ニ前後ヲ囲マレ、
 止ヲ得ス同所山中ニ伏シ、夜ニ入り同所ノ川ヲ忍ヒ渡ラ

ントスルヲ、第二旅団ト出逢ヒ遂ニ降伏シ、同八月下旬
 帰宅仕候也、

鹿兒島県下第二大区十一小区

比志島村四十七番地

明治十一年三月

中馬才助

一七〇 松田正之丞上申書

(二月十五日) 村田新八隊長

明治十年旧正月三日第二大队七番小队兵士ニテ鹿兒島県
 下発足、同月九日熊本県下川尻駅ニ着、同日直ニ百貫石(熊本市)
 ニ於テ暫時戦鬪、終テ哨兵スル四五日ニ至ル、夫ヨリ大
 津駅ニ転陣哨兵スル、是亦四五日ナラン、夫ヨリ田原坂ヘ
 転戦、即日ヨリ昼夜奮戦連日屢々勝利ヲ獲ル殆ト七日余
 日ナラン、然レトモ左手ニ銃創ヲ蒙リ夫ヨリ川尻病院ニ
 暫時在テ帰郷ス、同年五月漸ク全快ヲ得、亦湯之尾郷ヘ
 出張半隊長トナリ戦ヒ、再ヒ銃創ヲ蒙リ山之口病院ニ入
 リ治療、帰家ノ上帰順仕候也、

鹿兒島県下蒲生郷

第五拾三大区二小区

明治十一年三月

松田正之丞

鹿兒島県下日置郷

一七一 神宮司市郎次上申書

明治十一年三月

第十二大区一小区三百二十番地

川崎與兵衛

明治十年二月十五日(村田新八隊長)第二大隊十番小隊兵士ニテ鹿兒島

足、同廿一日熊本城攻撃、同廿五日高瀬ニ転戦即日山鹿

へ引揚、此地へ在ル凡三週間、夫ヨリ大津へ至リ、鹿兒

島県内宮崎ニ於テ帰順、八月中旬帰郷ノ処我兵再ヒ鹿兒

城へ突入スルノ際本営ノ檄文ニ応シ、喜入郷迄出兵、官

軍ニ遮ラレ半路ヨリ帰宅仕候也、

鹿兒島県下今和泉郷

第十四大区一小区四拾九番地

明治十一年第三月

神宮司市郎次

鹿兒島県下日置郷

第十二大区一小区三百二十番地

川崎與兵衛

明治十年二月十七日(水山弥一隊長)第三大隊五番小隊兵士ニテ鹿兒島

足、同廿一日熊本城攻撃スル凡二週間、三月上旬(那知山之)奈須山

攻撃ノ砌手負、川尻ニ於テ治療、四月初旬帰郷、六月上

旬帰順、我兵鹿兒島城へ突入之際檄文ニ応シ喜入郷迄出兵、

官兵ニ遮ラレ半途ニシテ帰宅仕候也、

鹿兒島県下今和泉郷

第十四大区一小区四拾九番地

明治十一年第三月

大窪新左衛門

一七二 川崎與兵衛上申書

一七四 萬膳正藏上申書

明治十年三月九日鹿兒島出発、同十四日熊本県下春日村

へ着シ、遊撃四番小隊兵士ニ編入セラレ、安政橋下ル、高

田原へ守兵、此所ニテ手負帰郷仕居候処、九月一日

我兵鹿兒島城(高松カ)へ突入ノ際檄文ニ応シ、近郷伊集院迄出兵ノ

処、半途ニシテ官軍ニ遮ラレ帰郷仕候也、

明治十年旧(四月六日)二月廿三日栗野郷ニ於テ振武十三番中隊右小

隊半隊長トナリ、鹿兒島小野村番兵、百引郷ニ於テ手負、

都ノ城病院へ入り、同旧六月十八日帰郷仕候也、

鹿兒島県下清水郷

鹿兒島県下清水郷

第六拾二大区一小区

明治十一年三月

萬膳正藏

一七五 鶴丸量衛上申書

明治十年二月十五日第二大隊二番小隊兵士ニテ鹿兒島発

(村田新八隊長)

(熊本市)

足、同廿一日熊本県へ着ス、即夜高橋ニ於テ哨兵、翌廿

(熊本町)

(熊本市)

二日攻城、同廿四日木留へ番兵、同廿五日迎町へ引揚、

同廿六日ヨリ松橋町ニ於テ守兵凡一週間、三月六日川尻

町ニ引揚、同八日ヨリ田原坂ニ進軍、同廿二日迄昼夜連

戦、同廿三日ヨリ植木町ニ於テ連戦四月六日ニ至ル、夫

ヨリ病ニ罹リ、同月中旬帰郷、七月廿四日自首帰順、我

兵再ヒ鹿兒城へ突入ノ際檄文ニ応ジ伊集院迄出兵ノ処、

官兵ニ遮ラレ途中ヨリ帰宅仕候也、

(永)
鹿兒島県下吉利郷

明治十一年第三月

鶴丸量衛

(註)口供書は永利郷とあり

一七六 片之坂彌右衛門上申書

明治十年旧四月朔日遊撃九番小隊長トナリ、同日出

発、翌二日鹿兒島県ノ内出水郷芭蕉村出張、同所番兵、

(田水市)

同月廿日頃敗戦、夫ヨリ宮之城へ引揚ケ、同五月十二日

戦敗レ、夫ヨリ帰郷、同月廿五日帰順仕候也、

鹿兒島県下野田郷

第三十六大区二小区

明治十一年第三月

片之坂彌右衛門

一七七 田代周一郎上申書

明治十年旧四月朔日遊撃九番小隊分隊長トナリ、同二日

鹿兒島県下出水郷ノ内芭蕉村ニ着シ同所番兵、同月廿日

攻戦ニ及ヒ終ニ敗戦シ、夫ヨリ宮之城へ引揚、五月十二

日敗戦帰郷ノ上、同月廿五日帰順仕候也、

鹿兒島県下野田郷

第三十六大区一小区

明治十一年三月

田代周一郎

一七八 瀬之口才藏上申書

明治十年二月十六日第四大隊第三小隊兵士ニテ鹿兒島発

(編野利秋隊長)

足、同廿二日熊本県へ着、直ニ植木へ進軍連戦、夫ヨリ山鹿へ転戦ス、四月六日同隊小隊長トナリ、同十五日鳥合志町ノ栖ニ於テ手負、五月中旬帰県帰順仕居候也、

鹿兒島県下第五十三大区

三小区第十四番地

明治十一年三月

瀬之口才藏

一七九 荒牧郷十郎上申書

明治十年二月十六日四番大隊八番小隊兵士ニテ鹿兒島出

(福野利秋隊長)

(玉東町)

発、同廿一日熊本城攻撃、翌廿二日木之葉ヨリ山鹿へ進撃、同所へ在ル事凡一週間、夫ヨリ大津へ進軍、四月中旬鬪戦銃創ヲ負ヒ、八月上旬鹿兒島県下宮崎ニ於テ帰順仕居候処、九月一日我兵麿城へ突入ノ際檄文ニ応シ喜入郷迄出兵ノ処、官兵ニ遮ラレ中途ヨリ帰宅仕候也、

鹿兒島県下今泉郷

第十四大区一小区百三十三番地

明治十一年三月

荒牧郷十郎

一八〇 塚田仙藏上申書

明治十年二月十五日第一大隊九番小隊兵士ニテ鹿兒島出

(藤原國幹隊長)

発、同廿二日熊本城攻撃、三月十九日迄連戦、翌廿日八代口へ転戦、同所ニ於テ負傷川尻病院ニ入ル、四月三日頃帰県、八月八日帰順、九月一日我兵再ヒ麿城突入ノ節檄文ニ応シ喜入郷迄出兵、官兵ニ遮ラレ途中ヨリ帰宅仕候也、

鹿兒島県下今泉郷

第十四大区一小区廿五番地

明治十一年三月

塚田仙藏

一八一 谷村助七上申書

明治十年三月三日第九大隊五番小隊半隊長ニテ鹿兒島出

(坂本町)

発、同月九日肥後国松本ニ至リ番兵シ、同十日坂本へ進軍、同十一日曉天妙見山ニ於テ午前六時ヨリ接戦午後一時ニ至ル、同十二日八代口へ進撃シ午前六時ヨリ午後六時マテ激戦、官軍勢盛ニシテ烈戦黄昏ニ及テ銃創ヲ蒙リ、

坂元病院へ入り、四月廿九日帰県シ帰順致居候処、九月一日我兵再ヒ魔城突入ノ際、鹿兒島県下伊作郷(茨上町)へ至リ寡兵尽力奔走ノ際縛ニ就候也、

鹿兒島県下第二大区二小区
第五百五十九番地
谷村助七

明治十一年第三月

一八二 山村隼治上申書

明治十年三月九日鹿兒島出発、同十六日熊本県下田原坂へ進軍、同所激戦数日、其後向坂ニ於テ銃創ヲ受ケ、同廿八日帰県、今泉郷警視出張所へ自首帰順、九月一日再ヒ鹿兒島城へ突入ノ際本営ノ檄文ニ応シ、喜入郷迄出兵、官軍ニ遮レ半途ヨリ帰宅仕候也、

鹿兒島県下今泉郷
山村隼治
明治十一年三月

一八三 山之内源平上申書

明治十年二月十七日(池上四郎隊長)第五番大隊六番小隊兵士ニテ鹿兒島

県出発、同廿一日熊本県着ク、即チ城攻撃、三月廿六日松橋ニ於テ大ニ勝利、同三十日同所ニテ手負ヒ、五月初旬帰宅、六月中旬自首帰順、九月初旬再巡查捕縛ノ為番兵ス、同十二日捕縛ニ相成候也、

鹿兒島県下今泉郷
第十四大区卷小区百五十番地

十一年二月

山之内源平

一八四 荻田銀一郎上申書

明治十年二月十五日(村田新八隊長)第二大队六番小隊兵士ニテ鹿兒島発足、同廿四日熊本へ着シ即チヨリ攻城、同廿七日大津へ引揚守兵凡一週間、後チ田原坂へ進撃、敗レテ植木へ退ク、茲ヲ守ル事三日、此所ニ於テ手負川尻病院へ入り療養凡十日、夫ヨリ宮崎へ赴キ、九月上旬富高新町敗戦ノ節宮崎ニテ帰順仕候也、

鹿兒島県下日置郷
第十二大区一小区六番地

明治十一年第三月

荻田銀一郎

一八五 山口仁之助上申書

明治十年旧三月七日熊本県下人吉へ出兵、正義一番中隊兵士ニテ同所へ哨兵凡十日、夫ヨリ鹿兒島県下大口郷ニ於テ屢々戦ヒ、創ヲ蒙リ旧四月七日帰宅、旧六月十日帰順仕居候処、旧七月下旬我兵鹿兒島へ突入ノ際檄文ニ応シ、近郷伊集院迄出兵、官軍ニ遮ラレ半途ヨリ帰宅仕候也、

鹿兒島県下日置郷

第十二大区三小区九十番地

明治十一年第三月

山口仁之助

一八六 木場須賀人上申書

明治十年二月十六日^(永山弥一郎隊長)第三大隊六番小隊兵卒ニテ鹿兒島発程、同廿二日熊本城攻撃、病ニ罹リ同月廿五日川尻病院ニ入り治ヲ加レトモ愈ヘス、三月十一日帰県、六月中旬頃帰順自宅謹慎罷在候処、我兵再ヒ鹿兒島へ突入セリ、則郡山郷ノ内川田村迄出張ノ処、官兵ノ遮止スルニ遇シ、

旧八月九日頃郡山郷警視派出所ヨリ御喚出相成候也、

鹿兒島県郡山郷第廿一大区

五小区

明治十一年三月

木場須賀人

一八七 海老原盛平上申書

昨十年旧五月十五日鹿兒島県出發、宮崎へ同十六日着、当地警戒スル事十五日、七月八日米良小川^(西米良村)へ着スルヤ直ニ戦端ヲ開キ終日勝敗不決、同十日干城七番中隊へ編入、左半隊長ニ挙ラレ、同十二日天堤進撃終ニ戦敗レ、夫ヨリ銀鏡村^(西都市)へ引揚二本松へ番兵ノ所、高鍋ノ内原村^(本城町)へ官兵出張趣キ承リ、八月五日帰順自首仕候也、

鹿兒島県下志布志郷

第百四大区老小区

十一年二月

海老原盛平

一八八 坂口平吉上申書

明治十年二月十七日^(福野利秋隊長)第四番大隊十番小隊兵士ニ編入シ鹿

二 宮 城 県 上

兒島県出発、同廿一日熊本城攻撃、同日山鹿へ赴キ一週
間位滞宮、同八日比吉次峠(玉東町)ニテ攻撃、夫ヨリ三月上旬比
木留(箱木町)ニ於テ手負致シ、帰県ノ上六月中旬帰順仕候処、九月
初旬鹿兒島へ襲来ノ際本営ノ募リニ随ヒ、近郷喜入迄出
張、官兵ニ途ヲ遮ラレ半途ニシテ帰郷仕候也、

鹿兒島県今和泉

第拾四大区三小区三十六番地

十一年二月

坂口平吉

一八九 有馬信助上申書

明治十年二月十五日第壹番大隊八番小隊ニテ鹿兒島県ヲ
(篠原副隊長)
発足、同廿一日熊本県へ到着、直ニ攻城、翌廿二日城外
ニ於テ手負致シ川尻病院ニテ療養、四月中旬帰県ノ上、
六月初旬帰順仕居候処、九月初旬再ヒ鹿兒島へ襲来ノ際
本営ノ募リニ随ヒ、近郷喜入郷迄出張、官兵ニ道ヲ中絶
セラレ空シク帰郷仕候也、

鹿兒島県下今和泉

第拾四大区三小区七十九番地

十一年二月

有馬信助

一九〇 託摩英藏上申書

明治十年二月十四日四番大隊壹番小隊ニテ鹿兒島県出発、
(桐野利秋隊長)
同廿一日熊本県へ着ク、則ヨリ攻城、三月一日田原坂へ
応援戦争ノ砌り手負、四月中旬帰宅、五月初旬自首帰順、
然処鹿兒島へ再ヒ襲来ノ際巡查捕縛ノ人員ニ加ハリ、近
傍へ番兵イタシ、同十一日捕縛ニ相成り候也、

鹿兒島県下今和泉郷

第拾四大区三小区五拾七番地

十一年二月

託摩英藏

一九一 書川次郎上申書

明治十年旧四月四日鎮撫三番小隊へ編入セラレ、県下谷
山郷ニ於テ番兵、同八日交戦利アラス空シク帰郷、旧八
月上旬帰順、九月一日再ヒ鹿兒島へ襲来ノ際本営ノ募ニ
随ヒ、近郷伊集院郷迄出張、官兵ニ中絶セラレ半途ニシ
テ帰郷仕候也、

鹿兒島県下日置郷

第十二大区巷小区五十八番地

十一年二月

書川次郎

鹿兒島県下高隈郷

十一年二月

藤田熊助

一九二 池田金左衛門上申書

明治十年二月十七日(桐野利秋隊長)第四大隊十番小隊ニテ出発、同廿一日熊本城攻戦、同日山鹿へ赴一週間位滞営、同八日比吉(五

次峠ニテ攻撃、夫ヨリ三月上旬比木留(植木町)ニ於テ手負致シ、

帰県ノ上六月初旬帰順仕居候処、九月初旬比鹿兒島へ再

襲来ノ際本営ノ募ニ随ヒ、近郷喜入迄出張候処、官軍ニ

中絶サレ半途ニシテ帰郷仕候也、

鹿兒島県下今泉郷

第十四大区二小区二百一番地

十一年二月

池田金左衛門

一九四 吉元淺右衛門上申書

明治十年二月十六日(藤原國幹隊長)第一番大隊七番小隊兵士ニテ同廿四

日熊本県へ到着、即ヨリ攻城、昼夜戦争ニ及ヒ、同三十日高瀬ニ進撃候処敗走(玉葉町)ニ引退、一時守兵候処攻撃セ

ラレ又々敗軍、田原坂へ赴キ、夫ヨリ出町へ引揚守兵致

居候処、同所ニテ手負致シ帰県ノ上六月上旬比帰順仕居

候処、九月上旬比鹿兒島へ再ヒ襲来之際本営ノ檄文ニ応

シ、近郷伊集院迄出張之処、官兵ニ遮ラレ半途ニシテ帰

郷仕候也、

鹿兒島県下日置郷

第十二大区小一区二百二十五番地

十一年二月

吉元淺右衛門

一九三 藤田熊助上申書

昨十年五月七日福山へ出張、切隊三番小隊ト成リ、(藤北町)市成

郷へ番兵致シ居候処、直ニ戦争致シ敗軍ノ折帰宅致シ、

七月三十一日帰順願出候処、自宅謹慎被仰付候事、

一九五 鶴田喜市上申書

明治十年旧曆四月廿四日在所出発、同廿六日福山へ着候

処、切隊壹番隊へ編入小隊長ト相成、同処へ廿七八日位
番兵、同五月廿日高隈へ引揚、同廿一日戦争終ニ敗軍、
夫ヨリ市成へ引揚二日位番兵ノ処病氣相煩ヒ、帰宅ノ上
帰順自首仕候也、

鹿兒島県下百引郷

十一年第二月

鶴田喜市

一九六 愛甲七郎右衛門上申書

明治十年六月上旬勇義四番小隊分隊長戸長ヨリ被申付、

鹿兒島県下出水郷内其他諸所へ番兵、六月下旬頃官軍進
撃悉ク敗レ降伏仕居候処、旧八月十七日加治木郷警視出
張所ヨリ御喚出相成候也、

鹿兒島県下出水郷第三十八大区

一小区三十四番地

明治十一年第三月

愛甲七郎右衛門

一九七 秋山幸吉上申書

明治十年二月十五日一番大隊九番小隊ニテ出発、同廿一
(篠原副隊長)

日熊本城攻撃、後二週間位同所へ哨兵、三月初旬八代・
小川ヲ經三船ニ至リ争戦、夫ヨリ病ニ罹リ帰県、同六月
初旬帰順、其後再ヒ鹿兒島へ突入ノ際本營ノ募ニ応シ、
喜入郷迄出張ノ処、官兵ニ遮ラレ帰郷仕候也、

鹿兒島県下今和泉郷

第十四大区老小区

明治十一年三月

秋山幸吉

一九八 木佐木平上申書

明治十年旧二月十六日大口郷ニ於テ第十大隊八番小隊半
隊長トナリ、同所廿三日発程、同廿九日八代口へ進撃、
即チ手負ニ付求摩人吉病院へ入り、同旧三月十四日帰郷
自首仕候也、

鹿兒島県第六十二大区一小区

第十番地

明治十一年第三月

木佐木平

一九九 郡山矢一郎上申書

明治十年旧正月廿日(三月四日)八番大隊一番小隊兵士ニテ鹿兒島発

程、同廿九日熊本県へ到着、同三十日田原・植木ニ於テ

進撃、旧二月廿五日病氣相煩木山病院(益城町)ニ入り、旧二月廿

八日退院、三月十八日帰県仕候処、五月廿七日自首ノ上

自宅謹慎被仰付罷在候処、再ヒ鹿兒島へ突入ノ際川田村

迄出張候ノ処、官兵ニ遮レ帰宅仕候也、

鹿兒島県下郡山郷

第二十大区四小区六拾六番地

明治十一年第三月

郡山矢一郎

二〇〇 四本八平上申書

昨十年二月十七日(池上四郎發長)第五大隊三番小隊ニテ出発、同月廿一

日熊本城攻戦、翌廿二日熊本県下山鹿へ赴キ、三月三日

長野原ニテ手負則川尻ニ於テ療養、四月上旬帰県、六月

上旬帰順致シ居候処、鹿兒島へ再ヒ突入ノ際右本営ノ募

リニ応シ、近郷喜入迄出張候処、官兵ニ遮ラレ半途ニシ

テ帰宅仕候也、

鹿兒島県今和泉郷

明治十一年三月

四本八平

二〇一 奈良迫卯之助上申書

明治十年三月廿四日鹿兒島県発足、熊本県内矢部迄出張、

行進十一番中隊トナリ萬坂峠(矢部町)へ番兵致シ居候処、直ニ求

摩人吉へ引揚ニ相成り、然ル処鹿兒島県内大口郷ニ於テ

一戦イタシ輕創ヲ被リ即帰郷、六月上旬帰順致シ即時放

免相成り居候処、再ヒ鹿兒島城山へ襲来ニ付、山田村マ

テ出張候処官兵ニ遮ラレ帰宅候也、

鹿兒島県下谷山郷

第四大区三小区三百三十三番地

十一年二月

奈良迫卯之助

二〇二 邊見會八上申書

明治十年二月十六日(編野和秋隊長)四番大隊九番小隊ニテ出発、同廿一

日熊本城へ攻戦、同日植木ニ於テ戦争、同廿三日山鹿へ

進軍、同所へ三週間位滞陣ス、三月初旬比限府ニテ二週間
連戦、夫ヨリ大津進軍ノ時手負ヒ、則チ帰県ノ上帰順仕謹
慎中、再ヒ鹿兒島へ襲来ノ節本營ノ募リニ随ヒ、近郷喜入
迄出兵ノ処、途ヲ官兵ニ遮ラレ半途ニシテ帰郷仕候也、

鹿兒島県下今和泉郷

第拾四大区老小区三十二番地

十一年三月

邊見會八

二〇三 別府榮輔上申書

(村田新八隊長)

明治十年二月十五日第二番大隊二番小隊付医師組長トナ
リ鹿兒島県発足、同廿二日熊本県下川尻町ニ着スルヤ該
地高橋ト百貫石ノ方面海軍ヲ卸スト報アリ、時ニ二番大
隊派出ニ付随行、此時キ海兵ト戦ヒ創者四五名アリ、是
ヲ護送シ川尻ニ至ル、高橋・百貫石ノ方面官兵大ヒニ敗
走シ空地トナリ、二本木町白川学校ニ転院ス、此所ニテ

八九日施術又川尻病院平病検査ノ為メ廻行ス、時ニ本病
院川尻ナリ、当院医員足ラザルニ依リ此ニ転シ施術スル
事廿五六日、八代口ノ鬨利アラス川尻既ニ戰場ニ近シ、
故ニ四月十五日当院ヲ木山ノ町ニ移ス、又タ施術スル事

八九日、同シク廿一日諸戦地ヲ求摩人吉へ引揚ケ当院ヲ
矢部ノ濱町ニ移ス、是ヨリ患者ヲ護送シ漸クニ鹿兒島県
下小林郷ニ引揚、時ニ延岡豊後路ノ戦地医師足ラザルヲ
報シ来リ、彼ノ地ニ出張延岡病院ニ於テ施術スル事二三
十日、又該地水ヶ谷戰場へ出張廿三四日治療、又当院ヲ
長井村ニ転ス、(宇目町) 兵皆官兵ニ被困ル、我病院戰場ト川ヲ隔
テ、居ル、八月十八日困ヲ解キ出走スルニ因リ大川渡ル
事ヲ得ス、終ニ第二旅団二十中隊へ降伏ス、尋テ宮崎警
視分署ニ於テ自宅謹慎被仰付帰県ノ上今和泉警視派出分
署へ自首帰順ス、九月一日再ヒ鹿兒島へ突入ノ際本營ノ
檄文ニ応シ兵士ニ随行シ喜入郷マテ出張シ、官兵ニ遮ラ
レ空シク帰郷、同十一日谷山郷警視分署ヨリ御呼出シニ
相成リ申候也、

鹿兒島県下今和泉郷

第拾四大区老小区十八番地

十一年三月

別府榮輔

二〇四 伊集院兼雄上申書

明治十年二月十五日(藤原國幹隊長) 一番大隊十番小隊兵士ニテ鹿兒島県

出発、同廿一日熊本城攻撃昼夜激戦、三月廿八日(熊本市)永峯へ
応援ノ砌り手負ヒ入室、四月中旬帰県、五月初旬自首帰
順、九月一日再鹿兒島へ襲来ノ際本営檄文ニ応シ、喜入
郷迄出張、官兵ニ遮ラレ止ヲ得スシテ帰宅、同十二日捕
縛ニ相成リ申候也、

鹿兒島県下今泉郷

第十四大区巷小区百十六番地

十一年三月

伊集院兼雄

二〇五 日高祐吉上申書

明治十年三月七日熊本県下人吉ニ出張(隊長河野主一郎)正義隊一番兵士ニ
編入、同所ニ於テ十余日番兵、夫ヨリ鹿兒島県下大口ニ
於テ数闘、又熊本県下井ノ嶽(永保也)ニ於テ戦ヒ銃創ヲ蒙リ、旧
曆四月上旬帰県ノ上帰順、九月一日再ヒ鹿兒島へ襲来ノ
際本営ノ募リニ応シ近郷伊集院迄出張、官兵ニ遮レ半途
ニシテ帰郷仕候也、

鹿兒島県下日置郷

明治十一年三月

日高祐吉

二〇六 郡山伊平太上申書

明治十年旧正月五日(二月十七日)第五大隊五番小隊兵士ニ編入シ鹿兒
島県発足、同十日熊本城へ進撃、同所段山口ニテ手負、
直ニ川尻病院へ入り、同二月十七日帰県、五月廿七日帰
順致居候処、同九月一日再ヒ鹿兒島城へ突入ノ際、郷内
川田村(出地)迄出兵、官軍ニ遮ラレ帰宅仕候也、

鹿兒島県下郡山郷

第廿一大区五小区

明治十一年三月

郡山伊平太

二〇七 岡部與助上申書

昨十年二月十八日(六)第三大隊四番小隊兵卒ニテ鹿兒島発程、
同廿三日熊本城攻撃、段山口へ番兵、同廿七日田原坂ニ
於テ連戦、三月十日手負、四月一日帰県、十一月廿八日
帰順、九月一日再ヒ鹿兒島へ突出ノ際本営ノ檄文ニ応シ
喜入郷迄出張、官兵ニ遮ラレ直ニ帰宅、同十一日捕縛相
成候也、

鹿兒島県下今和泉郷
第十四大区一小区

明治十一年三月

岡部與助

二〇八 谷川十藏上申書

十年二月十四日(村田新八隊長)第二大隊六番小隊兵卒ニ編入セラレ、同十五日鹿兒島県出発、同廿二日熊本県ノ城ヲ攻撃、三月十八日田原口へ出軍防戦、同廿日同所敗軍ニ付植木向坂へ退キ戦ヒ、其後銃創ヲ受川尻病院へ入り、其後(益城町)木山へ転院帰県、六月十八日鹿兒島県本城ニ於テ雷撃ニ番中隊(日向市)ノ半隊長トナリ処々ニ於テ戦鬪、七月下旬美々津敗軍ノ時降伏候事、

鹿兒島県下蒲生郷

明治十一年三月

谷川十藏

二〇九 鳥山平之助上申書

昨十年四月下旬勇義九番小隊兵士ニテ鹿兒島発足、(川内市)隈之城郷向田へ番兵、五月下旬阿久根へ進軍野田郷(野田市)其他諸所

ニ於テ交戦、夫ヨリ向田(川内市)へ退キ、同所ノ戦ニテ一隊散乱帰郷、八月上旬隈之城警視派出所ニ於テ帰順ノ処、鹿兒島城へ突出ノ際(川内市)平佐郷迄出張、官兵道ヲ遮リ帰郷、九月中旬谷山郷警視出張所へ御呼出相成候也、

鹿兒島県下永利郷

第二十七大区四小区五番地

明治十一年三月

鳥山平之助

二一〇 永田金兵衛上申書

昨十年二月十六日(網野利秋隊長)第四大隊七番小隊兵士ニテ鹿兒島発足、同廿一日熊本城攻撃番兵、同廿二日山鹿へ進軍、激戦凡一週間、同廿八日田原ヨリ植木へ赴キ戦ヒ、三月上旬鹿兒島へ転軍、八月中旬於宮崎帰順帰宅ノ処、九月一日再ヒ鹿兒島城へ突入ノ際本營ノ募ニ応シ、近郷喜入郷迄出兵、官軍ニ遮レ半途ヨリ帰宅仕候也、

鹿兒島県下今和泉郷

第十四大区一小区十四番地

明治十一年三月

永田金兵衛

二二一 成尾一二上申書

明治十年二月十四日(永山第一部隊長)第三大隊四番小隊兵士ニテ同十六日

鹿兒島縣発足、同廿二日熊本城攻撃、其後熊本城段山口

番兵、同所二股村(玉東町)へ転軍交戦、其後田原坂へ進軍、三月

廿四日同所敗軍ノ節植木向坂へ退キ、再ヒ植木町ニ進軍

同所番兵、川尻口敗軍武官村へ退キ、保田窪ニ於テ戦ヒ

木山町ニ引揚ク、同所ニ於テ交戦、其後矢部ヲ経テ人吉

へ移ル、時ニ平病ニ罹リ帰郷、七月上旬帰順、九月一日再

ヒ鹿兒島城へ突出ノ際本營ノ檄文ニ応シ喜入郷迄出兵、

官軍ニ遮レ空シク帰宅、九月中旬捕縛相成候也、

鹿兒島県下今和泉郷

明治十一年三月

成尾一二

二二二 永吉紋兵衛上申書

昨十年二月十六日(永山第一部隊長)第三大隊四番小隊兵士ニ編入鹿兒島発

程、三月三日熊本城下へ着シ、砂川(松橋町)・御舟(御船町)其他諸所ニ於

テ戦ヒ、久木野(水俣市)交戦ノ際銃創ヲ蒙リ直ニ帰県、八月初旬

帰順、九月上旬再ヒ鹿兒島城へ突入ノ際平佐郷迄出張、(川内市)
官兵ニ遮レ半途ヨリ帰宅、九月中旬谷山警視出張所ヨリ
御呼出相成候事、

鹿兒島県下永利郷

第廿七大区四小区十七番地

十一年三月

永吉紋兵衛

二二三 鮫島平藏上申書

昨十年二月十六日(永山第一部隊長)第三大隊四番小隊兵士ニテ鹿兒島ヲ発

シ、同廿一日熊本県下へ着シ即日困城攻撃、翌廿二日ヨ

リ茲ヲ守ル凡一週間、三月上旬ニ至リ轟木(榑木町)へ進軍二週間

余滞陣、其後子植木ヨリ永峯(熊本市)ニ赴キ同所ニ於テ手負即チ

帰県、六月上旬帰順、九月一日再ヒ鹿兒島城へ襲来ノ際

本營ノ募ニ応シ、喜入郷迄出兵、道ヲ官兵ニ遮レ半途ヨ

リ帰郷仕候也、

鹿兒島県下今和泉郷

明治十一年三月

鮫島平藏

二二四 栗野雄八上申書

(編野和秋隊長)

昨十年二月十六日第四大隊七番小隊兵士ニテ鹿兒島ヲ發シ、同廿一日熊本県下へ着シ則ヨリ囲城攻撃、翌廿三日(玉東町)木ノ葉ニ於テ戦ヒ、同廿五日山鹿へ進軍、同廿八日岩村(三加和町)へ進撃、三月一日山鹿町へ退キ直ニ田原坂へ進撃、同所ニ於テ憤戦烈闘終ニ銃創ヲ蒙リ、川尻病院へ入り、五月五日帰邑、六月十日帰順、九月一日再ヒ鹿兒島城へ突入ノ節本營ノ募ニ応シ巡查逮捕ト為リ、同十二日捕縛相成候也、

鹿兒島県下今和泉郷

第十四大区一小区百十二番地

明治十一年三月

栗野雄八

二二五 山口市四郎上申書

(篠原四郎隊長)

昨十年二月十六日第一大隊七番小隊兵士ニテ鹿兒島発足、同廿二日熊本県へ着シ即日攻城昼夜烈戦、同三十日該地(金名市)高瀬へ進軍敗走木ノ葉へ退キ、一時番兵敗軍田原坂へ進撃ス、夫ヨリ出町へ引揚ケ番兵一日大敗ニ及ヒ保田窪へ

退キ同所ニ於テ烈戦、銃創ヲ蒙リ帰県ノ上治療、六月上旬帰順、九月上旬再ヒ鹿兒島へ襲来ノ節本營ノ檄文ニ応シ、近郷伊集院迄出兵、道ヲ官兵ニ遮レ半途ヨリ帰郷仕候也、

鹿兒島県下日置郷

第十二大区一小区二百十二番地

明治十一年三月

山口市四郎

二二六 射越金太郎上申書

昨十年旧三月九日剣刀隊第二小隊ニ編入鹿兒島ヲ發シ、同十二日人吉へ着シ、夫ヨリ鹿兒島県内蒲生郷へ番兵シ、(蒲生町)佐山ニテ開戦、夫ヨリ國分郷へ引上ケ、途中ニテ平病ニ罹リ帰邑、八月上旬帰順、九月三日我兵鹿兒島へ突入ノ際本營ノ檄文ニ応シ、日置郷迄出兵、中途官兵ノ遮ル所トナリ帰宅仕候也、

鹿兒島県下吉利郷

明治十一年三月

射越金太郎

二二七 黒江吉之丞上申書

(桐野利秋隊長)

明治十年二月十六日第四大隊九番小隊ニテ鹿兒島ヲ発シ、同廿一日熊本城攻撃、同日植木へ進軍、同廿三日山鹿へ進軍同所へ凡三週間番兵、三月上旬頃隈府(菊池市)ヨリ大津へ進ミ、同所ニ於テ病ヲ発シ直ニ帰県ノ途中、七月上旬日向国宮崎ニ於テ帰順、九月上旬我兵ノ鹿兒島城ニ突入スルニ際シ本宮ノ檄文ニ応シ、喜入郷迄出兵、官軍ニ遮絶セラレ帰宅仕候也、

鹿兒島県下今和泉郷

明治十一年三月

黒江吉之丞

二二八 肥後百一上申書

(桐野利秋隊長)

明治十年第二月十七日第四大隊八番小隊兵士ニテ鹿兒島ヲ発シ、同廿一日熊本城攻撃、同日木ノ葉町へ進軍同所ニ於テ戦ヒ、同廿二日山鹿町へ出張、此処ニ在ル凡二週間、三月十九日頃隈府町ニ於テ戦ヒ、四月中旬豊後武田(竹田市)へ進軍ノ際銃創ヲ蒙リ、直ニ帰県帰順ノ処、九月上旬再

ヒ我兵ノ鹿兒島城へ突入ノ際檄文ニ応シ、喜入郷迄出兵ノ処、官軍ニ遮ラレ帰宅仕候也、

鹿兒島県下今和泉郷

明治十一年第三月

肥後百一

二一九 永田善之進上申書

明治十年旧正月廿日第八大隊一番小隊ニテ鹿兒島ヲ発シ、熊本県下田原坂へ進軍、同廿五日植木町へ引揚ケ番兵、旧三月三日病ニ罹リ帰県、旧七月下旬帰順、九月一日我兵再ヒ鹿兒島城へ突入ノ際、川俣村へ出兵ノ処、官軍ニ遮ラレ其儘速ニ帰宅仕候也、

鹿兒島県下郡山郷

明治十一年第三月

永田善之進

二二〇 満尾仲右衛門上申書

(藤原幹隊長)

明治十年二月十四日第一大隊三番小隊ノ伍長、同十五日鹿兒島発程、同廿二日熊本城ニ攻撃シ、同廿七日高瀬町(宝名市)へ進撃、原倉村へ引揚ケ、三月三日同所ニ於テ戦、互ニ勝

敗アリ、其後(榎木町)木留ニ於テ銃丸ニ中リ傷ヲ蒙ル、即チ川尻病院へ入院ノ後帰県仕、快氣ニ付六月十八日鹿兒島県下(鹿兒島町)本城郷ニ於テ千城九番中隊半隊長トナリ、其後処々ニ於テ戦ヒ遂ニ利アラスシテ、七月下旬美々津敗軍ノ際降伏候也、

鹿兒島県蒲生郷
滿尾仲右衛門
十一年三月十八日

(表紙)

西南之役徵役人筆記 三 宮城県 下

(中表紙)

〔第十四号〕
西南国事犯囚徒七拾九名
戦地形状顛末筆記簿下

宮城県

一 指宿良徳上申書

明治十年五月中旬比鹿兒島県小野村ニ於テ募兵、振武拾(中島健彦)四番小隊へ加入、分隊長心得トナリ人吉へ出張、同所黒(多)肱ニ於テ解隊、即日押伍トナリ同所江代守兵、振武拾五(水上村)番小隊へ加入一戦、味方敗軍同所皆越へ守兵、官兵襲来(須木村)味方勝利、翌日官兵進軍、味方敗レテ日向国須木へ引揚(佐土原町)ケ守兵、又一戦敗レテ佐土原ニ至リ、同所廣瀬川筋ニテ大戦ノ時官兵ニ取囲マレ、山野ヲ凌キ鹿兒島県へ立歸リ帰順仕候也、

明治十一年五月

指宿良徳

二 伊木七之助上申書

昨十年四月中旬第九番大隊二番小隊監軍トナリ鹿兒島縣
 発程、同廿二日熊本県下人吉へ着、十日程滞陣、五月四
 日八代口へ進軍ノ途中坂元^(坂元村)へ官軍ノ守兵ヲ追散シ、翌六
 日^(八代市)日奈久口へ進入ノ処、前ニ官軍守ヲ棄テ軍艦へ退去ス、
 同日八代口へ進軍ノ時植柳村仙段ノ渡シ口ノ守兵ト戦ヒ
 昼夜連戦、翌日官軍守ヲ棄テ城へ逃込ム、此時彈藥數個
 ヲ得ル、茲ニ守兵ス、時ニ惣軍揚兵ニ付夜ニ入テ我隊モ
 坂元迄引揚ル、当所へ十二日間滞陣ス、十八日古田村迄^(八代市高田)
 敵襲来ト聞へ直チニ進撃スル時、官軍守ヲ棄テ敗走ス、
 櫻馬場迄追撃、茲ニ銃器・彈藥等數十個ヲ得ル、数日茲ニ^(八代市古邇)
 守ル、六月初旬我隊常山二番小隊ト改号牛山郷^(大口市)へ転軍、
 此時山野村^(大口市)へ官軍襲来、直チニ進撃戦フ事一時ニシテ、
 官軍利アラス敗走ス、味方勝ニ乗シテ水俣深川^(水俣市)迄追撃七
 里余、此時軍器ヲ得ル事夥シク爰ニテ烈戦数日ナリ、其
 内発病ニ付キ踊温泉^(彼風町)ニテ療養中追々味方敗ヲ取り、都城

大敗ノ時ヨリ諸所へ潜居、帰宅ノ上十月上旬自首帰順仕
 候也、

鹿兒島縣下第二大区小五区

荒田村

明治十一年五月

伊木七之助

三 永田武雄上申書

明治十年二月十六日^(永山弥一郎隊長)第三大隊九番小隊押伍ニテ鹿兒島表
 発程、同廿二日熊本県下千反畑^(熊本城下)へ進軍、則ヨリ壘守シ戦
 事数日、同廿七日敵兵城ヲ出テ襲来シ戦フ事終日ニシテ
 終ニ負傷シ、即夜川尻病院ニ入り、八代方面ノ戦ヒ利非
 ス故ニ木山^(益城町)へ転院シ、夫ヨリ諸所ヲ経テ高岡病院^(高岡町)ニ入り
 療養スル事数日ニシテ創愈ユ、我本隊ハ矢部ニ於テ振武
 七番中隊ト改称シ、鹿兒島ノ武村ニ壘守スルヲ聞キ、同
 六月廿二日帰隊ス、翌日分隊長ニ上ケラレ同廿四日敵兵
 襲来シ戦フ事終日、又負傷シ日没ニ至リ終ニ利ナクシテ
 尾畔山^(鹿兒島市)ニ退キ、同廿五日本営ヨリノ報ニヨリ川上村^(鹿兒島市)へ引
 揚ケ、是ヨリ諸所ヲ経テ福山郷^(福山町)へ越キ、同七月四日比牛
 根郷^(兼木市)ノ二川村へ進撃シ、戦大ニ利アリト雖トモ守ルニ利

明治十年二月十五日(薩摩國警隊長)一番大隊六番小隊兵士ニテ鹿兒島県下発足、同月廿一日熊本県下川尻へ着ス、翌廿二日熊本

四 松山一介上申書

明治十一年五月

永田武雄

無クシテ日暮ニ至リ末吉郷へ引揚ケ、同七月七日頃(熊本)百引郷へ進撃シ我軍大ニ勝利、敵ノ本營並ニ輜重部へ切込ミ彈藥並ニ諸品ヲ分捕リ、即日恒吉郷へ引揚ケ數日滯陣ス、夫ヨリ諸所ヲ經テ上庄内へ帰陣ス、同十五日頃敵兵襲來、爰ニ戦フ事良久シテ敵ヲ斃ス數多ナリ、稍敵ハ退ソカントス、然カレトモ(新野町)財部口ノ味方利無クシテ敗レ、我隊モ共ニ引揚ケ(日南市)飯肥路ヲ經テ清竹町ニ至リ、同七月十八日頃敵襲來シ終日戦ヒ、我隊ハ勝利スト雖モ山手ノ味方利ナクシテ宮崎へ引揚ケ、夫ヨリ諸所ヲ經テ美々津ニ至リ、壘壁ヲ守ル事數日、同七月廿五日頃敵襲來ノ際山陰村ノ味方利無クシテ敗レ、官軍(日向市)富高新町ニ出テ囲マル、出ル事不能、同所ニ於テ帰順仕候也、

鹿兒島県下第二大区

六小区

城へ進撃、切戦數日勝敗不分、春日村へ引揚ケ二日計宿陣ス、是ヨリ高瀬へ繰出シ翌日進撃、味方敗走シテ伊倉へ引揚ケ、一泊シテ同月下旬比吉次・木留其外所々ニテ戦ヒ互ニ勝敗アリ、其レヨリ三月下旬比田原・轟村へ繰出シ直ニ戦争ニ及ヒ昼夜ヲ不分連戦、互ニ勝敗アリ、此所ニ於テ押伍ト成リ、是ヨリ熊本県下三間町へ引揚ケ城守兵トシテ一週間計滯陣、四月十四日川尻口味方敗軍ノ節川窪村へ引揚ケ、翌十五日官兵押寄せ戦ヒ味方敗軍、其レヨリ矢部表へ引揚ケ、是ヨリ四月下旬比尾前・江代等ヲ過テ人吉ニ至ル、是ヨリ五月下旬比所々ヲ過テ鹿兒島県下原良村着陣、翌日川尻へ戦ヒ味方敗軍右村へ引揚ケ、是ヨリ常盤・原良守兵ニテ四十日計宿陣ス、六月十六日(鹿兒島市)武ノ岡味方敗軍ノ節川上村へ引揚ケ、是ヨリ重富・加治木・國分・福山其外所々ニ戦ヒ味方不利、同月末方未吉へ至ル、是ヨリ七月上旬比百引・大崎其外所々ニ戦ヒ互ニ勝敗アリ、是ヨリ都之城へ引揚ケ、七月中旬比諸口敗レテ山之口へ引揚ケ、戦ヒ不利ニ付宮崎・高鍋ヲ過テ美々津ニ至ル、其時分隊長心得トナリ、是ヨリ門川ニ戦ヒ其節官兵ニ囲レテ本隊ヲ失ヒ、是ヨリ山野ヲ過テ鹿兒島県へ立歸ル、然ル処九月廿七日谷山警視出張所ニ於テ帰順仕

候也、

鹿兒島県第一大区四小区

百六十壹番地居住

明治十一年五月

松山一介

五 平原景美上申書

十年二月十七日(岩元平八郎隊長)壹番砲隊兵士ニテ鹿兒島出発、同廿二日

ヨリ熊本ノ内花岡山へ砲台相築攻撃ノ処、四日位ニテ我

右半隊(玉東町)ハ木葉口、左半隊ハ吉次峠(玉東町)へ出張致シ、三月初方

官兵押寄せ終日ノ戦争、終ニ味方敗軍ニテ植木迄引揚ケ、

然処翌早朝吉次峠ノ方へ応援トシテ出張、則ヨリ戦争候

処味方大勝利ニテ銃器・弾薬数多分捕、同所へ三十日位

モ在陣毎戦勝利ナリ、四月中旬ニ至リ終ニ敗軍ニテ三嶽(前内町)

迄立退、是又十五日位モ相堅メ居候処、川尻口敗走ニテ

一統引揚永峯村へ立退応援隊ノ処、官兵寄来リ戦争、味

方勝利ニテ弾薬等分捕、折柄三舟口敗戦ニテ川原迄引揚

居候処、是又戦争、味方勝利致シ地形悪クシテ矢部迄引揚

場、同所ニ於テ行進砲隊ト隊名相替リ、又々人吉迄引揚、

四日位モ滞陣中同隊分隊長被申付、然ル処鹿兒島へ官兵

上陸相成タル由故直ニ繰出シ、五月上旬比ニテモ候ハン、

鹿兒島城山へ進撃致シ候処、十分進軍不相調候テ下伊敷(鹿兒島市)

村ノ内へ三十日位相守居、夫レヨリ武村ノ内大明神岡へ

砲台相築キ廿日位モ砲戦致シ、其内吉野村へモ相掛戦争

候処、六月下旬ニテ候ハン、鹿兒島敗軍ニテ加治木・福

山其外諸所ニ於テ戦争候得共悉ク利アラスシテ、終ニ八

月初旬延岡ノ内ニテ敗軍ノ砌リ官軍へ取巻レ候付、山中

相忍ヒ同月廿日比鹿兒島へ帰県、則チ帰順自首仕候也、

十一年五月

鹿兒島県第壹大区五小区

平原景美

六 有川平之進上申書

十年二月十六日(桐野利秋隊長)四番大隊八番小隊兵士ニテ鹿兒島ヲ出発

シ、同シク廿二日熊本県川尻ニ達シ、即日城山へ攻撃劇

戦スト雖トモ勝敗不決、翌廿三日木ノ葉へ進軍ノ処敵敗

走シ、大勝利ヲ得テ銃器・弾薬数多分捕ス、同日植木ノ駅

へ引拳クル、夫ヨリ陣ヲ山鹿へ転ス、此処ニ於テ官兵度

々襲来ルト雖トモ毎戦敵ヲ追ヒ退ケ大勝利ヲ得、此処ニ

滞陣スル事廿余日、時ニ田原口苦戦ノ報アリ、迅速ニ応

七 仁禮兼氏上申書

十一年五月

有川平之進

鹿兒島県第二大区八小区
四十四番地

援トシテ植木ノ駅ニ至リ、奮戦シ遂ニ利ヲ得ル、我隊ハ
 即日熊本城下へ引揚ケ滞陣、廿余日ニシテ川尻口敗戦ニ
 及ヒ武宮へ退キ、(龜軍、熊本也)同所ニ於テ戦ヒシ処遂ニ敗軍ニ及ヒ矢
 部迄退キ、此処ニ於テ隊伍編制アリテ奇兵十一番中隊ト
 改称ス、夫ヨリ又陣ヲ豊後武田へ転シ戦フ事十余日、同
 所ニ於テ同隊分隊長ニ上ラル、然ルニ官軍大挙シテ我壘
 ヲ襲フ、故ニ死力ヲ尽シテ防戦スト雖トモ小ハ大ニ敵ス
 ル事能ハス、遂ニ重岡へ退ク、又臼杵へ進撃ノ処大勝利ヲ
 得ル、滞陣四五日ニシテ此処ヲ守ル事能ハスシテ熊田マ
 テ退ク、夫ヨリ梓峠へ進撃、勝利ニテ又駿河谷へ進軍、
(宇目町重岡)
(高千穂町) 而シテ三田井并尻畑へ応援トシテ出張シ、防戦三十余日
(椎畑、北方町)
(北方町) ニシテ終ニ敗走シ、曾木へ引揚ケ同処ニ於テ手負シ、熊
 田病院ニ入り療養ノ処、八月上旬頃官兵襲来ル、同処ニ
 於テ降伏仕候也、

明治十年二月十七日二番炮隊伍長ニテ鹿兒島発程、人吉
(田代五郎隊長)
 ヲ經テ同月廿一日肥後国熊本へ着ス、本日同所ノ四方地
 原ニ砲隊ヲ以テ砲台ヲ築キ、城中へ砲撃スル事四五日、
 夫ヨリ桶屋町へ転陣ス、砲二門ヲ以テ砲撃スル事四五日
 位、是ニ於テ地形ヲ探索シ長六橋ヨリ二三町計リ上へ転
 陣ス、砲式門ヲ以テ砲撃スル事数日ニシテ出町口へ転陣
 ス、砲撃スル事尅週間位ニシテ川尻口破軍ノ際報知在ニ
 ヲリ、三月三日頃登島村迄引揚ケ、同五日頃木山ヲ經テ
(台島之)
(益城町) 田原村へ引揚ケ是ニ両三日滞陣ス、夫ヨリ同九日頃矢部
 へ引揚ケ滞陣スルコト四五日、此時奇兵十二番中隊押伍
 トナリ、夫ヨリ我隊人吉迄引揚ケ、是ニ於テ同隊分隊長
 トナリ、奇兵全軍日州口へ進軍ノ軍議決ス、三月下旬頃
 人吉ヲ出足ス、夫ヨリ岩野ヲ經テ延岡エ着ス、我隊同所
(水上)
 ヲ守兵スル事六週間ニシテ、五月中旬頃豊後口切込ミ谷
 へ進撃ス、官兵散々ニ追撃ス、台場十二三位乗取り、不
(北川町)
 利ニシテ鏡村へ引揚ケ、夫ヨリ豊後堺陸地峠へ二三週間
(袖ケ内カ、宇目町)
 位守兵シ、官兵不意ニ襲ヒ来ル、利アラスシテ油ケ内へ
 引揚ケ、是ニ於テ同隊中隊長トナリ鹿兒島方面敗軍ノ際
(可楽岳)
 報知在ルニヨリ長井村へ引揚ケ、夫ヨリ櫻嶽ヲ突破リ官
(高千穂町)
 兵散々ニ追撃ス、兵器・弾薬等分捕ス、岩戸ヲ經テ三田井

口へ進軍ス、兵器・弾薬・兵糧等分捕ス、夫ヨリ小林ヲ
經テ九月一日鹿兒島へ突出、城山ノ官兵散々ニ追撃、遂
ニ乗取籠城スル事廿四日ニシテ、同廿四日敗軍ノ際降伏
仕候也、

鹿兒島県第二大区二小区

式百四十番地

十一年五月

仁禮兼氏

八 山崎隆雄上申書

明治十年二月十六日(桐野利秋隊長)第四大隊大小荷駄心得トナリ鹿兒島
発程、同廿二日熊本へ着陣ス、三日ヲ經テ山鹿駅ニ至リ
兵糧等ヲ諸隊ニ分配ス、山鹿退軍ノ際熊本春竹へ引揚敷
日滞陣、亦二本樹へ転陣ス、川尻口敗レテ矢部へ引揚三
四日滞陣、夫ヨリ馬見原(蘇陽町)・胡摩山(椎葉村)・椎葉山(同上)ヲ經テ人吉ニ
到ル、兩日滞陣、此時ニ大小荷駄ヲ免カレテ鹿兒島へ帰
県、人民救助事務ノ事ヲ司ル、武ノ岡敗軍ノ時都之城へ
引揚敷日滞留ス、同所敗ル、ノ後チ宮崎(佐土原町)・廣瀬(佐土原町)・高鍋等
ヲ經テ延岡ニ至リ、長井郷ニ於テ遂ニ帰順仕候也、

鹿兒島県第二大区三小区

明治十一年五月

山崎隆雄

九 森元休五郎上申書

昨十年騷擾ノ際三月十八日鹿兒島県発程シ、熊本県下出
町本宮ニ到リ(永山弥一隊長)三番大隊六番小隊ノ兵士ニ編入セラレ、十
余日熊本城へ攻撃シ、川尻口敗レテ木山(益城町)ニ退キ、健宮ニ
進軍シテ一時遊撃隊ヲ指揮シ、戦利ナクシテ矢部へ引揚、
夫ヨリ馬見原・椎葉山ヲ經テ江代(本俣町)ニ到リ、各隊編制ノ時
正義三番中隊ノ長トナリ、四月中旬頃鹿兒島県大口郷へ
進軍大ニ勝利ヲ得、続テ深川(本俣市)迄追撃シテ接戦スル事十余
日、然ルニ足痛ヲ発シ、辞シテ大口病院ニ入室シ、夫ヨ
リ高崎郷ニ転シ、同所敗スルニ臨ミ終ニ霧島ノ山中ニ忍
ビ、八月十四日鹿兒島へ帰県、直ニ帰順仕候也、

鹿兒島県下第二大区八小区

十一年五月

森元休五郎

一〇 前田壽左衛門上申書

十年五月中旬、勇義二番小隊半隊長ニテ(出水)和泉郷(出水市海傍)ノ内名子

浦へ番兵、凡十有余日、夫ヨリ同郷ノ内矢筈嶽(肥後國鹿)ニテ激戦利ヲ失シ、退キ守ルト雖利無ク、因テ又紫尾山(宮崎ノ城也)ニ抛リ固守スト雖モ衆寡敵セス遂ニ敗戦、六月上旬帰順仕候也、

鹿兒島県下第三拾八大区

壹小区

十一年五月

前田壽左衛門

一一 三原經壽上申書

明治十年二月十五日(薩摩國許隊也)一番大隊五番小隊給養ニテ出発、同

廿一日肥後熊本県川尻へ着陣、同所一泊ニテ翌廿二日同

所二本樹へ転陣、城守兵ニ付彼地へ十余日滞留、夫ヨリ(橋本町)

木留へ出張、同所ニ於テ一番大隊大小荷駄ニ編入セラレ、

各隊へ兵糧・彈藥差統ケ、同四月初旬頃各隊同所引揚相

成、其節木山町へ宿陣、翌日武官(建軍)へ出陣、彈藥等前文同

断三日位滞留、夫ヨリ矢部(矢部町)ノ様引揚ケ万坂へ一兩日滞留、

同所引揚ケ、求摩之内江代(永上村)へ着陣、四五日滞留、又人吉へ

出居候処、鹿兒島県下へ官兵押寄候付同所ノ様繰出シ、

同県吉野村へ滞陣ノ処、同所ニ於テ製作所へ相掛リ、同県

蒲生へ三十余日滞留製造方致シ、同所敗レニ付高城石山(日向高城町)

村へ引移リ居候処彼地モ同断ニテ、末吉并高原方面敗レ立、夫故日州赤江町(宮崎也)へ移リ越シ前件同断ニテ罷居候処、

同所不都合ニ付佐土原之内松小路へ前件通ニテ、同所モ

引揚ケ、高鍋之内角町へ転移、同所へ三日程滞陣候処、

又々引揚ニ及ヒ延岡之内野津村へ同断、此所へ三日罷居、

又相敗レ同所長井村へ引越居候処、熊田口(北川町)諸所敗立、諸

隊一同切り抜ケ山手ヲ忍ヒ諸所ヲ経、同九月十九日鹿兒

島へ帰宅、同廿二日官軍谷山本營へ帰順願出降伏仕候也、

鹿兒島県第三大区六小区

十一年五月

三原經壽

一二 今吉善左衛門上申書

明治十年第四月遊軍隊小隊長被申付、四月八日人吉一泊、

同所五木村之内頭地(五木村)へ四五日滞陣ニテ、同所中村口、岩戸(五木村)

山口辺へ廿三四日程諸所へ番兵致シ居候処、常山隊四番

中隊左小隊長へ転務被申付、同廿日頃逆瀬川(五木村)へ兩三日滞

陣戦争ニ及候処、敗軍ニテ兵隊都テ散乱、無致方帰宅仕

居、同八月三日宮崎川原町別働第三旅団第一大隊本部へ

帰順仕候処、則自宅謹慎被申付候也、

鹿兒島県綾郷九拾五大区

三小区四拾八番地

十一年五月

今吉善左衛門

一三 牧之瀬良清上申書

明治十年五月廿九日鹿兒島県発程、宮崎ニ於テ蟠龍隊六番小隊兵士ニ加入シ延岡へ着ス、同所ニ於テ分隊長トナリ、守兵スル事二週間位ニシテ(鹿川)獅子川へ進軍、同所ニ於テ二週間位連戦ス、利アラスシテ祝川迄引揚、爰ニ於テ守兵シ、六月下旬頃本營ノ差図ヲ得再ヒ(北方町)獅子川之様進撃、官兵散々追撃、台場拾八乗取り、夫ヨリ山猫峠へ守兵シ、官兵不意ニ襲来、不利シテ祝川迄引揚、同所ニ四五日守兵シ、夫ヨリ(日影町)八戸村へ引揚ケ、程ナク官兵襲来、利ナクシテ終ニ長井村へ引揚、同所へ潜伏スル事数日ニシテ、八月帰順仕候也、

鹿兒島県

十一年五月

牧之瀬良清

一四 篠原武次郎上申書

昨年四月頃私用ニテ日州志布志郷ニ在リシ処、製作人ニ募ラレ同所ヲ発足シ、兩三日ヲ経テ(佐土原町)廣瀬ノ製作所ニ至リ弾薬ヲ製造ス、廿日計リヲ経テ味方敗軍ノ報ヲ得テ直ニ高鍋迄引揚ケ、兩三日ヲ過キ再ヒ敗軍トナリ美々津・(日向市)富高新町ヲ経テ延岡迄引退ク、夫ヨリ又大嶽迄引退キシニ不幸ニシテ官軍ニ取囲マレ如何ニモシテ再ヒ味方ニ返ントスレトモ、官兵ノ囲ミ弥嚴ニシテ遂ニ忍ヒ出ル事能ハス、終ニ帰順シテ返ル途中病氣ニテ佐土原ニ滞在ス、夫ヨリ十日計リヲ過キ全ク快氣シ、直ニ発足シ帰ル、途中味方官軍ノ囲ミヲ打破リ再ヒ鹿兒島ニ至ルノ報ヲ聞キ、昼夜兼行シテ帰りシニ未タ味方至ラス、依テ直ニ帰宅シ、翌朝味方帰り来リシト覺ハ炮声甚タ烈シキ故、直ニ炮声ヲ目的ニ走り行ク処ニ、最早官軍散々ニ遁逃スルヲ見テ即チ味方ニ加ハリ、追撃テ壱名斫殪シ殘兵ヲ追ヒ扨ヒ、其后諸所ヲ徘徊セシ故、遂ニ官軍ニ隔ラレ城山ニ入ル事能ハス、直ニ帰宅シ潜伏罷在候処、再出ノ事露顯シ今日如ク懲役ニ相成申候也、

鹿兒島県

十一年五月

平民 篠原武次郎

一五 市來政大上申書

十年二月十七日(官元平八郎隊長)番砲隊小頭ニテ鹿兒島出発、同廿二日

熊本城下花岡山へ砲台相築キ、攻撃四日位ニテ我左半隊

吉次峠へ、右半隊ハ木ノ葉口へ出張ス、三月初方官兵襲

来廿日位モ戦争、始終味方勝利ニテ、銃器并彈薬等数多

分捕、我半隊又々熊本城下安政橋下へ砲台ヲ築キ攻撃致

シ居候処、川尻口敗走ニ付永峯村へ引揚トノ令ヲ受ケ差

越候処、同処ニ於テ分隊長被申付、我隊応援隊ノ処官兵

襲来、戦争勝利ニテ砲彈薬四箱分捕、折柄三舟口敗戦ニ

付応援トシテ木山迄出張致居候処、矢部ノ様可引揚トノ

令ヲ受ケ差越候、途中川原村へ休足致候処官兵後ヨリ襲

来候ヲ取テ返シ、官軍ヲ追退ケ矢部迄引揚ケ、同所ニ於

テ行進砲隊ト隊号ヲ改メ、人吉ニ赴四日位モ滞陣、同所

ニ於テ半隊長被申付、然ル処鹿兒島へ官兵上陸相成タル

由故直ニ我隊操出シ、五月上旬頃ニテモ候ハン鹿兒島へ

下 鹿兒島 三

着ス、直ニ城山へ銃ヲ以テ進撃致シ候処、十分ノ進軍不相

調候テ下伊敷村ノ内諸所へ相守、夫ヨリ坂元村ノ内桂山

并吉野村ノ内雀ヶ宮各所へ砲台ヲ築キ、廿日位モ砲戦、

其内武村ノ内大明神ヶ岡へ砲台ヲ築キ砲銃ヲ以テ戦フ、

六月下旬頃ニテモ候ハン同所敗軍ニテ薩摩迫迄引揚ケ一

昼夜守ル、夫ヨリ川上村へ引揚候、其節病ニ罹リ岡之原

村ニ於テ養生致シ居候処、官兵へ取巻レ、山中ヲ忍ヒ出、

七月十七日鹿兒島ニ於テ帰順仕候也、

明治十一年五月

鹿兒島県第三大区三小区

市來政大

一六 馬場彦二上申書

明治十年二月第一大隊三番小隊兵士ニテ鹿兒島ヲ出発シ、

同廿一日川尻ニ着シ、翌朝未明ニ熊本城ヲ進撃シ互ニ戦

死・手負数知レス、炮声四方ニ轟キ日本モ之レカ為ニ瓦解

セントスルノ勢ヒアリシ故ニ、我モ同日十一時頃ニ銃創

ヲ蒙リ、川尻病院ニ被送養生致スト雖トモ全快セス、十

余日ニシテ為養護鹿兒島ニ帰り、数月ヲ経テ全快シ、同

六月上旬行進七番中隊ニ編入シ、同県ノ内桂山ト云所ヲ

守備スル処ニ、同下旬豈計ランヤ官軍同県重富郷ニ上陸

シ、白金坂ヲ越ヘテ背後ヨリ襲ヒ来リシニ、我軍大敗シ
散々ニナリテ川上ト云所迄引揚、翌朝未明ニ旧塁ヲ取帰
サント桂山ヲ進撃セシニ、官軍引色ニナリシニ我軍昨日
ノ敗ニ憤発シ、一度ニ切込シニ官軍散々ニナリテ敗走シ
死体等迄モ持帰ル事能ハス、其時旧塁ヲ取返シ且ツ銃器・
彈藥ヲ多数分捕シテ固守ス、然ル処翌日武ノ岡ノ敗ニ因
テ吉野迄引揚ケ、其時分隊欠員アリシニ同所ニ於テ分隊
長トナリ、又吉野モ守ル事能ハスシテ帖佐迄引揚ケ、夫
ヨリ所々ニ於テ連戦互ニ勝敗アリ、終ニ延岡長井村ニ至
リ敵ニ困マレ進退是窮リ、終ニ同所島ノ浦ニ於テ帰順仕
候也、

鹿兒島第三大区三小区

二十二番地

明治十一年寅五月廿六日

馬場彦二

一七 河野龍藏上申書

私儀兼テ私学校へ入校ノ者ニ無之、昨十年一月下旬ヨリ
私用有之、鹿兒島県下南方郷エ差越居、同所ノ内久志浦
ニ於テ鹿兒島變動ヲ聞テ驚駭シ、昼夜兼行二月十二日帰

宅、同十四日第三大区三番小队付ノ給養役欠員跡へ編入

セラル、由代理ニテ承知ニ因リ、即隊長高城七之丞宅エ

至リ事由ヲ聞キ、且近年身体孱弱多病ニシテ兵役ニ堪ヘ

難ク故ヲ以テ、予テ戎服等モ所持不致趣ヲ述フ、高城曰、

今般上京ノ儀道中非常警衛ノ為ニシテ何ソ戦争ニ及フノ

主意ナランヤ、只手ヲ懐シシ道中歌フテ行ン、奚ソソ戎

服ニ及ンヤト、茲ニ於テ同十六日道ヲ出水街道ニ取リ、

該隊俱共ニ鹿兒島出發、熊本県下佐敷ノ駅ニ至ル時初テ

先隊既ニ台兵ト戦端ヲ開ク事ヲ聞ケリ、川尻ノ駅ニ至リ

我隊ノ荷物ヲ護シテ二日滞在、夫ヨリ熊本三軒町ニ転シ

番兵滞陣スル事幾ント十余日、夫ヨリ田原・山鹿ノ間梅

ノ木谷ト云間道へ守兵ニ転シ保守スル事又十余日、田原

坂ノ敗ヨリ当日該隊共引揚ケ、縁リノ町へ至リ植木ノ駅

ニ後ロヨリ進撃ノ処、程ナク夜ニ速ヒ縁リノ町へ引上ケ

番兵ス、是日植木向坂ニ味方官兵ノ乱入ヲ禦止メ奮戦大

ニ之ヲ敗ル、官軍死屍二百余名ヲ棄テ植木へ退キ墩台ヲ

設ケ、或ハ屋倉等ニ抛リ保守スト云、翌日縁ノ町屯集ノ

味方惣軍問道ヲ経テ植木及ヒ大鳥村辺ニ至リ、即日午後

三時頃ヨリ植木駅屯集ノ官軍ノ壘壁ニ進撃ニ迫ル、日已

ニ没シ竟ニ利無シテ大鳥村へ引上ク、此挙我隊死一名・

三 宮 城 県 下

傷三名アリ、是ヨリ同所へ土壕ヲ築キ對壘大小砲銃連戦
数十日、同所ニテ中隊ニ編制シ右小隊ノ給養役トナル、
左小隊ハ木留(植木町)・櫻原(櫻原)ニ応援トシテ至リ連戦頗ル死傷多シ、
川尻口敗レテ竹宮(熊本市)へ退キ、翌日官軍襲ヒ来リ烈戦終日、
卒ニ夜ニ速ヒ勝敗不決、御舟口(御船町)敗ル報アリテ当夜各隊引
上ケ木山(益城町)ノ駅ニ至リ、翌日川邊村へ転陣ノ処、大津口官軍
ノ哨兵掩来リ、不意ヲ討レテ潰散、走テ矢部ノ駅ニ達ス、
此時我隊ニ離ル、矢部ノ駅ヨリ我隊士ノ傷者ヲ馬見原(蘇陽町)ノ
駅ノ病院へ護送シ、再ヒ矢部ノ駅へ立回ル途中各隊人吉
へ引上ケニ逢フ、由ツテ又引返シ胡摩山(椎葉村)・椎葉山ノ嶮岨
ヲ経テ人吉ノ岩野村(永上村)ニ至ル、右足損傷シ歩行スル不能、同
所ヨリ馬相雇ヒ人吉病院ニ至リ療治中、人差支ノ由ニテ
病院係命セラレ相勤ム、是ヨリ先矢部ノ駅ニ於テ各隊編
制替ニ成リ、我隊モ正義ニ番中隊ト改号、我モ亦除隊セ
ラル、由人吉病院ニ於テ聞之、居ル事幾ハクモナク人吉
ノ内田野邑(人吉市南端)ト云深山ノ中へ干城隊三小隊程繰出シ相成居
牛山郷山野屯集ノ官軍へ進撃応援明日二期シ、山中不自
由ノ場所ニテ物品欠乏之至急運輸ノ義、隊長伊集院權右衛
門ヨリ懸合ニ付、早速彼地大小荷駄方へ一時差寄り、物
品率領ニテ発足可致盲人吉本宮ヨリ相達シタレトモ、現

実未歩行不能ヲ以テ辞シ置候処、又々差当リ無人ニ付庄
シテ駕籠ニ乗シ可赴トテ、宿駕籠人夫等遣ハサレ止ムヲ
不得藁履・蠟燭・挑灯等人吉滞陣ノ大小荷駄方ヨリ受取、
当夜十時頃出発、嶮岨ノ間道ニテ路程六七里ハカリ、中
途ニシテ夜明ケ午前八時頃田野邑へ着ク、兵隊既ニ繰出
シタル跡ニ付空ク人吉へ可引回ノ処、道路甚難故幸ヒ
牛山郷大口町へ二三里間アルト聞キ、翌日山路ノ難所ヲ
経テ大口へ到ル、折柄邊見十郎太方附属雷撃隊ノ大小荷
駄方同所引上ケ山野小河内へ転移ニ際会シ、持参ノ物品
悉皆引渡シ足痛療治ノ為大口ノ町へ一名居残り、滞在中
戸長ノ事務へ加勢致シ、或ハ同所病院傷者ノ護送等ノ事
ニ尽力致居、干城隊モ邊見隊へ合シ雷撃隊ト成ル、水俣
ノ内釘(久本野、水俣市)・イラン(井長迫、水俣市)・深川諸所ニ於テ邊見雷撃隊連戦数
十日、互ニ勝敗アリ、其后味方追々退軍、遂ニ大口敗ル
、ニ及ンテ太良郷(翁列町)本城へ退キ、同所ニテ病氣ニ付踊温泉
場へ退キ、又襲山(国分市)・大窪夫ヨリ高岡穆佐病院へ至リ、快
氣後宮崎ニ出テ都ノ城ヲ心差シ學ノ木駅迄(田野町)至ルニ、凶ラ
スモ都ノ城ノ敗報ヲ聞キ宮崎へ引返シ、同所敗ル、ニ及
ンテ廣瀬・高鍋ノ内蚊口ノ病院ニ至リ、同所引上ケ美々津(日向市)
ニ転シ邊見附属ノ輜重方へ属シ、滞陣ノ際富高新町へ官

軍乱入、退路ナク山中ニ三晝夜潛伏絶食、遂ニ同所福瀬(東郷町)村在陣石本少佐殿陣營ニ自首帰順仕候、後宮崎警視出張所ニテ御取調ノ節、履歴書面ヲ以申上候処自宅謹慎被仰付、帰宅後免罪被仰渡候ニ付難有御受書差上置候末、又々本年一月廿八九日頃鹿兒島警視出張所ヨリ御用召ニテ御拘留、警テ大小荷駄方へ一時差寄りタル廉ヲ以御取調ノ上長崎へ被差廻、同所裁判所ニテ四月十八日懲役二年被仰渡、宮城県へ被差遣候也、

鹿兒島県第二大区四小区

百廿四番地

明治十一年五月

河野龍藏

一八 兒玉利純上申書

明治十年二月十五日(熊本區警隊)第一大隊六番小隊押伍ニテ鹿兒島出発、同廿一日川尻駅ニ達ス、同廿二日晝ヨリ熊本城攻撃ノ令アリ、我隊城ノ右翼ニ懸ル、我輩離隊シ八幡山ニ戦フ、四五日ニシテ本隊ノ在所ヲ知テ帰隊ス、翌未明高瀬(玉名市)ニ進撃勝敗不決、暮ニ及シテ諸隊吉次越(玉東町)ニ引揚ル、我隊二俣(玉東町)ヲ守ル、翌朝再ヒ進軍、吉次越ニ戦ヒ大ニ官兵ヲ敗リ北

ルヲ追打、引上ケ木留村ニ止戦、翌日我隊再ヒ二俣ニ繰込ム、官兵早入替り守兵スルニ因テ直ニ突戦、爰ニ於テ負傷川尻病院へ入室、追々官軍松橋等ニ逼ルニ因リ木山(益城町)ニ転院相成ルノ節、為療養帰県ス、無程於県下戦争トナル、旧五月中旬敗戦ノ節日州宮崎ニ至ル、銃創未愈ニヨリ帰隊スル不能本営附属トナリ伝令等ノ事務ヲ関掌ス、追々官兵延岡ニ逼ル、八月中旬遂ニ櫻(可愛町)ノ獄ヲ破リ諸所山間ノ困ヲ碎キ三田井ニ突出、官兵悉ク敗走、昼夜兼行沿道ノ官兵ヲ悉ク破り、九月一日鹿兒島ニ突戦、大小炮銃等ノ分捕不少遂ニ城山ヲ取り之ニ抛ル、其后官軍大挙シテ来襲フ、我兵万分ノ一ニ減シ終ニ守防スル不能、九月上旬帰順致候也、

鹿兒島県第三大区三小区

明治十一年五月

兒玉利純

一九 寺師清近上申書

昨年五月十五日振武十四番隊抜刀隊兵士ニテ鹿兒島出発、熊本県下人吉へ至リ、黒脇村ニ於テ解隊ニ成、干城三番(多良木町)中隊右小隊へ編入セラレ押伍トナリ、同廿三日岩野村ニ(水上村)

三 宮 城 県 下

於テ開戦勝利ヲ獲、三里余追撃、分捕銃器・彈藥等數知
レス、此日人吉敗レノ報ヲ聞テ日州米良ノ内（横野カ）横谷ヘ退キ、
茲所ニテ連戦、勝敗不決対陣スル事三十日程、須木口ノ
敗レヨリ同所ノ内小川ヘ引上ケ、同処天堤屯集ノ官兵ヘ
襲撃大ニ勝利ヲ得、官軍死屍ヲ揚ル事不能民家ヲ火テ潰
走ス、其他諸所ニ於テ數々戦アリ、其后佐土原ヘ引上ケ、
其際分隊長ト成同所ニ於テ六月廿三日官軍ニ崩レ、山中
ヘ潜伏シ帰宅ノ上、九月廿九日谷山郷出張警視所ヘ自首
仕候也、

鹿兒島県第一大区六小区

明治十一年五月

寺師清近

二〇 宇宿行吉上申書

明治十年旧正月三日（二月十五日）第二大隊三番小隊押伍ニテ鹿兒島出

発、肥後川尻エ同十一日着、同日高橋エ繰出相成両三日

滞陣、同十五日日本宮護衛トナル、旧正月下旬頃帰隊ス、

其后山鹿所々ニ於テ戦フト雖敗ヲ取コトナシ、旧二月上

旬鳥ノ栖村ヘ転陣シ昼夜ノ連戦既二十余日ニ及フ、然ル

処川尻敗報ニ依テ大津駅ヘ引揚守兵スルニ、旧三月三日

午前六時頃ヨリ官軍進撃スト雖モ勝コトヲ得ス、散乱シ
テ官兵二里余引退ク、同七日頃矢部・馬見原ヘ引揚、同
中旬（日向市）富高新町ヘ転陣アリテ、豊後竹田進軍ノ評議決シ、
同中旬重岡（大分県宇目町）ヘ着ス、同廿八日竹田進軍ノ先鋒トナル、午
後五時頃城下ニ突込ミ銃器・彈藥數多分捕ス、其後ノ戦
ヒ利ヲ得ト雖モ我守兵ノ少キヲ知ヤ、旧四月十八日頃未
明四方ヨリ官軍不意ニ大小炮ヲ打立大進撃スルニ、我隊
モ直ニ駆付ケ山手ニ登リ屢防キ戦フトイヘトモ、終ニ彈
藥尽果テ三重市迄引退ク、同廿日午前十二時頃ヨリ白杵
進軍ノ先鋒トナル、既ニ午後一時頃ヨリ戦ニ及フ、我隊
ハ本道ヲ進ミ攻撃スレハ、官軍町口ニ炮台ヲ築キ暫激戦
ニ及フト雖トモ、官兵終ニ彈藥ヲ捨テ逃出ス、其勢ヒニ
突込ミ追撃シテ生捕ル者數十名、或ハ海底ニ沈ム者其數
ヲ知ラス、其後ノ戦ヒ利ナクシテ旧五月初旬切畑ニ転陣
ス、同中旬永峯原滞陣ノ際分隊長トナル、其後諸所ニ於
テ戦フト雖トモ利アラスシテ、遂ニ長井村（北川町）ニ囲マレ帰順
仕候也、

鹿兒島県

明治十一年五月卅日

宇宿行吉

二 久留十郎上申書

明治十年二月十六日(桐野利秋隊長)第四大隊九番小隊兵士ニテ鹿兒島発
足、同廿二日熊本県川尻駅へ達シ同日午前八時熊本城攻
撃、午後三時ニ至レトモ勝敗不分、時ニ小倉方面ヨリ援
兵植木ニ着スルノ報アリ、直ニ進軍、(鹿子木、北郷町)加奈久木駅へ至ル
ニ官兵ノ斥候間近ク来リ、午後七時ヨリ戦ヒ官兵敗走、
聯隊旗並ニ銃器・彈藥分捕、夜十二時大久保迄引揚三日
休戦、同所ニ於テ押伍トナリ、同廿五日山鹿駅エ進軍、
同廿六日晝官兵襲来リテ戦フ、大勝利、此日官兵ノ死屍
百余名ナリ、同廿八日南ノ關へ進撃ノ議決シ我隊ヨリ進
ム、時ニ敵ノ哨兵(山鹿市)平山村ニアリ速ニ追退ク、(三加和町)阪楠迄進ミ
翌日八時ヨリ岩村ニ進軍ノ処、午后三時ニ至リ敵退ク、
故ニ我隊モ引揚、同三月十五日ノ戦ヒニ銃丸ヲ被リ川尻
病院ニ至リ、其后帰隊ノ際川尻破軍ノ節大津迄引揚、此
ニ於テ戦フ事二度、勝利、夫ヨリ木山口敗軍矢部へ引揚、
茲ニ於テ各隊編制、我隊奇兵十二番小隊ト改メ、又人吉
迄退キ、夫ヨリ延岡へ進軍、茲ニ滞陣スル事四十日間、
時ニ豊後重岡(宇目町)へ進撃ノ議決ス、吾切込隊口ヨリ進ミ容易

官兵ノ砦ヲ取ルト雖トモ風雨烈ク守ル事能ハス、夫ヨリ
引揚陸地(北川町北郷)畔へ進ミ防戦スル事十六日余、時ニ官兵大挙シ
テ襲来、小ハ大ニ敵スル事不能遂ニ敗軍ニ及ヒ、(北川町)矢ケ内
迄退キ、此ニ於テ半隊長トナリ連戦スル事十余日、時ニ延
岡口敗軍、豊後口ノ兵ヲ挙テ延岡へ繰進撃ノ議ニ決シテ
進軍スト雖トモ却テ長井村ニ囲マレ、八月十八日敵ノ囲
ミヲ破リ榎ノ嶽ヨリ三田井ニテ連戦大勝利、彈藥・銃器
分捕、米良ヨリ須木郷ヲ経テ小林ニ出、官軍ヲ追払ヒ、
(えびの市)眞幸郷諸所ヲ経テ吉野ニ至リ、九月一日終ニ鹿兒島へ突
入シ、孤軍ヲ以テ城山ニ籠城、茲ニ於テ各隊編制ノ節七
番小隊兵士トナリ、終ニ九月廿四日落城ノ折縛ニ就キ降
伏仕候、此段戦地ノ景況申上候也、

鹿兒島県第二大区三小区

明治十一年五月

久留十郎

二二 榎並甚左衛門上申書

昨十年二月七日(池上四郎隊長)五番大隊二番小隊兵士ニテ本県ヲ発ス、
夫ヨリ八代ヲ経テ同廿一日川尻駅へ着ス、同廿二日同所
ヲ発シ熊本城へ攻撃、夫ヨリ植木駅エ進軍、茲ニ於テ屢

々交戦大ニ勝利、官軍潰散ス、此地ニ休戦スル二日、同廿五日山鹿駅へ進軍、鍋田原ニ於テ数戦互ニ勝敗有リ、

同三月上旬大野原大進撃、此日大ニ勝利ナリト雖トモ弾

薬尽キ、終ニ山鹿駅へ引揚防戦スル事三十余日、以後川

尻破レフ際木山ニ退軍、程ナク当地ヲ発シ豊後竹田へ進

軍、此ニ於テ分隊長トナリ、数度奮戦スト雖トモ終ニ戦

ヒ利無クシテ長井村へ退ク、八月中旬頃帰順仕候也、

明治十一年五月

鹿兒島第四大区三小区

榎並甚左衛門

二三 獅子野喜太郎上申書

明治十年五月中旬頃鹿兒島(鹿兒島市)小野村ニ於テ募兵振武十四

番小隊へ加入、兵卒ニテ人吉へ出張同所黒脇ニ於テ解隊、

即日押伍トナリ同所岩野守兵(水上村)、干城三番中隊へ加入、同

所ニテ一戦味方敗軍、米良板屋へ引揚同所へ三十日間守

兵、六月上旬一戦味方敗軍、夫ヨリ小川へ引揚同所へ十

余日守兵、官軍襲来味方勝利、翌日官兵進軍味方敗軍、

夫ヨリ越(西米良村)ノ尾へ引揚、此処ニテ分隊長トナリ同所一戦味

方敗軍、佐土原へ引揚、同所ニ於テ病氣相煩ヒ延岡迄差

越、同所山毛(山陰、東郷町)ニ於テ降伏仕候処、宮崎へ差廻サレ同所警

視出張所ニテ自宅謹慎申付ラレ帰宅仕候也、

明治十一年五月

鹿兒島第二大区七小区

二四 池江矩倫上申書

明治十年二月十七日第三大隊八番小隊兵卒ニ編入セラレ

鹿兒島発程、同廿一日熊本県下川尻駅エ着ス、夫ヨリ立

町へ守兵ス、同三月初旬八代口小川駅エ転陣、同七日宮

ノ原駅ヨリ東ニ当ル処ニテ交戦三時間、味方勝利ヲ獲タ

リ、夫ヨリ宮ノ原ノ内本村へ二日程守兵ス、然ルニ再ヒ

進撃ニ相成六時間程交戦、味方苦戦ニテ松橋へ引上ケ、

即ヨリ砂破神峠へ番兵、不日又進撃ニ相成其時銃創ヲ蒙

リ木山病院へ送ラレ、馬見原へ転院、夫ヨリ椎葉山ノ嶮

ヲ経テ、四月中旬頃帰宅シ療治致シ、六月上旬再ヒ宮崎

へ出兵、蟠龍五番小隊押伍トナリ諸所ヲ守兵スル事十余

日、同七月延岡へ繰出シ、蟠龍五番中隊左小隊半隊長ト

ナリ、延岡ノ内楮ノ内村ニ守兵スル事又十余日、平ノ内

ニテ両日戦争勝敗決セス、夫ヨリ味方ノ守兵已ニ破レ我

隊屋形原ノ内橋越(立花峠、北方地)ニ引揚ケ番兵ス、当所ノ戦ヒ苦戦ニテ遂ニ潰敗、山中ニ潜伏シ、九月十七日帰郷ノ上、同十八日当郷派出所へ自首帰順仕候也、

鹿兒島県下山ノ口郷

第百六大区二小区

明治十一年五月

池江矩倫

二五 稻富謙次郎上申書

昨明治十年二月十五日(符田新八隊長)第二大隊十番小隊ニ編入セラレ押伍トナリ、鹿兒島県ヲ出發シテ大口街道ヨリ熊本県下水俣駅ヲ經テ川尻ノ駅へ至ル、同廿一日ナリ、翌日熊本城ヲ攻撃ス、我隊ハ八幡山ヨリ進ミ昼夜連戦ナリ、翌廿三日銃創ヲ蒙リ直ニ川尻病院へ被送療養イタシ、同廿九日川尻ヨリ帰県ス、療養中県下ニ於テ戦争ニ及ヒ、六月中旬頃敗軍ノ時鹿兒島ヨリ加治木郷ヲ經テ都之城病院ニ入り、夫ヨリ諸所ノ病院へ転院ス、延岡病院ニテ漸全快ヲ得、夫ヨリ敗兵ト俱ニ長井村ニ至ル、(金川町)官兵四方ヲ囲ミ進退愛ニ谷ル、依テ八月十八日先鋒ニテ覆(可慶寺)ノ嶽ヲ破リ大勝利ヲ得、堀川・地藏ケ嶽ヨリ三田井迄連戦皆大勝利ヲ得、

彈藥・銃器ハ勿論諸品等ヲ分捕數知レス、米良ヨリ小村郷ニ至ル、愛ニテ官兵ヲ捕縛ス、此時大小荷駄トナリ、夫ヨリ諸郷ヲ經テ九月一日終ニ鹿兒島ニ突入シ、時ニ官兵ヲ追散シ、夫ヨリ城山へ宿陣ス、同三日武村(鹿兒島市)へ出張ス、同日十二時頃ヨリ官軍襲ヒ来リ城山ヲ囲ム、再ヒ不能入ル事、夫ヨリ伊集院郷石谷村へ潜伏ス、終ニ九月三十日帰順仕候也、

鹿兒島県第一大区六小区

明治十一年五月

稻富謙次郎

二六 肥後隆之助上申書

昨明治十年二月十六日(編野利秋隊長)第四大隊六番小隊押伍ニテ鹿兒島県出發、大口街道ヨリ熊本県下水俣駅へ突出シ、同廿二日早朝ヨリ熊本城ニテ兵端ヲ開キシ処、官軍籠城セリ、味方囲ンテ是ヲ攻ム、同日十二字頃植木駅へ官兵襲来ノ報告アリ、即チ我隊熊本ヲ引揚ケ植木街道ヲ進軍ス、時ニ官軍ハ加奈久木駅(龜子木、北部町)迄来リ、愛ニ於テ戦ヒシガ官軍敗走ス、此夜味方ハ大久保駅迄引揚ク、翌廿三日早朝ヨリ植木ヲ經テ木之葉駅ニ攻撃ス、愛ニ於テ敵味方奮戦スト雖

下 城 宮 三

勝敗不決、然ルニ味方突入接戦トナリ、敵ハ死傷並彈藥・銃器ヲ棄テ走ル、爰ニ於テ重創ヲ蒙リ、歩行随意ナラスシテ川尻病院ニ送ラレ、爰ニ十余日アリテ療養ノ為帰県ス、數十日ヲ経テ稍々傷モ全快ス、然ル処不計モ敵ノ軍艦十余艘鹿兒島前之濱へ来リ、即時ニ上陸シテ諸所ニ台場ヲ築キ番兵ス、夫ヨリ不得止間道ヨリ敵中ヲ忍ヒ出テ吉田郷ニ至ル、爰ニ於テ味方ノ来ルヲ待ツ、然ル処日ナラズシテ来ル、即チ味方ニ加ハリ城山ヲ攻ム、此時振武六中隊ノ小隊長ニ挙ラレ城山ヲ囲ム、其時我隊ハ下伊敷村ヲ堅固ニ防禦スル事數十日也シガ、官兵後ヨリ来リ川上村ノ味方ヲ攻ム、終ニ敗軍ノ報アリ、即チ下伊敷村ヲ棄テ川上村ニ至ル、即チ旧五月十五日也、爰ニテ軍議ヲ決シ、夜ノ明ルヲ待チ鹿兒島へ進軍ノ途中下田村ニテ官兵ト行逢ヒ、爰ニ於テ終日戦ヒシガ勝敗不決終ニ彈藥尽タリ、然ルト雖モ我隊ハ爰ヲ墳墓ノ地ト定メ、必死ニナリテ戦フ処ニ本營ヨリ引揚ノ報告アリ、即時ニ我隊ヲ引揚ケテ重富郷ニ至ル、翌朝蒲生郷へ転ス、爰ニ一日滞陣ス、其翌朝吉田郷へ敵襲来ノ報告アリ、我隊援兵トナリテ進軍ス、其時味方ハ蒲生郷入口へ守兵ス、然ルニ敵モ早来リ互ニ配兵シテ戦ヒシガ、味方彈藥尽テ詮方ナク退テ溝邊郷ニ

至ル、夫ヨリ諸郷ヲ経テ末吉郷ニ至ル、時ニ敵百引郷へ来ルノ報アリ、即チ進軍セシガ難ナク敵ヲ討散ス、殊ニ逃ルニ度ヲ失ヒ狼狽スル者多シ、悉ク是ヲ斫殺ス、敵ノ死骸數十名此時彈藥數多分捕セリ、其余ノ分捕品ハ総テ燒棄タリ、生捕人夫百名程アリ是ヲ助ケテ彈藥ヲ運バセ味方ノ人夫トナス、然ル後味方ハ悉ク恒吉郷へ引揚ク、爰ニ兩三日休息スルニ亦大崎郷へ敵来ルノ報アリ、是ヲ攻撃セント軍議ヲ決シ進軍スルニ、不計モ味方路ヲ迷ヒ同郷荒佐村ニ至ル、敵壘ヲ構へ居タリシガ味方ノ来ルヲ見テ直ニ打掛ケタリ、味方配兵シテ炮台ヲ拔ントシテ無二無三ニ攻撃ス、然ルニ敵僻易シテ追々引居タリシガ、味方彈藥尽果テ炮台ヲ取ル事ヲ得スシテ引揚クル、其夜大崎郷へ至リ夜ノ明ルヲ待チ攻撃スルニ敵敗走ス、夫ヨリ志布志郷ニ至ル、爰ニ一日滞陣ス、其翌日都之城ニ転陣ス、翌未明ヨリ高崎郷ニ襲来セシ敵ヲ攻撃ス、敵敗走シテ高原郷迄引退ク、味方同郷迄追撃ス、同日勒兵シテ都之城ニ引揚ク、數日アリテ諸所ノ味方敗軍トナリ都之城ヲ退ク、夫ヨリ諸所ニ於テ敗軍ス、終ニ延岡長井村へ引退ク、此時味方數十万ノ敵ニ囲マレ殆ント逼迫ナリ、時ニ味方復ノ獄ヲ突破リ諸所ノ敵ヲ退ケ、終ニ三田井ニ

至ル、夫ヨリ米良山ヲ経テ鹿兒島県下小林郷ニ至ル、爰
ニテ巡查並鎮台兵十名余生縛ス、夫ヨリ諸郷ヲ経テ九月
一日終ニ鹿兒島ニ至ル、我隊坂元村ヲ守ル事三日、時ニ
敵襲ヒ来リシガ味方敗走シテ城山へ入ル、我隊ハ敵ニ跡
ヲ遮ラレ入ル事能ハス、其時戦死・手負數多ナリ、終ニ
我隊散乱ス、詮方ナク吉田郷ニ至リ潜伏シテ味方ノ勝敗
ヲ待ツ、時ニ九月十八日ノ夜巡查十名余来リテ我宿屋ヲ
囲ミ、其時捕縛ニ就キ帰順仕候也、

明治十一年五月

鹿兒島県第二大区四小区

肥後隆之助

二七 川西 勝上申書

明治十年二月十五日鹿兒島県出発ノ際(村田新八隊長)二番大隊五番小隊
押伍ニテ発足、大口筋ヨリ肥後国水俣へ出、同廿一日同
国川尻駅エ着、翌日払曉熊本城攻撃、午後六時頃引上ケ、
我隊春日村へ滞陣數日、夫ヨリ松橋駅へ転陣、諸所海岸へ
守備ヲ修ス、三月上旬再ヒ城下迎町へ転陣止ル事三日、
夫ヨリ大津駅へ出張、我半隊ヲ以テ阿蘇郡黒川村ヲ守ル(阿蘇町)
事數日、官軍ノ斥候二十名バカリ来テ我虚実ヲ詛フ、即

チ之ヲ追払フ、猶守備ヲ敵ニシテ敵ヲ忤ツ、同下旬未明
官軍數百名襲ヒ来ル、直ニ交戦ノ際我隊ヲ引分ケ官兵ヲ
左右ヨリ狙撃ス、官軍僻易シテ死屍傷者ヲ棄テ四方へ潰
散ス、之ヲ追撃スル事數里銃器・彈藥等分捕ス、此所ニ於
テ我隊中隊ト成ル、四月上旬官軍ノ守兵(一ノ宮町)坂梨峠ヲ棄テ退
去ニ依リ、直ニ該地ニ進軍之ヲ守ル、數日アツテ官兵山野
ニ充満シ来リ我兵ヲ攻撃スル事甚急ナリ、本道ヲ守禦シ
タル我兵僅少ニシテ悉ク斃ル、終ニ利アラヌ我左翼ノ兵
本道ノ利ナキヲ見テ奮戦、官兵ノ右翼ヲ打破リ(波野村)笹倉本營
ノ守兵ヲ追散シ、本營ヲ放火シテ黒川エ引上ケ新庄村へ(新所カ、長崎
村立野)
番兵ス、爰ニ於テ分隊長ニ挙ラレ、四月中旬惣軍矢部駅
エ引上ケ、馬見原駅ニテ奇兵隊ト変号、同下旬人吉ノ内(蘇峰町)
江代へ出、富高新町ヲ経テ延岡ヲ過キ、豊後国重岡ニ進(日向市)
軍、翌未明ヨリ竹田へ進入、同所ヲ守ル官兵ヲ追散シ銃
器・彈藥夥シク分捕ス、四五日ヲ過テ官兵玉木駅ニ侵入(竹田市玉木)
スルニ因リ直ニ彼地ニ至リ交戦、利アラヌシテ再ヒ竹田
エ引揚(竹田市入母)小高野村ヲ守ル數日、官兵數々襲来、遂ニ右方面
ノ守兵彈丸尽テ退敗、小野市エ引揚、五月上旬三重市ニ(宇目町)
進軍、官兵前後ヨリ攻撃スレトモ程ナク之ヲ追散シ、翌(三重町)
未明我隊先鋒ト為リ臼杵ノ城ヲ攻撃ス、官兵大敗潰散海

三 宮 城 県 下

ニ追入ラレテ争テ舟ニ乗り逃ントシテ覆溺死スル者少カラ
 ス、或ハ縛ニ就キ、午後五字ニ至テ遂ニ城ヲ抜ク、銃器・
 彈藥其他夥シク分捕ス、臼杵ヲ守ル事数日、官兵大挙シ
 テ逼リ来ル、我隊大分県ノ本道ヲ守ル、官軍嶮ニ抛リ山
 上ヨリ大小炮ヲ発射シ、軍艦ヨリモ大礮ヲ発スル声恰モ
 雷鳴ノ如シ、三昼夜苦戦、凶ラスモ海岸ノ味方敗ルニ因
 リ、佐伯ノ切畑村ニ引揚ク、是ノ戦ニ吾右股ニ銃創ヲ蒙
 ル、五月上旬再ヒ三重市ヲ進撃スレトモ利ナキヲ以テ三
 月_{三重町}ニ引揚ル事数日、連戦竟ニ味方退散、五月下旬熊田駅
 ニ引揚屢重岡ヲ進撃スレトモ利ナキヲ以テ、六月上旬錢
 笛峠ヲ守ル、官兵襲ヒ来ル事兩度、然レトモ官兵利ナク
 シテ退ク、七月中旬鹿兒島方面日々退軍トナリ、我隊庇
 援ノ為佐土原ニ赴ク、同所敗レテ美々津_(日向市)ニ退キ我隊福瀬_(東郷町)
 村ニ哨兵ス、官軍侵シ襲フ事再三、然ル処川上山陰ノ本
 道味方敗ルノ報アリ、即チ一小隊庇援ノ為走り赴ク、既
 ニ退軍ノ際小勢ニテ嬰ヘ防事能ハス、遂ニ官兵ニ囲マレ
 一方ヲ撃破テ漸ク十二三名大河内ニ出門川ヲ守ル、又利
 アラス終ニ延岡ヲ経長井村ニ退縮、連戦数日七月中旬覆
 之嶽ヲ破リ三田井ニ出官兵ヲ追散シ、爰ニテ前・中・後
 軍ト成ル、其中軍ニ編入セラレ、夫ヨリ諸所ノ官兵ヲ悉

ク砕キ、吉野ヲ経テ再ヒ鹿兒島ニ歸リ、城山ヲ嬰ヘ守ル、
 九月廿四日官軍大挙シテ迫ルノ際帰順仕候也、

鹿兒島県第二大区四小区

明治十一年五月

川西 勝

二八 伊藤七左衛門上申書

明治十年二月西郷隆盛上京之際第四大隊六番小队押伍ニ
 編入セラレ、二月十六日鹿兒島発足、熊本県下川尻駅エ
 二月廿二日着ノ処開戦ノ報知アリ、直ニ繰出シ攻城、夫
 ヨリ午後二時頃ニ植木ノ駅エ繰出シ、即ヨリ官兵ト戦争
 ニ及ヒ八時頃植木モ乗取り、其夜鹿子木駅エ引上ケ滞陣
 ス、同二月廿七日頃午前六時頃ヨリ木之葉駅エ繰出シ、
 同所ニ於テ戦争ニ及ヒ夕方ニ同所モ乗取り、夫ヨリ植木
 駅迄引上ケ、同月廿八日頃ヨリ山鹿エ繰出シ、同州日官
 兵寄セ来リ交戦、五字間バカリノ戦争ニテ終ニ官軍敗走
 ス、我軍山鹿駅引上ケ滞陣ス、同三月五日頃ヨリ田原坂_(植木町)
 ヘ援兵トシテ繰出シ三月下旬頃迄連戦、互ニ勝敗アリ、
 夫ヨリ三月末方ニ木留エ引揚、又白濱ヘ繰込ミ保守シ、
 木留ヘ一分隊ツ、番兵ヲ出シ、同所滞陣ノ節中隊編制ニ

相成行進八番中隊ト改号、四月十五日頃二分隊長トナリ、

四月末頃同所引上、当日豊島迄繰込ミ、五月初旬頃木山(益城町)

エ引揚、夫ヨリ御舟(御船町)へ五月八日頃ニ繰込ミ、翌日官軍寄

セ来リ交戦、撃テ卻之、同十三日頃官軍大挙シテ襲来リ、

終ニ我軍敗レテ金内(矢部町)へ引上、五月十三日頃ヨリ人吉ノ内

江代迄引揚滞陣ス、夫ヨリ五月末方ニ鹿兒島(鹿兒島中津町)雀ヶ宮へ繰

込ミ守備ヲ修ス、官軍度々襲来リ互ニ勝敗アリ、同所へ

数十日滞陣ス、同六月中旬頃ニ川上村方面ヨリ官兵襲ヒ

来リ交戦二日、終ニ我隊帖佐郷エ引上、夫ヨリ六月末方

迄ノ間諸所ニ於テ戦ヒ、終ニ宮崎へ退軍、六月卅日頃行

進四番中隊長代理ト成リ、翌日敗軍ノ際隊ヲ離レ山中ニ

忍ヒ間道ヲ経テ、八月九日頃帰宅、翌日直ニ鹿兒島警視

出張所へ自首帰順仕候也、

鹿兒島第三大区五小区

明治十一年五月

伊藤七左衛門

二九 森 啓藏上申書

昨年二月十五日(村田新八隊長)第二大隊八番小队押伍トナリ、鹿兒島

発程ニテ大口街道ヨリ熊本県下川尻駅ニ到ル、即時二百(熊本)

市西海堡

貫ニ至テ守兵十余日、夫ヨリ大津駅・二重峠ヲ守ル事五

六日、夫ヨリ隈府ニ至リ守ル事一週間ヲ経テ山鹿口援兵

トナリ防禦スルコト五日也、時ニ植木口ノ味方敗走ノ報

アリ、即我隊ヲ引上、援兵トナリテ至リ、防禦スル事三

日程、此時銃創ヲ蒙リ川尻病院ニ送ラル、川尻口ノ味方

敗軍ノ折木山駅ニ転院、夫ヨリ矢部(矢部町)・三田井ヲ経テ延岡

病院ニ入り、夫ヨリ諸所ヲ経テ小林本病院ニ入室、爰ニ

テ平愈ス、時ニ我隊豊後口ニ在リト聞、夫ヨリ帰隊セン

ト同所ニ行折、凶ラスモ斥候隊半隊長トナリ白杵ニ守兵、

官兵襲ヒ来リ之ヲ防ク事三日、遂ニ味方敗軍切畑村へ引

上、同日小野之市へ進軍、利アラスシテ同所ニ守兵ス、

然レトモ不要害ノ場所故重岡駅へ引上、時ニ霖雨ニ因リ

川水暴漲ノ憂ヒアリテ延岡鏡村へ退陣ス、爰ニ於テ奇兵

十二番隊長代理トナリ三四日ヲ過キ、又官兵重岡ノ駅ニ

アルヲ切込谷口ヨリ進撃、官兵ノ台場数ヶ所乗取り且死

傷數十名銃器等分捕勝利ヲ得、味方死傷三名ヨリ不多、猶

霖雨ニテ夕暮ヨリ四方咫尺ヲ不弁、故ニ止ヲ得ス又鏡村

へ引上ル、夫ヨリ我隊陸地峠(北川町)へ他隊ト交代、数十日守兵

ノ処官軍味方ノ寡兵ヲ探知シ進撃ス、味方之ヲ防拒スル

能ハスシテ宗太郎(宇目町)越迄退軍、又同所ニ守兵ス、是時我輩

三 宮 城 県 下

延岡本営ヨリ至急出営可致懸合有之、即出営スレハ延岡
 海岸差引申付ラレ直ニ海岸へ差越、台場等數ヶ所築キ守
 兵スル事二週間、已ニシテ延岡敗走ノ際我隊長井村ヘ引
 揚、又ムシカヘ線出シ伏兵、官兵襲来ノ処抜刀切込致シ
 七名切殪ス、我隊死傷一名モ無之、時ニ惣軍兵ヲ潜メ鹿
 兒島ニ向キ突出ノ策相立、突出ノ折我輩先鋒隊トナリ覆
 兒島ノ嶽ヲ破リ獅子川・祝子川・三田井諸所ノ官兵ヲ追払ヒ、
 三田井ニ於テ前・中・後軍ヲ分チ、又諸所ノ官兵ヲ悉ク
 碎キ遂ニ鹿兒島ニ到リ城山ニ抛ル、其後官兵四方ヲ囲ミ
 攻撃日ニ迫ル、九月廿四日官軍大挙シテ進撃ノ際軍門ニ
 降伏仕候也、

鹿兒島県下第一大区五小区
 西田村四百十六番地
 森 啓藏

明治十一年五月

三〇 下村重賢上申書

明治十年四月五日小根占郷出発、熊本県人吉ニ至ル、同
 所ニ於テ十七番遊軍隊小隊長ニ挙ラレ熊本ニ到ル、時ニ
 各隊木山エ引揚ニ際会シ矢部濱町へ宿陣、夫ヨリ馬見原

ヲ經、^(椎葉村)胡摩山・椎葉山ヲ逾テ亦人吉ニ到リ宿陣數日、夫
 ヨリ鹿兒島県下牛山郷大口ニ赴キ、五月初旬大進撃ノ令
 アリ、同所東山際ニテ抗戦、山野ヨリ深川ニ至リ守兵ス
 ル事連日、^(大口市北部)竹屋敷ニ於テ発病、大口町病院ニ於テ療治ス
 ル數日、病重シ、是ヨリ霧島大久保村病院ニ至リ療養ス
 ト雖病猶重シ、故ニ除隊セラレ六月下旬帰家自首帰順仕
 候也、

鹿兒島県下八十大区一小区
 小根占郷百五十壹番地
 下村重賢

明治十一年五月

三一 谷山甚助上申書

昨年二月西郷隆盛上京ノ際隨行致シ押伍ニテ^(村田新八隊長)第二大隊五
 番小隊へ編入セラレ、同十五日鹿兒島県下発程、大口筋ヨ
 リ水俣へ出テ、同廿一日川尻駅へ到着ノ処熊本ノ台兵二
 小隊余該所へ襲来ス、加治木隊ヨリ取押サヘ伍長一名ヲ
 捕縛致シ、翌朝熊本城近寄候処不計モ城中ヨリ大小炮ヲ
 打出シ、不得止八幡山ヨリ開戦終日攻撃勝敗不決、午後
 六時頃ニ至リ引揚ケトノ報ヲ得春日村へ退軍ス、同中甸

過松橋駅へ出張、諸所へ哨兵致シ、三月上旬モ候カ復城下
向江町へ三日ノ間転陣ス、同上旬大津駅へ出張ス、我半
隊ハ阿蘇郡黒川村(阿蘇郡)へ繰出シ守兵ノ処、官軍ノ斥候隊ト相
見得襲索候ニ付直チニ追払ヒ、同下旬巡查數百名未明ニ
襲來攻戦、勝敗不決ニ付一向憤撃候処、間モ無ク秋風ニ木
葉ヲ散スカカ如ク散々ニ討破リ、數里追撃致シ銃器・彈藥
等數多分捕、官兵死傷凡二十五六名・生捕八名外ニ少警
視トヤラ佐河某ヲ討取ナリ、於茲中隊編制ニ付半隊長ニ
挙ラレ、四月上旬同郡坂梨峠(二ノ宮町)ヲ守ル官兵引揚ル、ノ確報
ヲ聞ヨリ、透サス我隊直チニ該地へ進軍數日哨兵シ、官
軍多勢亦々來襲、稍々奮戦スレトモ小勢ノ事ナレハ右手
ノ守兵悉ク尽斃ス、故ニ彼壘へ官兵攻入シ利ナキヲ見テ
黒川村へ引揚ル、然レトモ我隊ノ内十七名ニテ官軍ノ後
ヲ突キ、(坂野村)本陣ヲ守ル官兵へ鋒先ヲ揃ヘテ突入シ、
官軍ヲ追散シ本陣ヲ放火シ、彈藥ヲ荷ヒシ夫卒共ニ分捕
リ、静々ト黒川村へ引揚テ新庄村(新所カ、長岡村)へ哨兵ノ処、四月中旬
惣軍矢部ノ様引揚ルトナリ、馬見原(蘇州町)ニ於テ小隊長ニ挙ラ
レ、同処ニテ隊名ヲ奇兵隊ト改号ス、同下旬人吉江代(水上町)へ出
ツ、奇兵隊ハ豊後地へ突出ノ決議トナリ、日向(日向市)富高新町
ヲ經テ延岡路ヨリ豊後重岡(宇目町)へ進撃ス、繰カニ官軍三四拾

名守兵致シ居候処、四方ヨリ取巻キ突入セシニ故ナク追
払ヒ、巡查一名生捕一泊候処、遠路ニ勞レ候故各隊ヨリ
強兵ノ者ヲ撰挙シ、翌未明ニ豊後竹田(竹田市)へ僅式百名余ヲ以
テ進軍ス、同所ヲ守ル巡查兵ヲ散々ニ追払ヒ、銃器・彈藥
無數分捕、当駅へ滯陣スル事四五日ニシテ復官軍玉來駅(竹田市)
へ來襲フ、直チニ彼地へ進軍終日攻戦不利在、黄昏ニ竹
田駅へ引揚ケ、於小高野村ニ暫日ノ間連戦、遂ニ右方面
ヲ守リシ小隊彈丸尽果テ敗軍トナルニ五月上旬小野市(宇目町)駅
へ引揚ケ、翌日三重市(三重町)へ進軍ノ処官軍兩筋ヨリ攻來レト
モ直チニ追払ヒ、翌日未明ニ該所ヲ舍テ臼杵ノ城へ先鋒
トシテ行進ス、途中ニ不計モ官兵壘ヲ築テ守伏スルヲ見
テ、山手ヲ廻リ炮撃シ同壘へ驅込ミ進働スルニ、官軍散
々ニナリ城ニ追込ラレ海ニ驅込ミ、声々ニ生捕リ及ヒ死
溺スル者不數知、遂ニ午後五時頃ニ至リ落城トナル、銃
器・彈藥無數分捕ナリ、於此ニ暫日身勞ヲ厭フ、日ナラ
スシテ復官兵雲霞ノ如ク寄來ル、我隊ハ大分県本街道ヲ
守リセシニ、官軍山手ヨリ大小炮ヲ射卸シ軍艦ヨリ大炮
ヲ打事恰モ雷雨ノ降撃スルカ如ナリ、三日ノ間終夜苦戦
スル処ニ、海辺ヨリ味方敗走トナリ不得止佐伯切畑村(弥生町)へ
引揚ケ、再ヒ三重市へ進撃スレトモ利ナキヲ以テ三國峠(宇目町)

下 縣 城 宮

へ哨兵、數日防戦ス、五月下旬味方敗軍トナリ熊田駅(北川町)へ引揚ル、六月初旬陸地峠(北川町)へ進撃ノ節応援トシテ進軍、勝利ナリ、我隊於諸所手負等致シ僅ニ三十式名トナリ、右手ノ高山ニ壘ヲ高シ守兵ス、翌日復官兵二中隊余攻撃シテ両手ヨリ喇叭ヲ吹立烈敷炮撃スレトモ、要地ノ場所ナレハ牙ヲ齧血戦スルニ、第五時頃ニ至リ彈丸ヲ射尽シ、致方ナク大小石ヲ投卸シ憤戦ス、日暮レニ及テ官兵敗走スレトモ不追シテ守之、銃器・彈藥分捕アリ、七月中旬鹿兒島方面危戦ニ付応援トシテ至急繰出ノ旨アリ、夜白兼行ニテ佐土原迄走赴スレトモ既ニ味方敗軍シ来ル、因テ美々津駅ニ退軍ス、兩日ヲ経テ川上ノ方福瀬村(東島町)へ哨兵ス、官軍屢來襲フ毎ニ追払ヒ猶亦台ヲ諸所ニ築キ守処ニ、川上山陰ノ本道味方敗軍ノ確報ヲ聞ヨリ、直ニ我半隊ヲ応援トシテ差向ケ、残ル半隊ヲ以テ堅ク守防スルニ、翌日官兵ヨリ四方ヲ取巻レ、一方突破ラントスレトモ僅ノ兵ナレハ力尽果テ散乱ス、時ニ誤テ右ノ足ニ刀疵ヲ蒙リ漸ク山林ニ隠レ、三日ノ間飲食スル事不能、延岡ノ駅へ出ントスレトモ官軍ノ守兵堅固ニシテ出事不能、不得止官軍番兵ノ前ニ繋ク処ノ川舟ヲ暗夜ニ忍ヒ出、彼舟ヲ奪取り向ノ堤ニ取付ケ、險山ヲ忍ヒ踰ヘテ、同下旬鹿兒島

へ歸県ノ上歸順仕候也、

鹿兒島縣第壹大区

五小区

十一年五月

谷山甚助

三三 藥丸兼文上申書

明治十年二月(永山第一郎隊長)第三大隊六番小隊押伍ニテ鹿兒島縣發程、同廿一日熊本県宇土駅ニ至ル時、先鋒ノ炮声ヲ聞キ十二時頃ニ安政橋ニ駆付、烈戦對壘スル事二昼夜ニシテ出町ニ転陣、哨兵スル事五拾余日、其内城兵數度襲來スト雖モ撃散シ固守スル処ニ、川尻口敗レタルニ依リ木山(益城町)ニ引揚、長峯ノ危キ報有リ速ニ応援ニ赴キ、一時ハ追撃スト雖モ終ニ不利ニテ又木山ニ引揚、四月下旬矢部ヨリ椎葉山ヲ経テ湯(湯前町)ノ前ニ至ル、時ニ正義五番中隊ト編制、此時分隊長トナリ三田井(高千穂町)ニ發ス、同所ヨリ馬見原ニ進撃ス、勝利ナクシテ三田井ニ引揚爰ニ哨兵スル事十余日、戦利ナクシテ中村(諸塚村)ニ退キ其時半隊長トナリ、夫ヨリ椎畑へ退陣ス、時ニ小隊長トナリ其ヨリ所々へ退キ、途中ニテ急病相發病院へ送ラレ入院候処、終ニ延岡長井村ニ於テ降

伏仕候上延岡病院へ送ラレ、三十余日ニシテ全快、后島(延岡市北端)之浦へ送ラレ九月一日帰宅仕候事、

鹿兒島県第二大区二小区

明治十一年五月

藥丸兼文

三三 松崎貞徳上申書

明治十年二月十五日第^(藤原國幹隊長)志番大隊七番小隊押伍ニテ鹿兒島ヲ発程、同廿二日熊本県川尻駅へ着ク、翌廿三日熊本城攻撃、直ニ同所八幡山へ壘ヲ築キ城兵ト炮戦ス、同廿六日植木街道へ進軍ス、同日高瀬(玉名市)へ進撃、官兵支フル事能ハス守リヲ棄テ敗走ス、我隊追撃スル事一里余ニシテ直ニ木ノ葉口(玉東町)へ引揚、同所へ守兵スル事三日間ニシテ諸方へ追撃ス、官軍死傷ヲ棄テ敗走ス、夫ヨリ田原口(編木町)へ進撃ス、終日ニシテ官軍五拾余名ノ死傷ヲ棄テ、敗走ス、味方モ死傷八九名アリ、同所へ壘ヲ築キ守兵スル事一週間ニシテ出町口ノ守兵トナリ、同所ニ於テ分隊長トナリ直ニ進撃ス、戦ヒ酣ナル時手負ス、直ニ川尻病院へ送ラル、入院一週間ニシテ鹿兒島之様送ラル、一疵平癒致シ本隊へ帰隊シ鹿兒島伊敷口へ守兵ス、其時官軍ヨリ進撃アリ、

再度手負直ニ病院へ送ラル、鹿兒島破レヨリ諸所へ転院、遂ニ八月一日頃日州美々津(日向市)ニ於テ降伏仕候也、

鹿兒島県下第一大区五小区

武村六百七十八番地

明治十一年五月

松崎貞徳

三四 東郷辰二上申書

明治十年三月二日鹿兒島発足、宮崎ニ於テ六番小隊へ編入サレ押伍トナリ、同月中旬熊本県山鹿ニ至リ、翌日限(池田)府へ番兵トシテ繰出シ十五日位番兵イタシ居候処、敵襲来三昼夜計戦争ニ及ヒ、四月中旬限府ヲ引揚二重峠(向蘇町)ニ至リ三日間番兵ニテ、又矢部ニ引揚、江代(永上村)ニ於テ奇兵沓番中隊ト改隊、四月下旬頃延岡ノ内細島(日向市)ニ引揚、爰ニ一週間番兵、五月初メ竹田ニ応援トシテ差越、其時分隊長トナリ五週間位連戦終ニ敗軍引揚、三國峠ニ至リ三十日位番兵、又延岡ニ至リ梓峠進撃、一時ニ打敗リ爰ニ四十五日間防禦シ、其他所々ニ於テ戦ヒ利アラス、終ニ長井村(北川町)へ引退、然ルニ八月十七日惣軍前・中・後ニ分チ、前軍ニ編入シ榎山嶽ヲ撃敗リ、九月五日頃鹿兒島県郡山郷(郡山町)へ

帰郷、同十五日頃熊本鎮台老番中隊本部ニ降伏仕候也、

鹿兒島県下第一大区四小区

明治十一年五月

東郷辰二

三五 上野忠兵衛上申書

昨十年二月十七日第一大隊(篠原國幹隊長)一番小隊伍長トナリ鹿兒島県

下発程、同廿一日熊本県下川尻駅へ着陣ス、翌廿二日熊

本城へ進撃、攻戦三昼夜ナリ、然ルニ本営ヨリ指揮有之

我一小隊当所春日町へ引揚ケ守兵ス、翌日大田尻(大多尾カ、河内町)へ転軍

イタシ守兵スル事一週間余モ成ラサルニ、吉次峠(玉東町)へ応援

トシテ進軍直チニ攻撃ス、連戦三日間ニシテ終ニ官軍利

アラスシテ敗走ス、此時銃器・弾薬余多分捕ル、我隊迅

速大田尻へ引揚ル、夫ヨリ二本木へ転軍滞陣ス、当所ニ

於テ隊号ヲ狙撃隊ト改メ半隊長トナル、滞陣一週間ヲ過

サルニ官(宮原町)之原へ官軍襲来ノ報知有之、直ニ進軍勇戦甚シ

ク、官軍撃ル、者数知レス、戦半日成ラスシテ官軍屍等

ヲ棄テ敗走ス、我隊当所ニ守ヲ付ル、翌日官軍ヨリ進撃

有之、防戦、一昼夜ニシテ味方持口相破レ不得止事我隊

三 宮城県下

川尻へ引揚ル、守兵三日ヲ過キスニ亦々官軍ヨリ進撃有

之、戦争二三時間成ラスニ銃創ヲ蒙リ、輒チ(馬見原ナラン)豆原病院へ

送ラル、居院二週間余ニシテ鹿兒島之様帰県イタス、傷

未タ平愈ナラサルニ付谷山郷ニ於テ療養イタシ、傷平愈

ノ上帰順仕候也、

鹿兒島県下上方限

神明前居住

明治十一年五月

上野忠兵衛

三六 市來 弘上申書

明治十年二月第五大隊七番小隊押伍ニテ鹿兒島出發、同

廿一日松橋駅ニ着ス、翌朝熊本城ニ逼ル、曉二時比本営

ヨリ植木道ニ応援トシテ可進トノ令アリ、速ニ発シ植木

ニ至ル、既ニ官兵ハ木之葉駅マテ退散シタルヲ聞キ進撃

トナル、十時比ニ開戦互ニ奮戦ス、既ニ日モ西山ニ傾ク

処ニ一度ニ切込シニ敵ハ散々ニ乱走ス、追撃スル事二十

余丁、銃器・弾薬数多分捕、即夜ニ本営ノ令ヲ受ケ植木

ニ引揚ケ、翌々日山鹿ニ進撃官軍不戦シテ去ル、明ル廿

六日未明ニ官兵来リ襲フ、速ニ隊長兵ヲ集合シ正面ニ駈

着ク、戦既ニ酣ナラントスル時、我半隊ハ官兵ノ背後ニ

廻り、四方ノ銃玉ニ敵ハ度ヲ失ヒ猶予スル処ヲ切込シカ
忽チ百余名ヲ打捕ル、逃レタル者ハ八方ニ散乱セリ、夫
ヨリ止戦各隊宿陣ニ帰ス、明ル夜同隊ノ者誤テ火葉ヲ火
中ニ投シ、數ヶ所傷キ川尻病院ニ被送、數十日ニシテ木
山ニ転ス、時ニ漸ク平愈シ吾カ隊鳥之栖(西合志町)ニアルヲ聞キ帰
隊シ、小隊長トナリ罌ヲ守リ、數度官兵襲来スト雖撃テ
之ヲ卻ケ固備スル処ニ、四月中旬川尻口破レタルニヨリ
可引揚ノ報知アリ、故ニ大津駅ニ退陣ス、翌日官兵寄来
挑戦、二時間計ニシテ又撃テ之ヲ卻ク、追撃スル事三十
余丁其時我隊ニ鞍馬一疋・土工具及ヒ夫卒一名ヲ生捕、
夫レヨリ兵ヲ勒シテ帰ル、四五日ニシテ官兵再襲ス、是
時吾カ隊ハ非番ナリ、炮声ヲ聞キ右小隊ノ応援ニ進ム、
十一時過重創ヲ蒙リ病院ニ引ク、尔後所々ニ転院シ終ニ
佐土原病院ニ至ル、其時良快氣シ報知役トナリ廻走スル
処、延岡ニテ官兵ニ被取囲、山ニ潛伏シ不得止古郷ヲ志
シ、間道ヲ忍ヒ草屋ニ宿シ又或時ハ山ニ伏シ野ニ伏シ、
四十余日ニシテ終ニ鹿兒島落城ノ日帰着シ、翌日帰順仕
候事、

鹿兒島第三大区五小区

明治十一年五月

市來 弘

三七 桐野源七郎上申書

去年二月第五大隊(池上河郎隊長)六番小隊兵士ニテ鹿兒島発程、同廿一
日熊本県松橋駅ニ着シ、翌朝城ノ正面ニ掛リ安政橋ニ守
兵ス、城兵屢攻撃スレトモ悉ク之ヲ撃テ退ク、十余日ニシ
テ銃創ヲ蒙リ川尻病院ニ被送數十日ニシテ木山ニ転院、
居ル事四五日、時ニ我カ疵モ平愈シ川尻ニ帰隊シ、对罌
連戦終ニ官兵ニ被破又木山ニ引キ、夫ヨリ御船屯集ノ官
兵ヲ進撃直ニ切込ミ大ニ之敗ル、爰ニ守ル事四五日ニシ
テ敵再撃シテ来リ襲フ、暫ク防戦スレトモ終ニ敗軍シ、矢
部ニ引揚ケ改号アリ、干城ニ番中隊トナリ、夫ヨリ大前・
人吉ヲ経テ大野口(高北町)ニ至ル、於爰ニ鷗翼四番中隊ノ左小隊
長ニ被上罌ヲ守ル、官兵攻撃スレトモ毎戦ニ撃テ之ヲ退
ク、二十余日ニシテ左翼破レタルニヨリ一舛地(一勝地、味磨村)ニ退キ
哨兵スル処ニ、人吉ノ危キヲ聞キ速ニ進軍おこばニ守備
スル十余日、屢奮戦スル処ニ亦銃創ヲ蒙リ病院ニ引ク、
夫ヨリ所々ニ転シ終ニ新町(日向市)ニ至ル、其時漸ク步行モ出来
美々津川破ヨリ隊ト共ニ延岡ヲ指テ行ク、途中ニテ官兵
ニ被困一時ハ民屋ニ潛伏シ伺フト雖無逃路、不得止降伏

仕候事、

鹿兒島県第三大区四小区

明治十一年五月

桐野源七郎

三八 井尻祐徳上申書

昨明治十年二月十六日(本山弥一郎隊長)第三大隊九番小隊押伍ニテ鹿兒島

発程、出水街道ヲ経テ同廿二日熊本県下川尻駅ニ着ス、

時ニ熊本ヨリ開戦ノ報アリ直ニ進軍明午橋ヨリ突出、城

ヲ攻撃シ、千反畑ニ壘ヲ築キ固守ス、同廿五六日頃城兵

未明ヨリ襲来ル、我軍直ニ之ニ応ス、攻撃烈戦銃丸ノ飛

違フハ恰モ霰ノ降ルカ如シ、暮ニ及ンテ遂ニ城兵利アラ

ス死傷ヲ棄テ、城内ニ引退ク、我軍モ明午橋ニ守ヲ転シ

堅守ス、然ル処三月上旬頃本営護衛トシテ二本樹本営ニ

至ル、時ニ官軍八代へ上陸ノ報アリ、此時ニ番狙撃隊分

隊長トナリ小川ニ至リ、小松原ニ進撃ニ掛ル、爰ニ於テ

良久ク烈戦スルニ遂ニ官軍散々ニ打敗ラレ、死傷ヲモ顧

ミス敗走ス、我軍大勝利ヲ得官ノ原迄追撃シテ銃器・彈

薬等ヲ分捕ス、夫ヨリ小松原ニ守リヲ付ル、二昼夜ヲ経

テ官軍大挙シテ襲来リ、我軍直ニ突出シ攻撃スレトモ、

終日ノ戦ニ彈薬尽果之ヲ拒ク事能ハス松橋ニ引揚、本道

ニ壘ヲ築キ固守スルニ、翌日午前七時比ヨリ官軍亦襲来

リ、暫ク烈戦終ニ官軍敗走ス、我軍大勝利ヲ得テ小川迄

追撃ス、此時亦銃器・彈薬ヲ分捕ス、四五日ヲ経テ官軍襲

来、我軍直ニ突出シ抗拒スレトモ孤軍大敵ヲ凌ク能ハス、

遂ニ後ロヲ包マル、因テ我軍退ク、此戦ヒニ銃創ヲ受ケ

川尻病院ニ送ラル、翌日木山ニ転シ数日ヲ経テ鹿兒島へ

帰県ス、然ルニ敵ノ軍艦鹿兒島前ノ濱ニ来リ上陸シテ、

諸所ニ胸壁ヲ築キ番兵ス、故ニ吉田郷ニ避テ療養ス、味

方再ヒ鹿兒島へ突出スルノトキ未タ銃創不癒故ニ同郷ニ

潜伏ス、其后鹿兒島ニ於テ帰順仕候也、

鹿兒島県第三大区四小区

明治十一年五月

井尻祐徳

三九 植村壯七上申書

明治十年二月十五日第一番大隊十番小隊給養ニテ出発、

同廿一日熊本県川尻ニ至ル、翌日城進撃ニ付同県二本樹

之様転陣、此所へ数日滞留、毎々吾隊ノ守兵場へ彈薬・

兵粮等差続ケ、同三月下旬比同所井尻村(熊本城外)へ転陣、一日官

下 鹿 城 官

兵ヨリ押寄来及戦争候処、暮比官兵城内ノ様引取勝敗不

相分候、同何日ハ不取覚同県熊本市長峯へ転陣及戦争、諸口利

ナクシテ三日位相過キ矢部ノ様引揚、同所一泊ニテ万阪矢部町

へ守兵彼所へ出張、是又一兩日位滞陣ニテ、諸所ヲ経テ

求摩人吉へ至レリ、夫ヨリ直ニ同所田野ヲ越テ鹿兒島県人吉市北端

内大口郷牛尾ニ出テ、翌々日同所小木原村ニテ及戦争ニ

候処敗走イタシ、同県内吉田郷迄引揚三日程滞留、又々

大口ノ様出陣、於同所ニ戦争、大勝利ヲ得テ出水郷六ヶ所

迄進軍、同所へ致宿陣居候処、我隊同所麓ノ様出張、折柄

私ニハ病氣煩付、隊ニ相離レ同所ニテ十日位致療養候得

共全快不致処ヨリ、鹿兒島ノ様致帰県居、其後快氣ヲ得、

同四月十六日比我隊本城郷へ宿陣ノ由承リ差越致帰陣

候処、毎々戦争始終利アラス、横川諸所ヲ経テ庄内郷迄

引揚居候処、於此所ニ雷撃大隊大小荷駄ニ編入セラレ、同

所ニツイテモ引続キ戦争、是以敗走而已ニテ終ニ宮崎迄

引揚、此処へ四五日宿陣、諸口敗レ立、佐土原ノ内廣瀬・

高鍋ノ内美々津ヲ経テ笹野へ宿陣候処、富高新町口敗レ

立、前後ノ途ヲ塞カレ我隊モ散々ニ相成、近辺山中へ遁

居、山手ヲ忍ヒ諸所ヲ経テ、同八月中旬比鹿兒島へ帰宅、

同廿三日帰順願出降伏仕候也、

鹿兒島県第三大区三小区

明治十一年五月

植村壯七

四〇 和田助秋上申書

明治十年二月十五日村田新八隊長第二大隊四番小队押伍テ鹿兒島県下三脱丸

発足、大口筋ヨリ肥後水俣へ出、同月廿二日熊本城攻撃

ス、午後六時頃春日村へ引揚、翌日ヨリ城下ニ守兵シ、

三月上旬病氣ヲ煩ヒ川尻病院ニ入院シ、四月上旬木山ニ

転院シ、夫ヨリ処々ニ於テ養生シ、四月下旬全快ニ付江水

代ニ於テ奇兵三番中隊ニ編入致候処、奇兵ハ豊後へ進軍、

日向富高新町へ出延岡ヨリ豊後竹田へ進軍、当所ニテ防

戦、五月上旬同所敗軍ニ付小野ノ市へ退軍、五月中旬三三

重ノ市進軍守兵致居候処、官軍ヨリ進撃セラレ官兵敗軍、

当地引揚臼杵へ進撃致候処終ニ乗取り、当所守居候処官

軍襲来、味方敗軍ノ折再ヒ三重ノ市へ進撃致候得共利ナ

キヲ以テ木浦ニ守ヲ付、同所敗軍ニ付水ヶ谷へ引揚、六

月中旬柚ヶ内へ守兵ノ時分隊長ニ挙ラレ、官兵進撃ニ逢

ヒ官軍敗走、七月中旬矢ヶ内ニテ官軍進撃シテ官兵敗走、

八月中旬長井村へ援兵トシテ引揚候処、味方敗走シテ官

兵四方ヲ囲ミ、故ニ櫻ノ嶽山へ進撃有之候処味方大勝利ヲ得、夫ヨリ間道ヲ忍ヒテ九月下旬帰宅致シ、谷山警視庁ニ於テ帰順仕候也、

鹿兒島県下第一大区五小区

明治十一年五月

和田助秋

四一 村田經義上申書

昨年二月十六日(永山弥一郎隊長)第三大隊三番小隊兵士ニテ鹿兒島発程、同廿二日熊本県宇都(宇土市)ノ駅ニ至ル、時ニ先鋒ノ炮声ヲ聞ヤ(熊本城下)同県大工町へ進入シ、爰ニ哨兵スル事二十余日ニシテ有里村ニ転シ番兵守備スル処、田原坂敗レニ依リ応援トシテ植木ニ至リ、対壘連戦スル事三十余日ニシテ川尻口敗レ、故ニ竹宮(熊本市)へ引揚ケ、未明ヨリ応援ニ進軍直ニ挑戦進撃スル五六丁、戦利アリト雖其夜木山ヲ經テ川原村ニ退陣ノ処、敵不意ニ襲来、接戦卻之、追撃スル事十余丁、軍曹一名生捕、暮ニ及テ矢部ニ退キ、夫ヨリ椎葉山ノ嶮ヲ經テ人吉(湯前町)ノ湯之前村ニ至ル、時ニ正義ニ番中隊トナル、夫ヨリ鹿兒島県下牛山郷山野ニ進撃ス、敵ハ散々敗走追撃スル事七里余、夫ヨリ深川(熊本県水保市)へ退キ滞陣ノ際分隊長トナ

リ、大口敗ヨリ木崎原・本城・横川・大窪(霧島町)・庄内・宮崎等ノ戦ヒ利無、終ニ延岡長井村ニ至リ降伏仕候也、

鹿兒島県第二大区壹小区

明治十一年五月

村田經義

四二 平山武一上申書

明治十年二月十二日(池上内郎隊長)第五ノ九番小隊へ編入シ押伍トナリ、各隊ヨリ押伍名宛本営護衛相勤ムヘキノ処其任ニ当リ、同十七日本営ト共ニ鹿兒島ヨリ大口街道へ進発ス、同廿日熊本県人吉へ出、夫ヨリ求摩川ヲ下リ八代駅へ着、同所ヨリ亦々舟ニテ松橋駅へ着、同廿二日比各隊ヨリ熊本城へ進撃ノ報屢ナリ、本営其事ヲ聞ヤ直ニ其県下迎町ノ内迄進ミ營ヲ置キ、同廿七日比春日村へ転營ス、護衛人員追々交代ヲ以テ本隊へ帰シ、我隊ヨリ交代来リシニ、山鹿駅へ進軍相成居候本隊へ同四日比同所出口ニ於テ帰隊ス、同日ヨリ隊ヲ以テ本営護衛ト被定、直ニ我カ隊第四ノ五番二小隊ヲ本営護衛トシテ植木迄引揚、翌五日二本木村へ引揚居ル処、其夜十一時比ヨリ木留口(植木町)応援トシテ進撃スヘキ報アリ、直ニ集合進撃ス、翌日ヨリ我隊同所耳取(植木町)

三 宮城県下

峠ヲ守ル事二十余日、其内同月十五日比奈知山(續木町)へ未明ヨ

リ大進撃終日憤戦、日暮ニ及ヒ右峠へ引揚居候処、二三

日モ不過官軍襲来、吉次峠(玉東町)へ引揚、同廿四日同所ニ於テ

中隊ニ編制シ第五ノ九番中隊ト改名、同日同隊右分隊長

被申付、翌日同所ニ於テ銃創ヲ受同日川尻病院へ被送、

四月上旬比木山(益城町)へ病院ヲ被移即時転室、同月同所ヨリ帰

県仕居候テ八月十六日帰順仕候也、

鹿兒島県第一大区五小区

五百十八番地居住

明治十一年五月

平山武一

四三 中村兼業上申書

明治十年二月(永山弥一郎隊長)第三大隊六番小队兵士ニテ鹿兒島発程、同

廿二日熊本県宇土ノ駅ニ至ル、時ニ先鋒ノ炮声ヲ聞キ十

二時頃ニ安正橋ニ駆着ク、烈戦シ対壘スル事二昼夜ニシ

テ出京町ニ転陣、哨兵スル事五十余日、其内城兵数度襲

来スト雖打散シ固守スル処ニ、川尻口敗レタルニ依テ木

山ニ引揚ケ、(熊本市)長峯ノ危キ報アリ速ニ援兵ニ進ムヤ否ヤ一

時ハ追撃ス、終ニ不勝利ニテ又木山ニ引キ、四月下旬矢

部ヨリ椎葉山ヲ経テ湯之前ニ至ル、時ニ正義(久本重兵衛中隊長)五番中隊ト

改名、是時押伍トナリ三田井(高千穂町)ニ発シ、同所ヨリ馬見原(蘇陽町)へ

進撃シ利ナクシテ又三田井ニ退キ、爰ニ哨兵スル事十余

日、戦利ナクシテ中村(日之影町)ニ退キ、夫ヨリ所々退陣ス、終ニ

延岡長井村(金川町)ニ被囲ニシテ江ノ嶽(可愛岳)ヲ敗リ、途中ニテ分

隊長トナリ鹿兒島ニ至ルマテ毎戦大勝利ヲ得、分捕・生

捕数ルニ無算、(鹿兒島市)吉野ニ来ル時苦戦シ、其時不計モ我方隊

ヲ失ヒ逃ルニ無道、不得止所々ニ潜伏シ、終ニ九月上旬

帰順仕候事、

鹿兒島県第三大区五小区

明治十一年五月

中村兼業

四四 長谷場喜藏上申書

明治十年第二月十七日(池上四郎隊長)第五大隊七番小队押伍ニテ鹿兒島

県下ヲ発足シ、同県下出水ヨリ乗船、同二月廿二日未明熊

本ニ至リ初メテ開戦、勝敗不決、翌廿三日木ノ葉(玉東町)ニ転戦

大ニ利ヲ得、官兵死傷・兵器ヲ棄テ、走ル、我兵即時二植

木ニ纏メ同廿五日山鹿ニ至リ、翌日官兵来襲、之ヲ鍋田(山鹿市)

ニ迎撃シ大ニ利ヲ得、斬首百余、同所ヲ固守ス、二月下

三 官 城 県 下

旬小隊長ニ挙ラレ、官兵山鹿ヲ来攻スル枚挙ニ違アラス、
毎戦勝利、官兵兵器ヲ棄テ死傷ヲモ顧ミス敗走スル数度
ナリ、烏合ノ我カ兵器ノ様々ナルハ素ヨリナリ、然ルニ
大戦凡ソ三度ニシテ二百余人小隊ノ兵士敵銃ヲ切捕リ、
斉シク針打銃トナリ兵氣ノ過激以テ知ルヘシ、旧二月七
日同所ヲ過キ鳥ノ栖(西合志町)ニ至リ対守ス、四月四日官兵田島ニ
群集スルノ探偵兵士ヲ勸シ力守ス、翌五日未明官兵本道
ヲ攻撃スル炮声山岳モ崩ル、カ如シ、即チ斥候ヲ向テ窺
ニ朝霞四方ヲ塞キ咫尺モ不弁、後ニ烈シク呼戦ス、我兵
紛乱十丁計引退、再ヒ隊列ヲ整顿シ返撃接戦数回忽チ敵
兵ヲ追返シ復壘ス、兩軍死傷相当、対戦スル数日、旧三
月二日川尻口ノ敗報アリ、即鳥ノ栖ヲ引去大津ニ転軍、
翌三日官兵烈ク来攻ス、激戦数時間、遂ニ突入大ニ利ヲ
得追撃スル二里余、同八日同所ヲ引上ケ矢部ニ至リ隊名
ヲ改革シ奇兵十五番中隊ト称ス、馬見原(稚葉村)・胡麻山ヲ經テ
求摩(水上村)ノ江代(稚葉村)ニ出テ、夫ヨリ日州路ニ向ヒ延岡ニ達ス、旧
四月上旬豊後(竹田市)武田ニ突入、固守スル旬日余、終ニ敗戦追
撃サル、事十丁計、同国小野市ニ全軍ヲ集メ三重(三重町)ノ市ニ
戦ヒ臼杵ニ転入、旧四月下旬官兵大挙来襲、彈薬乏シク
保ツ可ラサルヲ度リ、臼杵ヲ引テ三國峠ニ構壘ス、旧五
月八日戦利ヲ失シ日州(北川町)熊田ニ奇兵ノ全軍ヲ集メ重岡進撃
ニ決議シ、諸隊ヲ四ニ分チ各向所ヲ定メ、我小隊本道ヲ
進ム、官兵赤松谷ニ要撃シ敵壘ヲ拔キ奮戦ス、時ニ大雨
甚シ、日ノ暮ル、ニ会ヒ彈モ尽キ、止ムヲ得ス(北井町)鏝迄引上
ケ、旧五月中旬水ヶ谷(宇目町重岡)ノ官兵ヲ攻破リ、豊後日州ノ国堺
梓峠(宇目町重岡)ニ対壘数旬、諸方ノ我兵頻リニ接戦突入スト雖、彈
薬ノ乏シキカ為メニ終ニ敗軍、諸方總軍日州長井村ニ囲
マル、両三日、于時旧七月上旬再ヒ猪ノ嶽(可登岳)ヲ突破リ、官
兵棄テ走ル兵糧・兵器乱雜野ヲ蔽フ、我兵争テ食ニ就ク、
兵器ヲ分捕リ岩戸(高千穂町)ニ出テ三田井ノ官兵ヲ瞬目ノ間ニ突破
リ、十有余日ノ道程ヲ經テ鹿兒島県下小林ニ出ツ、横川ヲ
經テ蒲生ニ至リ、時ニ県下ノ青々タル人家モ乍チ烟灰ト
ナリ人民窮迫ス、我兵ノ城山ヲ恢復スルヤ四民大ニ喜ヒ、
各職具器握リ甚シキハ肴庖丁ヲ提ケ、各所ニ馳集リ官兵
ヲ斃ス事数知レス、恰モ米國華盛頓(ワシントン)ノ独立ノ如シ、実ニ
九月一日ナリ、官軍ノ残兵米藏ニ籠リ烈シク応炮ス、貴
島・桐野謀リ米藏ノ敵払ハスンバ籠城ノ患ヲナサント夜
撃ニ決シ、即チ装ヲナシ三日ノ夜深更ヨリ攻撃、敵壘ニ
接シ奮戦スレトモ我兵刀隊ニテ敵丸雨ノ如シ、既ニ斃ル
、者二十余人止ムヲ得ス引退ク、県内ノ諸郷二人ヲ遣リ

募兵シ永ク守城ノ備ヲナサント欲ス、官軍十有余万ノ兵
来リ困ム事神速寸隙ノ間道モ絶セリ、為メニ味方接軍応
スル能ハス、時ニ城中ノ我兵僅ニ三百ニ足ラス、桐野笑
テ曰、幾万ノ天下勢孤城ヲ堅ミ墨柵ヲ設ケ、且板ニ釘シ
テ地ニ敷ク幾重ヲ知ラス、実ニ臆病兵ノ至ト云ヘシ、落
城ノ期モ且夕ニアレハ諸君宜ク天目山ト知ルヘシ、快愉
此ニ窮ルト、諸士一同ニ笑テ酒ヲ呑ム、半酣ニシテ各位
置ニ向フ、昼夜礮撃サル、最甚シ、九月廿四日未明官兵
蟻付シテ攻城ス、見兵力戦スト雖腹背敵ヲ受ケ終ニ落城
ニ至レハ、拒クニ力ヲ尽キテ大手口ニ於テ降伏ス、聊戦
状概記上申矣、

鹿兒島県第一大区四小区

明治十一年五月

長谷場喜藏

四五 小幡佳次郎上申書

明治十年二月西郷隆盛上京之際(池上西郷隆盛)第五大隊八番小隊ノ押伍
ニ編入セラレ、同月十七日鹿兒島発程、出水口へ出て同
所米之津(由水市)ヨリ廻船松橋へ上陸、即夜川尻ニ於テ先鋒隊開
戦ノ報知アリ、直ニ熊本ヲ指テ行キ宇土・川尻ヲ経テ、

翌廿二日熊本城下千反畑ヨリ攻撃スレトモ、台兵籠城シ
テ敢テ出テ戦ハス、故ニ墨ヲ築キ各隊ト守線ヲ通シ、翌日
交代シテ我隊外ニ二小隊、八幡山ヨリ城内へ斬入りノ賦
ニテ用意ヲナシ直ニ春日村ニ至リ、急ニ本営ヨリ押シ留
ラレ、夫ヨリ反シテ高瀬(五右衛門)へ進撃シ川ヲ挾ンテ戦ヒ、少ク
勝利ヲ得テ追撃スル丁余、是ノ時銃器・弾薬ヲ分捕、夜ニ
及ンテ第一大隊四番小隊ト交代シテ稻佐村(玉東町)へ滞陣ノ処、
翌日引揚クヘシトノ報アリ、速ニ植木へ引揚ケテ三日滯
陣、亦木(玉東町)ノ葉ノ危キ報ニ依リ応援トシテ進ムヤ、味方敗
軍シテ田原坂ニ引揚ケテ對壘シ哨兵ヲ張り、翌日曉ニ東軍
大兵ヲ以テ進撃シ既ニ墨ヲ抜ントスルニ、味方鯨波ノ声
ヲ挙テ接戦ヲ掛ケ、東軍散々ニ斬散サレ逃ルヲ追ヒ駆ケ
斬伏セ射伏セ、即戦ニ数百人ヲ討取り、夫レヨリ東軍又
兵ヲ纏メテ進撃シ、我兵邀撃テ之ヲ破リ連戦十余日、毎
戦大捷ヲ得テ東軍ノ死屍數知レス、生捕モアリ或ハ銃器・
弾薬等多奪ヒ取り、三月中旬比第二大隊一番小隊ト交代
シテ熊本迎町へ引揚ケ、夫ヨリ段山守兵トシテ出張シ第
五大隊四番小隊交代トシテ守居ル処、熊本県士三四名当
所ニ来リ鹿兒島(熊本縣)・熊本両本営ヨリノ矢文ヲ城内へ射リ、
其夕ヨリ城兵忿激ト見ヘ大小銃ヲ放チ、翌日正午比城兵

三 宮 城 県 下

我哨兵線ノ後ニ忽然トシテ襲ヒ来リ一瞬間計戦フテ接戦ニ成リ、東軍ノ長官二人ヲ斬斃シ、夫レヨリ城兵叶ハシト散々ニ逃ケ去リ我兵追撃シ、又城中ヨリ大小銃ヲ放チ昼夜ノ戦ヒ炮声無絶、翌日城内ノ巡查兵ヨリ第七大隊小隊ハ不覺之壘ヲ攻破セラレ不得止段山口迄引揚ケ、是時手負シ川尻病院へ入り養生、二十余日ニシテ全快シ本隊へ帰リ、出町口ヲ堅固ニ守、時々城兵襲来スレトモ邀撃シテ破之、然ル処川尻口敗軍ノ報ニ依リ不得止困ヲ解ヒテ長峯ニ屯シ、又竹宮（維新）へ操出シ即日東軍進撃スレトモ我兵邀撃シテ少ク破之、四五日防戦シ勝敗互ニアリ、亦御舟口敗軍ノ為メ木山（益城町）へ引退キ、利無クシテ矢部へ退陣、当所ヨリ金内（惟英村）へ出張シ二三日守兵、不戦シテ尾前へ引揚ケ、於是干城六番中隊トナリ、一週間ニシテ人吉ニ出、又本宮ヨリ大口へ東軍突入スルニ付速ニ操出スヘキ旨達セラレ、直ニ大口へ出テ東軍ノ哨兵ト小木原村ニ於テ出遇ヒ、激戦數十合塵ニ三小隊ノ寡兵ヲ以テ東軍ノ大兵ニ撃合ヒ、遂ニ行進十一番中隊敗軍シテ、我隊漸ク眞幸吉田（えびの市）ニ引揚ケ、是時邊見十郎太出張本宮トナリテ当所ニ来リ、於是分隊長ニ上ケラレ、取敢ヘス山野へ進撃シテ東軍ノ大兵ヲ攻破シ、山野ノ本部ヲ突キ銃器・弾薬・諸物品ヲ多ク奪ヒ

取りテ追撃スル途中、山野ノ岡ニ於テ再ヒ銃創ヲ蒙リ、五月十六日眞幸吉田ノ病院へ入室シ、人吉敗軍ノ時（牧園町）踊病院へ転シ、又鹿兒島敗レテヨリ都之城・高城・本城諸所病院へ移リ、遂ニ延岡迄退キ、味方連敗シテ後八月十八日長井村病院ニ於テ降伏仕候事、
（北川町）

明治十一年五月
鹿兒島県第一大区五小区
西田村式百拾壹番地
小幡佳次郎

四六 橋口仲二郎上申書

明治十年旧正月三日（二月十五日）第二大隊一番小隊兵士ニテ鹿兒島出発、同九日肥後川尻へ着、同十日熊本城ヲ囲ム、同十一日夫ヨリ大津へ転陣、同十七日田原坂ニ進軍速ニ戦争ニ及ヒ、夫レヨリ五日ノ連戦終ニ利アラサシテ植木へ転陣ノ処、官軍襲来ニ付直ニ進撃、官兵數百名打取大勝利ヲ得テ暫ク防戦、旧三月二日川尻破レノ報知ニ依テ永峯へ転陣、翌日ヨリ三日ノ防戦、同五日進撃勝利ヲ得、同六日木山へ転陣、直ニ戦争ニ及フトイヘトモ利アラサシテ同日矢部へ引揚ケ、両三日滞陣、同十一日人吉へ着、夫

ヨリ鹿兒島へ旧三月廿三日比揆込ミ、(鹿兒島市)冷水峠へ十九日間
防衛、夫ヨリ同四月十二日人吉馬草村へ着、直ニ同所三
方境へ進撃ノ折手負致シ、夫ヨリ眞幸(えびの市)吉田病院へ入院、
同廿八日為療治方帰宅、同七月十六日帰順、然処鹿兒島
へ襲来ノ際本営ノ達ニ依テ同廿八日鹿兒島へ出発、然ル
ニ官軍諸所へ番兵ニ付城山へ入ル事不相叶、空ク帰宅仕
候也、

鹿兒島県下

明治十一年五月

橋口仲二郎

四七 有馬純俊上申書

明治十年二月十六日(桐野利秋隊長)第四大隊五番小隊押伍ニテ鹿兒島発
程、同月廿二日熊本県松橋ニ着ス、翌日(甲佐町)甲佐村・御舟・
川尻ヲ経テ熊本城ニ至リ、直ニ植木ヨリ苦戦ノ報知来
リ援兵トシテ夜九時進軍ニナリ、途中ニ於テ戦終ヲ聞キ、
夜半比植木ニ着ス、翌廿五日山鹿ニ進軍シ官兵不戦シテ
引退キ、翌朝官兵来リ襲フ、外隊三時間余戦ヒ敵敗軍ス、
我隊ハ新町通路ニ守兵シ、廿七日外隊ト交代シ三日休戦
ス、同廿九日植木引揚ケ明朝野出村へ進軍シ同所ニ数日

宿陣シ、(植木町)木留開戦アリ応援トシテ出発ス、朝七時比ニ戦
地ニ着ス、直様交戦、八時比ニナリ勝敗決セス、終ニ我
カ左ノ手ニ銃創ヲ蒙リ川尻病院ニ入り、数日ニシテ松橋
口敗レテ(益城町)木山町ニ転院、夫ヨリ矢部・延岡・高岡・都城
マテ引揚ケ、数日ニシテ平愈シ、六月廿三日宮崎本営ニ
送ラレ、夫レヨリ豊後口ニ行キ同所本営ニ数日宿シ、七
月十二日奇兵一番小隊分隊長ニナリ、豊後大原ニ於テ二
十日余防戦、遂ニ味方敗レテ梓峠へ引揚ケ翌ヲ築キ十五
日計防戦ス、果シテ宮崎口敗レテ延岡長井村ニ用マル、官
軍四方ニ台場ヲ築キ進退谷マル、因テ八月十八日(高千穂町)榎ノ嶽
へ進撃大勝利ヲ得テ追撃シ、堀川口突出シ地蔵嶽ヨリ三
田井迄連戦皆勝利、銃器・諸品等分取夫ヨリ七ツ山・神
門・鬼神野村迄戦ヒ大勝利ヲ得分捕数多有リ、米良ヨリ
須木郷ニ出テ小林ニ至リ、官兵ヲ追払ヒ、眞幸郷ヲ経テ
横川ニテ我カ前軍官兵ニ激撃セラレ、中軍横ヲ突出テ官
兵ヲ山田・蒲生・吉田郷マテ追撃チ、吉田ニ一宿、翌朝
(給良町)鹿兒島城下ニ進行キ、吉野帯迫ニ戦ヒ、九月一日城下ニ
突入り官軍ヲ追払ヒ、生捕り分取り数多シ、後日帰宅シ
タル処官軍武村ニ来リ再ヒ帰城ヲ得ス、谷山郷山田村へ
潜伏イタシ九月廿一日帰順候事、

鹿兒島県第二大区七小区

明治十一年五月

有馬純俊

入ル、四月下旬帰県候事、

鹿兒島県第二大区三小区

明治十一年五月

野間 勝

四八 野間 勝上申書

明治十年二月上旬(桐野利秋隊長)第四大隊四番小隊兵士ニ編入セラレ同

十六日鹿兒島発程、大口街道ヨリ肥後水俣ヲ経テ小川駅

ニ着ス、先鋒既ニ熊本城ト開戦景状ニテ炮声山岳ニ轟ク、

故ニ本道疾馳シテ熊本ニ至ル、是二月廿二日也、翌日官

軍ノ援兵ト植木ニ戦ノ報アリ、故ニ同所ヘ向ケ直ニ進軍

ス、然シテ山鹿ニ官軍屯在ノ趣ニ付同廿四日未明両道ヨ

リ進撃、官兵已ニ岩村(三加和町)ヘ退却セリ、因テ山鹿ニ胸壁ヲ築

キ固守ス、二月廿六日官軍襲来ル、迎ヘ撃テ大ニ之ヲ破

ル、二月下旬押伍申付ラレ岩村(山鹿市)ヘ本・間両道ヨリ進撃ス、

戦ヒ利アラスシテ退ク、三月上旬官兵鍋田ノ壘ニ未明ヨ

リ来襲ス、味方頗ル苦戦ス、我隊応援接戦シ、午後六時

ニ至リ遂ニ官兵ヲ撃破ル、敵銃器或ハ死屍等モ捨テ走ル、

三月中旬分隊長申付ラレ、其後数度ノ戦ヒ互ニ勝敗アリ、

三月下旬田原坂敗軍ノ際鳥(西合志町)ノ栖村ヘ退軍固守ス、四月五

日官軍大軍ヲ以テ大ニ進撃ス、仍テ銃創致シ木山病院ニ

四九 相良角兵衛上申書

明治十年二月十七日(岩元平八郎隊長)官番炮隊兵士ニテ鹿兒島発程、廿一

日熊本県八代ニ着ス、同廿二日熊本城下ニ至リ花岡山ニ

炮臺ヲ築キ城内ニ炮発ス、烈戦スル事三日、夫ヨリ山鹿

表ヘ応援トシテ進発スル処、軍議ニ依リ直ニ木留ヘ向ケ

進ム、同所ニ於テ数度戦争ニ及ヒ、三月上旬官軍大兵大

ニ進撃シ来ル、一時味方利アラスシテ退ク事里余、其翌

日ニ我兵ヨリ大ニ攻撃シテ敵兵ヲ撃破リ、敵兵死屍山野

ニ横タハリ依テ同所ニ堅守ス、以後東軍数度攻メ来レト

モ悉ク撃却ク、後チ同所交代シテ又タ花岡山ニ滞陣スル

事二十日、川尻口味方敗軍ノ報ニ依リ長峯(熊本市)ニ引揚ケ、依テ

同所ヲ堅守セシ処東軍大ニ攻メ来ル、我兵苦戦セシニ午

後ニ至リ大ニ勝ヲ得テ東軍散々ニ敗走ス、然ルニ御舟口

味方敗軍ニ付止ムヲ得ス川原ヘ引揚ケタリ、後チ矢部・

馬見原(蘇陽町)ニ引揚ケシ処、病ニ罹リシニ付帰県シ、後チ快氣

三 宮 城 県 下

ノ上宮崎ニ至リ分隊長トナリ、六月下旬杉口^(須本)出陣同所敗軍、夫ヨリ佐土原・美々津所々敗軍、高岡ニ於テ降伏候事、

鹿兒島県下

明治十一年五月

相良角兵衛

五〇 草野藤助上申書

昨十年二月十六日^(永山弥一郎隊長)第三大隊八番小隊兵士ニテ鹿兒島発程、出水口ヨリ同廿二日熊本県下川尻ニ着シ、時ニ先鋒開戦ノ報アリ、直ニ熊本ニ至リ攻城二十有余日、然ルニ官兵八代口ヨリ挾撃ノ報アリ、直ニ八代口ニ至リ即日官^(宮原町)ノ原山手ニ壘ヲ築キ固守ル処、官軍襲来ル、我軍撃テ大ニ之ヲ敗リ逃ルヲ追フ事十五丁余、暮ニ及ンテ官軍山手ニ掘リ良久シク烈戦勝敗不決、我軍夜中ニ浜辺本道迄引揚壘ヲ構ヘ固守ス、時ニ三月中旬官軍不意ニ襲来リ我軍敗レテ四五丁計退軍ス、同日午後一時ヨリ大進撃ニ掛リ官軍散々ニ敗走シ、追撃スル事十五丁計、斬獲無数銃器・弾薬ヲ分捕リ大ニ利ヲ得タリ、然レトモ不利ノ地ナレハ松橋迄引揚、翌日松橋山手峠ヲ守リ五日間ヲ経テ官軍襲来、

我軍遂ニ敗走シテ甲佐^(甲佐町)ニ退キ、甲佐川ヲ三日間固守シ後堅シ田^(中矢町)ノ官兵ヲ夜撃シテ大ニ勝利ヲ得タリ、然ルニ官軍前戦ノ敗ヲ憤リ大挙シテ進撃ス、我兵大ニ苦戦遂ニ破レテ三舟^(御船町)ニ退ク、時ニ四月上旬三舟ニ壘ヲ構ヘ固守ル処、敵急ニ襲来リ、我軍防戦遂ニ利アラスシテ南田代ニ退キ、未胸壁モ構ヘサルニ敵急ニ攻来ル、我軍勇ヲ奮テ激戦、遂ニ官兵銃器等ヲ捨テ敗走ス、四月中旬矢部ニ引揚隊名ヲ干城ト改メ半隊長ニ挙ラレ、夫ヨリ那須山^(惟葉村)ヲ越ヘ尾前^(惟葉村)江代^(永上村)ヲ経テ人吉ニ退ク、即夜本營ノ令ニテ大口表ニ出軍ス、翌日大進撃シテ大ニ官兵ヲ破リ本營ニ突込官軍狼狽敗走、退テ小河内^(大口町)ヲ保ス、又撃テ之ヲ破リ斬獲分捕多数逃ルヲ追フ事六里余、然ルニ官軍水俣堺^(水俣市)深川ニ陣シ胸壁ヲ構フ、依テ我軍水俣ヲ突ント深川迄進ムニ敵三面ヨリ合撃シ、良久ク戦ヒ勝敗不決、此処ニ一週間余烈ク連戦固守、数勝利ヲ得タリ、時ニ五月上旬該所ヨリ北ニ当リ四里ヲ隔テ久木野^(水俣市)ニ敵兵ヲ進撃スルニ、卻テ味方少キ故危戦ニ及ヒ既ニ敗レントスルニ、本營斥候隊二十名援兵来リ之ニ力ヲ得テ奮戦シ、忽チ二ツノ台場ヲ乗取リ大勝利ヲ得タリ、其夜敵ニ替リ壘ヲ守ル、翌日未明ヨリ大進撃ヲナシ、激戦中胸ニ重傷ヲ負ヒ小河内病院ニ送ラレ、

三 宮 城 県 下

翌日吉田病院ニ至リ、又踊病院ニ入ル三十余日、其後諸所病院ニ入り遂ニ延岡長井村病院ニ至ル、時ニ旧七月中旬官軍進襲ノ際降伏仕候也、

鹿兒島県第三大区一小区

明治十一年五月

草野藤助

五一 西田郷之丞上申書

明治十年二月十七日第五番大隊十番小隊兵士ニテ鹿兒島出発、出水米之津ヨリ乗船同廿一日熊本県松橋駅へ上陸、

翌廿二日熊本県下ニテ開戦、城ヲ囲ム事廿有余日、爰ニテ押伍トナリ、三月廿日八代へ官兵上陸スルニ因リ直ニ進軍、翌廿一日銃創ヲ負ヒ、即日川尻病院へ入室、四月五日帰隊シ同十四日官軍大挙シテ来リ攻ム、我隊敗レテ

(益城町) 木山町へ退キ、数日ニシテ御船へ進軍、数日ヲ経テ金打

村へ引揚ケテ干城三番中隊ト改号、同廿四日奈須越ノ嶮

ヲ経テ尾前へ出テ夫ヨリ尾八重村へ守兵、五月廿二日向

山ノ味方敗ヨリ不道野村へ引上ケ、同廿五日分隊長ニ上

ケラレ、両日ヲ経テ官軍襲来、敗レテ人吉ノ江代へ退ク、両三日ヲ経テ復タ襲来、戦ヒ勝ツト雖モ守兵ニ利ナキヲ

以テ岩野村へ退キ、翌日進襲大ニ勝利ヲ得ル、然レトモ人吉ノ味方敗レシニ因リ日州米良へ引上ケ、七月月中旬干城一番中隊ト改号、爰ニテ小隊長ニ上ケラレ、数日ニシテ官軍襲来大ニ戦ヒ、利ナクシテ越ノ尾へ退キ守兵中、誤テ足骨ヲ違セ佐土原病院へ入室、高岡口ノ味方敗レ官軍後ヨリ逼ルニ因リ、高鍋ヲ経テ遂ニ延岡長井村へ退キ、八月十七日榎ノ嶽ヲ敗リ中軍病院ニテ九月一日鹿兒島へ乱入シ、自宅ニ帰り、同十七日加治木分署ニテ帰順仕候也、

鹿兒島県第三大区五小区

後迫居住

明治十一年五月

西田郷之丞

五二 左近允純明上申書

明治十年二月十六日第三大隊二番小隊押伍ニテ鹿兒島

発程、出水口ヨリ肥後水俣へ出テ同廿二日肥後熊本ニ着

シ、直ニ攻城スル事一日、引テ筒口ヲ守ル事殆ント四週

間、時ニ敵兵八代ニ上陸ス、本営ノ指揮ニ従ヒ鏡村ニ進

撃スルヲ不得シテ堤ニ守兵ス、兩日アツテ敵襲来リ激戦スレトモ味方ノ兵素ヨリ寡兵ニシテ苦戦ス、遂ニ引ヒテ砂川ヲ守ル、又タ兩日アツテ敵襲来リ激戦ノ央、間道ヨリ敵ノ左翼ニ出テ是狙撃ス、全軍進シテ是ヲ撃ツ、敵兵直ニ潰散ス、我隊進撃シテ氷川堤ニ到リ時ニ日暮ル、故ニ砂川ニ帰陣ス、此時分隊長トナリ又タ兩三日アツテ敵襲来リ激戦、終ニ勝利ヲ不得シテ松橋駅へ引揚ケ、此時本営ノ令ニ從ヒ鱒上峠(鱒神峠、小川町)援兵トナリ滯陣スル事四五日、敵兵襲来リ則チ激戦ス、又タ不利ニシテ引ヒテ甲佐ヲ守ル、敵兵堅シ田ニ守兵ス、兩三日ヲ経テ本営ノ指揮ニ依リ路ヲ間道ニ取り敵ノ本営ヲ進撃ス、暫時利ヲ得タリ、是ノ時敵ノ援隊味方ノ左翼ニ出来リ防戦スレトモ遂ニ利ヲ得スシテ又タ甲佐ニ引揚ク、是ノ日敵大兵ヲ以テ襲来リ又タ是レヲ防ク、利ナクシテ退ヒテ御舟ヲ守ル、四五日ヲ経テ敵大兵ヲ以テ又タ襲来ル、味方各所ノ転戦ニ死傷アツテ最モ寡少ナリ、故ニ防戦スレトモ禦クヲ不得引ヒテ南田代ヲ守ル、敵又タ二道ヲ分ツテ襲来リ直ニ敵ノ左翼ニ出テ是ヲ突ク、敵直ニ潰散ス、後チ兩日アツテ味方御舟ノ敵兵ヲ撃ツテ是ヲ走ラセ、時ニ我隊御舟援隊トナリ是時小隊長トナリ、又タ敵襲来リ是レヲ防戦スト雖モ遂ニ

敗レテ大野村ニ引揚ク、敵兵久木野村ニ守兵ス、故ニ本営ノ指揮ニ依リ進撃ス、遂ニ官軍敗走ス、我隊機ニ乘シテ尾撃スル事数里、大勝ヲ得テ又タ大野ニ帰陣ス、又タ小河内ニ於テ外隊激戦ノ処我隊本営ノ指揮ニ依リ直ニ援隊トナリ出軍ス、戦酣ル時我隊横サマヨリ敵ノ不意ヲ撃ツ、敵悉ク潰乱ス、我隊追撃スル事数里、此ノ地ニ滯陣スル事始ト四週間、此時屢敵襲来レトモ悉ク撃テ是レヲ走ラス、敵大挙シテ襲来ル、激戦遂ニ引ヒテ鹿兒島県内山野ヲ守ル、又タ敵襲来リ鬪戦ス、終ニ引テ大口ニ到ル、敵尾撃シテ来リ直ニ撃ツテ是レヲ走ラセ、此時中隊長トナリ此ノ地ヲ守ル事四五日過ルヤ敵襲来リ、終ニ退走シテ本城ヲ守ル、敵兵又襲来リ鋭戦ス、又タ引ヒテ大久保村ニ守兵ス、翌日又襲来リ直チニ撃テ是レヲ走セ、翌日又タ襲来リ大ニ鋭戦ス、遂ニ利ヲ得スシテ退ヒテ高野村ニ守兵ス、敵兵財部大河原村ヲ取テ是レヲ守ル、故ニ本営ノ指揮ニ從ヒ進撃シテ激戦スル央、重傷ヲ負ヒ直ニ病院へ送ラレ各所転院、終ニ延岡大野村ニ於テ治療中帰順仕候也、

明治十一年五月

鹿兒島県

左近允純明

五三 加藤景道上申書

(永山郡一郡隊寫)

明治十年二月第三番大隊八番小隊ニ編入セラレ押伍トナリ、同十六日鹿兒島県下発程、出水口水俣街道ヲ經テ同廿一日宮ノ原(宮原町)へ着ス、即夜ニ先鋒隊本営ヨリ翌廿二日未明ニ熊本城へ攻撃ニ相成由報知有之、第三番大隊ハ夜半ニ同所発足ス、程ナク先鋒隊開戦ノ炮声烈ク相聞へ、其時我モ我モト勢ニ乗シ松橋ヨリ各隊半隊位ツ、熊本城指シテ駆足ニテ向町ニ駆付、直ニ中学校ノ下へ突入シテ激戦ス、時ニ勝敗未不決内ニ本営ヨリ出町口へ進軍スベキ報有之、速ニ同所ヲ引揚ケ出町口へ出張ス、翌廿三日進撃ノ時城ノ下田畔ニ於テ銃創ヲ蒙リ、夫ヨリ本隊ノ宿陣室園へ帰り爰ニ滞陣兩三日、夫ヨリ武邊(熊本市)へ転陣シテ健町ノ兵糧ヲ分捕り爰ニ対壘ヲ築キ、各隊ト哨兵線ヲ通シテ堅固ニ守リ、二十余日ニシテ官兵八代口へ上陸ノ報本営ヨリ有之、速ニ同所ヲ引揚ケ旧二月六日十二時比八代口へ操出シ小川駅へ宿陣ス、翌六日未明ニ小川山手ニ進撃ス、我隊敵ノ後へ突入り数人ヲ斃シテ銃器・彈藥ヲ分捕リ、敵散乱シテ逃走ル、我隊尾撃スル事半道余、夫ヨリ兵ヲ

纏メテ我隊左右ノ山ヨリ激撃スレトモ抜ク事不能シテ終日連戦ス、夜半ニ本営ヨリ本道へ引揚クベキノ報有之、速ニ同所ヲ引揚ケ本道ニ固ク守ヲ付互ニ防戦ス、兩三日ヲ終テ官兵襲来リ互ニ激戦スル内ニ山手ノ加治木隊敗軍ニ及ヒ、夫故ニ不得止同所ヲ六丁計引揚ケ、夫ヨリ直ニ五ノ十番小隊ト合シテ接戦ス、此時利ヲ得尾撃シテ銃器・彈藥ヲ分捕リ、其夜本道ヲ守備シ明早天ヨリ山手へ転陣ス、爰ニ防台ヲ築キ堅固ニ守兵シ、又々四五日ヲ經テ官兵襲来リ、互ニ激戦スル事半日余ニシテ本道敗軍スレトモ撓ス防戦スル処ニ、我隊四方ヲ囲レ一方ヲ打破リ松橋へ引揚ケ、我隊壘小隊ハ直ニ鯖神峠へ防台ヲ築キ固守リ、延岡隊ハ鳳滿峠へ守兵スベキ処七丁余跡ニ引揚クル、然ルニ我隊ヨリ斥候ヲ以テ直ニ鳳滿峠へ操出スベク通知セシニ、翌日未明ニ出張スル旨相答へ、夫ヨリ我隊ハ固ク守備ヲナシ、即夜ニ鳳滿峠ハ官兵守リヲ付、明レハ三十日未明ニ霞深ク咫尺モ弁セサルニ、霧中ヲ忍ヒ我カ隊ノ後ヲ襲ヘトモ防戦シテ遂ニ接戦ニ成リ、互ニ勝利ヲ得テ戦フ、第三ノ二番小隊応援トシテ来レトモ大兵取り囲ミ十死一生ノ時ニ至リ、中ニモ彈藥ヲ打果シ不得止同所ヲ引揚ケ、是ノ時右ノ足ニ二ヶ所ノ負傷有之ニ付川尻病院へ

送ラレ、拾余日ニシテ平愈シ本隊へ歸リ御舟口ヲ固守ス、

翌日官軍襲来スレトモ邀撃破之、十時比ニ及ヒ熊本協同

隊ノ守所大塚ヨリ破レテ不得止木山へ引揚ル、夫ヨリ又

南田代ニ進撃シテ大ニ破之追撃里余、是ノ時銃器・彈藥ヲ

分捕、戦ノ止ムヤ矢部へ引揚ケ三四日宿陣、於此小隊長

トナリ又万阪へ出張シ、即夜木山本営ヨリ御舟へ操出ス

様報知アリ、速ニ御舟へ行遊軍ノ処、翌日官軍進撃味方

大ニ敗走ス、我隊冬ノ御茶場へ引揚ケ又金内へ転陣、二

三日ニシテ尾前ニ引上ケ、此時干城九番中隊ト編制シ、

江代ヲ經テ人吉ニ至ルヤ又大口方面ノ敗報ヲ聞キ、直ニ

田野へ行キ、二三日ニシテ山野へ進撃シ眞幸口方面ト一

所ニナリテ大ニ官軍ヲ攻メ破リ、本営ヲ乘リ取り銃器・

彈藥分捕ル事数知レス、尾撃七里余熊本県内深川迄至リ、

於此官軍防戦ス、翌日進撃シテ戦ヒ酣ナル時再ヒ銃創ヲ

受ケ、五月十三日眞幸吉田病院へ入、人吉ノ敗報ヲ聞キ

踊病院へ転シ、又霧島病院へ移リ養生中、七月十七日歸

宅仕候処、武岡敗軍ノ時ヨリ所々潜伏シ遂ニ九月廿九日

谷山警視庁ニ於テ自首帰順仕候事、

鹿児島県第二大区

五小区西田村

明治十一年

加藤景道

五四 鮫島宗資上申書

明治十年二月十六日(木山弥一郎隊長)第三大隊六番小隊ノ兵士トナリ鹿兒

島ヲ発足シ、同月廿二日熊本県川尻ニ至ル、翌廿三日早

天熊本城ニ近ツキシ故列ヲ整頓シテ進軍シ、城東安政橋

ニ押寄ル、城中ヨリハ我兵ノ城下ニ逼ルヲ見テ大小炮ヲ

発スル事恰モ雨霰ノ如シ、我兵モ同ク銃ヲ発シ烈戦スル

事数刻、殺傷相当リ互ヒニ勝敗ノ色分ラス、爰ニ於テ大

ニ奮発シ銃器ヲ打捨テ抜刀シテ官兵ノ中ニ切テ入ル、官

兵大ニ恐愕シ隊伍ヲ乱シ銃器ヲ捨テ潰奔ス、我兵之ニ氣

ヲ得追撃スル事数丁、銃器・彈藥ヲ分捕ル、次日陣ヲ転

シテ出京町ニ至リ長閑ヲ築キ守ル事数旬、其内城兵屢出

テ我陣ヲ冒セトモ毎戦利ヲ失ヒ城内へ引歸ス、爰ニ於テ

城兵大ニ退屈ノ状ヲ顯シ且ツ糧食尽ントスルヲ以テ、密

ニ城中ヲ忍ヒ出我陣門ニ降ル者不尠、已ニ落城ノ色アリ、

然ルニ豈計ンヤ川尻ノ敗報来リ諸人之ヲ聞テ切齒スレト

モ詮方ナク、直ニ木山迄引揚ク、実ニ四月十四日ナリ、此

所ニ休息スル事一昼夜計ニシテ、(熊本)長峯ノ味方頗ル難戦ノ

報アリシ故ニ我軍援隊トナリテ長峯ニ赴ク、時已ニ味方
敗軍ノ色アリ、援兵ノ来ルヲ見テ大ニ氣力ヲ増シ更ニ奮
発激戦ス、我隊ハ邊テ官兵ノ左翼ニ出、烈シク炮発スルニ
官兵大ニ散乱敗走ス、味方之ヲ追フ事益烈シク遂ニ台場
ヲ乗取リ大炮一門分捕、小銃数知レス、屍ハ墨々トシテ路
ニ横ハリ乍チ一堆ノ山ヲナス、此時已ニ日暮ナリ、然ル
ニ味方終日ノ戦ヒニ彈藥尽テ、此所ヲ保ツ事能ハスシテ
又木山迄引帰ス、翌早朝官軍衆ヲ尽シテ至ル、我兵之ヲ
拒ク事能ハス遂ニ敗走ス、后チ河原郡ニ戦ヒ其一隊ヲ鑿
ス、官軍及チ引還ル、爰ニ於テ矢部迄引退キ、又馬見原
ヨリ湯前ニ退ク、爰ニテ隊名ヲ変シ正義六番ト改名ス、
止ル事数十日転シテ三田井ニ出テ、四月下旬鏡山ヲ進撃
シ一挙ニ官軍ヲ追下シ、已ニ馬見原ヲ取ントスルノ勢ヒ
ニ至ル、然ルニ此時彈藥尽テ空シク三田井ニ引返ス、爰
ニテ斥候長トナリ数十日間同所ヲ固守ス、五月初旬官軍
大兵ヲ持シテ襲来ル、我隊屢々力戦スルト雖衆寡不敵遂
ニ大敗シ、三田井ヲ捨テ中郡ニ引退キ墨ヲ築キテ拒戦ス
ル事月余、此所ニ於テ分隊長トナル、於此官軍屢寄来レ
トモ毎戦志ヲ得ザルヲ以テ大軍ヲ持テ襲来リ、大戦スル
事終日、然ルニ我別軍遂ニ敗走スルニヨリ、我隊モ同シク

延岡迄引退ク、八月中旬延岡敗戦ヨリ長井村へ退キ、困
ミヲ受ル事兩三日、爰ニ於テ各隊更ニ大ニ奮発シ官軍ノ
困ミヲ破リ、諸所ノ官軍ヲ打退ケ、遂ニ九月一日鹿兒島
屯在ノ官兵ヲ鑿シ城山ニ籠ル、然ルニ自分儀官軍ニ隔ラ
レ城山ニ入ル事不能西別府村ニ潜伏シ、九月廿四日落城
ノ際直ニ谷山警視出張所ニ於テ帰順自首仕候、
右之通戦地ノ景况概略ヲ述候也、
十一一年五月廿六日 鹿兒島第三大区三小区 鮫島宗資
五五 橋口安治上申書
昨十年二月十六日第四大隊四番小隊兵士ニテ鹿兒島充足、
大口へ出熊本県下川尻ニ至リ、直ニ山鹿へ進軍、同所ニ
テ開戦、諸所ニ於テ戦争ノ処、田原坂敗軍ニ依テ鳥ノ栖
村へ退陣、数日奮戦勝敗不決、四月十四日川尻敗軍ノ際
大津駅へ転陣、官兵襲来スレトモ悉ク追散シ候内、四月
中旬総テ矢部へ引揚ケ、同所ニテ奇兵十番中隊ト変号シ、
同月下旬人吉ノ近郊江代村ニテ奇兵隊ハ豊後表へ進軍ノ
策ニ決シ、直ニ延岡へ出竹田ニ至リ、墨ヲ固シ屢戦争ノ

處、五月中旬遂ニ敗レ切畑村迄退キ滯陣、復同月下旬日

州矢ヶ内(北川町)へ壘ヲ築キ守ノ際陸地峠(北川町北端)ノ官兵ヲ擊破シ、同所

交代ニテ又梓峠(宇目町)へ進撃シ是ヲ破リ水ヶ谷(宇目町)へ固守ス、此時

分隊長ニ挙ラレ數日鬪争ノ處、延岡口敗軍ニ付長井村(北川町)へ

引揚、於同所八月中旬官軍進撃ノ際降伏仕候也、

鹿兒島縣第四大区三小区

明治十一年第五月

橋口安治

五六 伊勢芳治上申書

昨十年二月十六日(網野河秋隊長)第四大隊八番小隊押伍トナリ同日九時

本県ヲ発シ、昼夜兼行シテ漸ク廿二日熊本県下安政橋(玉東町)へ

舍營ス、然ル処同夜大本營ヨリ木之葉進撃ノ指令アリ則

同所ニ至ル、官軍既ニ襲來ノ際ニ当リ同廿三日未明ヨリ

開戦、頗ル奮戦悉ク追撃ス、官軍數百名ヲ斃ス、統テ木

ノ葉駅へ進軍、時ニ分捕不勲、而シテ黄昏ニ及ヒ植木駅

へ引揚、同廿四日南之關進軍ノ議ニ決シ、各隊ト會議シ

暁天ヨリ山鹿駅へ進軍、同廿六日官軍大進撃スルノ報ヲ

得ルヨリ鍋田原(山鹿市)ニ壘台ヲ築キ堅守、各隊ヲ配置シ以テ官

軍ノ攻襲ヲ待ツ、然ル処同廿七日未明ヨリ官軍蟻附シテ

先登ス、此日ノ戦ヒ終日ニシテ勝敗不分、此時我半隊長

銃丸ニ中リ斃ル、依テ吾半隊長ニ挙ラレ連戦スル事茲ニ

十余日也、既ニ三月上旬我惣軍ヲ二手ニ分ケ、一手一隊ヲ

岩村(三加和町)へ向ケ進軍セリ、一手ハ大野原本道へ向ケ攻撃ス、此

日ノ戦ヒ將ニ酣ナルトモ吾モ銃丸ヲ受ケ一步モ進不能、

退テ病院ニ至リ療治スト雖不愈、依テ四月上旬比婦県、

同七月十八日帰順仕候也、

鹿兒島縣第二大区二小区

明治十一年五月

伊勢芳治

五七 阪元政右衛門上申書

昨明治十年旧三月廿一日製作所職人ニテ募リニ応シ、求

摩人吉ニ至リ同所製作所へ相勤居、人吉敗レヨリ大畑村(大喜市)

へ退キ、夫ヨリ小林(高岡町)・穆佐・宮崎・延岡諸所へ転移シ、

終ニ延岡ノ長井村ニ於テ旧七月十日官軍ニ降伏仕、宮崎

警視出張所ニ於テ放免相成リ帰宅ノ處、九月一日私学校

人数再ヒ鹿兒島へ突入ノ際募リニ応シ、巡查彦名・夫卒

彦名及殺害候始末、本年四月鹿兒島警視出張所ヨリ御取

糺ノ上懲役二年仰付ラレ、宮城県へ御差遣シ相成候也、

鹿兒島県第一大区九小区

明治十一年五月 平民 阪元政右衛門

五八 吉利一熊上申書

明治十年旧三月六日鹿兒島出発、同九日熊本県内人吉へ達ス、此時常山二番中隊給与ニ編入セリ、即日同所白岩戸(五木村)へ転営ス、旧五月中旬比鹿兒島県下小林へ引揚ケ、同所ニ於テ半隊長トナリ、夫ヨリ野尻へ転シ屢進撃スル処、我軍悉ク利ヲ失ヒ、旧七月上旬比延岡へ引揚ケ、此所ニ滞営中同所富高新町(日向市)ニ於テ帰順仕候也、

鹿兒島県第四大区

一小区百三番地

第十一年寅五月 吉利一熊

五九 緒方惟治上申書

下 明治十年二月十五日第壹大隊十番小队押伍トナリ鹿兒島(薩摩藩隊長) 県発程シ、同月廿四日川尻へ着、即日熊本城攻撃シ、其後中隊編制ノ折同隊左小队長トナリ、三月十七日同県土(益)

城町 山村へ進軍ノ際手負致シ、木山病院へ入室シ、亦延岡病院へ転院ス、五月上旬鹿兒島へ帰県ノ后帰順仕候也、

鹿兒島県第一大区五小区

三十四番地

明治十一年五月 緒方惟治

六〇 池田能明上申書

明治十年旧二月十一日九番大隊壹番小队兵士ニテ鹿兒島出発、熊本県人吉へ着ス、旧三月一日半隊長ニ挙ラレ、(坂本村) 袈裟堂峠へ進軍攻撃ノ処、味方大勝利ヲ得官軍敗走シテ八代迄追撃ス、翌日同所櫻馬場(八代市官地)ノ戦ニ銃創ヲ蒙リ、旧三月十三日鹿兒島へ帰県療治ス、八月上旬同所ニヨイテ帰順仕候也、

鹿兒島県第二大区一小区

明治十一年五月 池田能明

六一 田中勇八上申書

明治十年二月十七日第壹大隊壹番小队ニ編入シ鹿兒島発(ママ) (薩摩藩隊長)

足、出水口ヨリ肥後水俣等ヲ経テ川尻駅へ到着、翌未明ヨリ段山口へ攻撃、其後吉次越等ニテ戦争スル事数旬、当地ニヨリテ隊号ヲ行進彦番中隊ト改名ス、四月十四日川尻敗軍ノ際江代村へ惣軍引揚、我隊鹿兒島向軍ノ策略ニヨリ同所吉野村ニ於テ戦争スル事月余、武村敗軍ノ際帖佐・加治木等ヲ経テ國分郷ニ至リ、同所ニ於テ帰順仕候也、

鹿兒島県第壹大区

拾小区

明治十一年五月

田中勇八

六二 中山甚藏上申書

十年六月中旬勇義隊ノ給養方ト相成、阿久根表急戦ニ付(市内)向田迄出張、一時大小荷駄方エ関係候処、阿久根堅メ場引取候旨相聞得候付、則市來へ引揚滞在居候処、病氣有之同隊相断、療養相加へ快氣ノ上鹿兒島へ帰県帰順仕候、

鹿兒島県第三大区

壹小区

十一年寅五月

中山甚藏

六三 鎌田政法上申書

明治十年旧二月十二日鹿兒島県下出発シ、大口郷ニ至リ九番大隊七番小队押伍トナリ、旧二月十九日熊本県(坂本村)阪本村へ進軍ス、此時分隊長トナリ直ニ攻撃ノ処勝利ヲ得、翌廿日同県内小川へ追撃シ、続テ翌日(八代市官地)妙見山へ進軍攻撃シテ頗ル大勝利ヲ得、同廿二日ニ至リ官軍敗シテ八代へ退ク、尚追撃シテ接戦ノ際深手ヲ負ヒ、辞シテ人吉病院へ入室ス、旧三月上旬比療養ノ為鹿兒島県へ帰県シテ、終ニ旧六月中旬比帰順仕候也、

鹿兒島県第八大区

壹小区

第十一年寅五月廿六日

鎌田政法

六四 廻 政正上申書

明治十年二月十七日(池上四郎隊長)第五大隊七番小队押伍ニテ鹿兒島出発、出水米之津ヨリ乗船、熊本県松橋駅へ上陸、同廿二日熊本城攻撃、翌廿三日木之葉(五葉町)屯集ノ官兵ヲ進撃大ニ

之ヲ敗ル、即日植木駅へ我隊引上ケ、同廿五日山鹿へ至リ、翌日官兵来リ襲フ、迎へ撃テ大ニ之ヲ敗ル、官軍死屍数百ヲ棄テ、潰去ス、同所へ滞陣数十日、(植木町)田原坂ノ敗(西合志町)ヨリ鳥ノ柄村へ転陣、屢官軍来リ襲フ毎ニ撃テ卻之、川尻口ノ敗ヨリ大津(天津町)ノ駅へ引上ケ、翌日直ニ官軍来リ襲フ、奮戦シテ又之ヲ敗ル、其後官軍再挙来襲フ、又撃テ卻之、夫ヨリ矢部ノ駅へ引上ケ奇兵拾五番中隊ト改号、馬見原(蘇峰町)・胡摩山・椎葉山ノ嶮岨ヲ経テ人吉ノ江代へ出、爰ニテ分隊長ニ上ケラレ、日州路ヲ経テ豊後ノ竹田へ至リ、連戦遂ニ利ナクシテ小野ノ市駅へ退テ旗返峠ヲ守禦ス、夫ヨリ臼杵へ応援トシテ至リ、戦ヒ利ナク佐伯ノ切畑へ退ク、夫ヨリ再度小野ノ市駅へ至リ(本庄村)嶺ヲ守ル、味方三國峠(三重・宇目町)破レテ重岡へ退キ、夫ヨリ日州熊田へ引上ケ梓峠(大分縣生市町)ノ官兵ヲ掩破リ、同所ノ翌ヲ守ル事数十日、延岡口ノ味方追々退軍ニ及ヒ、官軍後ヨリ逼ルニ因リ長井村(北川町)へ転戦、遂ニ同所ニテ帰順仕候也、

明治十一年五月

鹿兒島県第二大区六小区

廻 政正

六五 吉田莊太郎上申書

昨明治十年二月西郷隆盛政府へ尋問ノ為兵ヲ起スノ秋ニ際シ、池邊吉十郎ノ倡ヒニ応シ、熊本隊八番小队ノ小隊長トナリ、同月廿二日熊本出京町ニ出張、同廿六日比寺(熊本隊々長)田村へ出張ノ処官兵ノ為ニ敗シ、木留村ニ退キ耳取阪ニ番兵、三月四日・五日同所ニ於テ戦争、戦ヒ利アラス退テ木留村ニ次ス、又転シテ大田尾村ニ番兵、尚転シテ二番・五番・十四番等ノ小队ト共ニ三ノ嶽ヲ守ル、同月廿日比当隊ハ村屋へ休兵致シ居タル処、早朝山上無勢ニテ敗軍ノ報アリ、止ヲ得ス出葉村迄退軍、翌払曉二番・五番等ノ小队トトモニ三ノ嶽觀音堂ヨリ山下シ、一挙官兵ヲ逐ヒ退ケ追撃数丁、三ノ嶽ヲ復ス、又転シテ山口ヲ守ル、戦争数日、四月十四日熊本安巳橋ノ敗ヲ聞キ兵ヲ木山ニ引揚クル、同月十七日痛所有之隊長ヲ辞シテ病院ニ入ル、其後人吉・都城・延岡(美々津、日向市)・耳津等ヲ経テ日州長井村ニ至リ、八月十七日帰順致シ候事、

熊本県第三大区

十小区

明治十一年五月

吉田莊太郎

候処、同廿四日官軍攻撃ノ節同所ニ於テ降伏仕候也、

六六 崎元盛介上申書

明治十一年五月

鹿兒島第三大区一小区
崎元盛介

(村田新八隊長)
第二番大隊七番小隊附給養掛へ編入、明治十年二月十五日鹿兒島発足、同廿三日熊本県エ着、然ルニ着涯ヨリ直

ニ病氣相煩ラヒ川尻病院へ入院ス、三月下旬頃ニ至リ追々快方ニ趣キ候折柄、同所へ二番狙撃隊繰込相成候処、其隊給養掛人少ナルヲ以此隊へ相附彼是勉強致シ居候処、

四月十四日官軍進撃相成終ニ相敗レ、同日(益城町)木山迄引揚ル、

同所エ一週間位滞陣ス、夫ヨリ矢部ノ様転陣、亦尾前道(椎葉村)

ヲ経テ人吉へ至ル、然ル処本隊ハ直ニ一番狙撃隊へ合併相成候処大小荷駄掛心得トナリ、八代口諸隊ノ糧米差統

ケ等ニ關係ス、然ルニ五月卅日諸敗軍ノ節鹿兒島県内吉(えびの市)田郷へ引揚ケ、同所へ數日致滞陣、夫ヨリ(えびの市)加久藤・(小林市)小林郷

へ至リ三十日余滞陣候処、末吉郷其外戦利アラス、次第

ニ宮崎或ハ高鍋等ヲ経テ延岡へ転陣、終ニ長井村エ囲マ(北山町)レ候処諸隊人員モ追々相減シ、惣軍ヲ前・中・後ニ分チ、

八月十八日(可愛岳)榎野嶽ノ囲ミヲ突出、中軍ニ随ヒ山中或ハ間道ヲ経テ、九月一日鹿兒島へ入城、専ラ賄焚出等致シ居

六七 淵村利直上申書

明治十年二月十七日(池上四郎隊長)第五番大隊十番小隊押伍ニテ鹿兒島

県出发、同廿二日熊本城ニ迫リ則チヨリ戦争、安政橋辺エ哨兵セリ、同卅日頃城兵城外ニ出烈ク戦ヘトモ、午後

第五時過ニ至ルト官兵城中エ退ケリ、本日ノ戦ヒ我隊ニ利有リテ分捕等種々在リ、爰ニ於テ中隊編制在シトキ我

十番中隊左分隊長命セラレ、三月初旬頃八代エ官兵上陸ノ報ニ依リ、我隊外二中隊ヲ以該地進撃ノ令ヲ受ケ進軍

中、(鶴町)鏡村ト云フ処ニテ官兵ト出会、我隊水川ノ境ニ依リ數度ノ接戦スレトモ終ニ敗軍、其後(松橋町)砂川、小川、松橋其

他諸所ニ於テ戦争、川尻駅敗軍ノ際我誤テ足ニ怪我致シ

木山病院エ引ク、夫ヨリ日向ノ内米良飯病院へ送ラレ同(西平良兵衛)所ニ於テ平病ニ罹リ、危篤ニ付佐土原本病院へ転院、入

院中味方軍清武其他諸所敗軍ニテ、延岡及ヒ長井村へ移サレ、此時榎ノ嶽ヲ切出ノ際中軍ニ属シ、鹿兒島県城山

ニ着ス、該地決戦ノ後、九月廿五日同県谷山郷出張ノ警
視本部へ帰順自訴仕候也、

鹿兒島県下第二大区六小区

明治十一年五月

淵村利直

六八 米良佐平太上申書

明治十年二月十五日(尾玉強之助隊長)第七番大隊輜重方ニテ鹿兒島県発足、

熊本県下(熊本市)春日村へ着、一時焚出方ニ掛居候処、四月上旬

川尻口敗軍ニテ即日木山へ退キ、矢部ヨリ人吉へ到ル、

直ニ鹿兒島県下(鹿兒島市)吉野村へ転陣、夫ヨリ加治木・國分・都

之城ヲ経テ宮崎へ到ル、同所江平村ニ於テ七月上旬頃大

小荷駄掛トナリ、夫ヨリ高鍋・美々津(日向市)・延岡ノ戦悉ク皆

敗ニテ、八月中旬同所長井村ニ於テ自首帰順仕候也、

鹿兒島県帖佐郷

五十二大区三小区

鍋倉村百九十九番地

十一年五月

米良佐平太

六九 東郷七之丞上申書

明治十年二月十五日(篠原國許隊長)第一大隊九番小隊給養ニテ鹿兒島発

程シ、同月二十一日熊本県下へ着シ、翌未明ヨリ熊本城

ヲ攻撃ス、戦半酣ニシテ其日モ黄昏ニ及ヒ勝敗未決内ニ

長六橋ヲ固守シ、固ヨリ給養ノ専務ナレバ兵糧・彈薬等

ヲ運送ス、持場ヲ固守スル事三十有余日、于時八代へ官

兵夥シク上陸ノ報知アリ、本営ヨリ迅速クリ出セトノ達

シ有リケレバ八代近ク突出ス、激戦スル事数タヒ終ニ川

尻迄引上ケ、同所モ日ナラスシテ敗軍ニ及ヒ、木山迄退

陣ス、所々ニ於テ烈戦スル事多数アリ、矢部(椎葉村)・奈須山ヲ

越テ人吉へ繰込、同所大野村ニ於テ(兼代鹿左衛門隊長)鵬翼彦番中隊トナリ、

五月中旬久木野(水俣市)へ進撃シ大勝利、同所引上ケ鹿兒島ニ出

ツ、大崎郷ノ戦ヒニ大勝利官兵散々ニ奔走ス、同所引上

ケ同県内末吉郷へ転陣ス、其時攻撃隊ト合併シ隊号ヲ改

メテ奇兵三番ト称ス、同隊監軍ニ揚ラレ、六月下旬加例川(佐例川)

へ進撃スト雖モ破ル不能、然後延岡長井村へ退陣ス、同

所ニおひて官兵ヨリ困ラル、事兩三日、終八月十八日不

得止事自首帰順仕候也、

鹿兒島県鹿兒島

明治十一年五月

東郷七之丞

七〇 山下美兼上申書

明治十年二月十六日第二大隊三番小隊押伍ニテ鹿兒島
(村田新八隊長)
 出発、同二十二日熊本県下川尻駅ニ着ク、即日ヨリ高橋及
(大浦)
 ヒ大島土番兵、海軍ノ上陸ヲ備フ、同二十六日夕刻ヨリ
(玉名市)
 星馳シテ山鹿駅ニ到リ、翌日未明ヨリ高瀬へ進撃、勝敗
 決セス昏ニ及テ山鹿へ退陣ス、三月上旬同所ニ於テ戦争
 大ニ利ヲ得、其後分隊長トナリ、日ハ失念植木へ応援戦
 争ノ節胸部ニ銃創ヲ蒙リ、即日川尻病院へ入室、川尻敗
 戦ノ期ニ至リ日向路ヲ経テ鹿兒島へ歸リ、諸所ニ療養、戦
 争終ニ及テ猶全快ニ至ラス、遂ニ九月下旬帰順仕候也、

鹿兒島県下荒田村

第二大区

明治十一年五月

山下美兼

七一 上原七之助上申書

第十年二月十六日三番大隊七番小隊兵士ニテ鹿兒島発足、
(永山弥一郎隊長)

同二十二日熊本県下エ着、直ニ高瀬エ出軍開戦、夫ヨリ
(内町)
 野出村へ守兵ス、夫ヨリ植木ニテ守兵申連戦、四月上旬
(益城町)
 川尻ノ敗報ヲ得テ木山ニ退キ、矢部ヨリ椎葉山ヲ経テ人
(球磨村)
 吉ニ到ル、夫ヨリ神之瀬口・久木野村ニテ戦フ、勝利ヲ

得ル、一週間余連戦ス、六月人吉ノ敗戦ニヨリ鹿兒島県
(えびの市)
 吉田郷へ退キ守兵ス、七月飯野・小林ヨリ高原へ転ス、
(高原町)

同月中旬同処ノ敗戦エテ都之城へ退キ守兵ス、夫ヨリ高原
 へ進撃、両度戦不利ニテ又退ク、同処ニテ鷗翼四番中隊
 トナル、同隊ノ分隊長トナル、夫ヨリ宮崎・佐土原・美
(日向市)

々津・延岡ノ戦悉ク皆敗ニテ、櫻嶽ヲ打破リ山路ヲ経テ、
(可畏寺)
 鹿兒島之城山ニテ連戦ス、九月二十四日自首帰順仕候也、

鹿兒島県下第三大区小六区

明治十一年五月

上原七之助

七二 伊地知 貢上申書

明治十年丁丑二月十五日二番大隊六番小隊押伍ニテ鹿兒
(村田新八隊長)
 島発足、大口筋ヨリ同廿日頃熊本県下川尻駅エ到着候処、
 前日着クニ相成候前軍へ熊本城ヨリ襲撃ニ相成、官兵死
 屍三四名ヲ残ス、依テ翌早朝ヨリ攻城スル事一昼夜ニシ

明治十年二月十六日(稱野利秋隊長)第四大隊二番小隊兵士ニ編入セラレ
鹿兒島出発、同廿二日熊本県へ着シ、夫ヨリ植木ヲ経テ

七三 新穂利秀上申書

明治十一年寅五月

伊地知 貢

新屋敷田ノ中

テ、熊本県下向井町へ引揚ケ候処、(天分県)鶴崎へ官軍上陸ノ説アリ、同廿四五日頃ヨリ大津街道二重峠迄出張、守兵スル事一週間余ニシテ虚シク再ヒ向井町へ引揚ケ、即夜ヨリ田原富岡村へ出張、官軍ト对阵スル事凡十五六日、其内田原七本村激戦ノ報アリ、援兵トシテ一分隊出張ノ処分隊長手負ニ付翌日分隊長代理命セラレ、三月十七日田原七本村へ出張、此処へ官軍ト对阵スル事三晝夜、同廿日朝七時頃官軍ヨリ進撃相成候ヤ否ヤ、左手ニ銃創ヲ蒙リ、川尻病院へ入り、同廿四日切斷療養ノ処、松橋ノ味方敗軍ノ報アリ、木山町へ転院、其後求摩人吉其他諸所病院ヲ経、遂ニ日州延岡ノ内長井村ヨリ潜行シ、漸ク九月上旬谷山郷へ着ク、谷山警視出張処へ自首仕候事、
鹿兒島県下第二大区二小区

山鹿へ進軍、同所ニテ開戦シ鍋田長野原進撃ノ際負傷シ、川尻病院へ入室、其後甲佐(甲佐町)輕創病院転室ノ処、櫻田切込ノ節(失町)応援シ遂ニ不利ニシテ木山病院へ入院ス、夫ヨリ日州三田井・田代諸所ヲ経テ渡川村ニ至リ、初テ矢部ニ於テ本隊奇兵八番中隊ト改号スル事ヲ聞、同所ニテ帰隊、然トモ疵未癒ニ仍リ給養方ニ附属シ、延岡ヲ経テ豊後国竹田城ヲ抜ク数日ノ戦争、勝敗不決、其后竟ニ戦利アラス同所ヲ引上ケ三重市(三重町)駅ノ官軍ヲ襲撃シ、臼杵城ヲ攻テ拔之、虜四拾余人、弾薬・粮米十一倉分捕、夫ヨリ数日連戦勝敗不決、竟ニ守禦不便ニシテ佐伯ノ内切畑(弥生町)へ引上ケ、再ヒ三重市駅へ襲撃シ運送不便利ニ付重岡(宇目町)へ退ク、後同国赤木村ニ応援シ霖雨洪水ニ因テ日州ノ内松瀬村ニ引揚ケ、官兵陸地峠ヲ防守スルヲ不意ニ掩撃斃殺シ大ニ利ヲ得タリ、又官軍矢ヶ内ニ襲来リ応援トシテ横ヲ衝キ之ヲ敗ル、夫ヨリ梓峠ノ軍兵ヲ襲破リ、豊後ノ内切畑口へ屢々進撃ニ及ヘトモ勝敗不決、对阵ノ際右小隊長ニ上ケラレ、延岡口戦ヒ利アラス応援トシテ熊田・長井村等(北川町)へ防戦シ、八月十八日榎之嶽ヲ破リ、堀川・鹿川・三田井・神門・横川・溝邊・蒲生・吉野・鹿兒島城山等ノ官軍ヲ悉ク撃破リ、遂ニ城山ニ拠ル、九月廿四日曉官軍大

挙シテ攻撃ノ際降伏仕候也、

鹿兒島県第二大区一小区

明治十一年第五月

新穂利秀

七四 榎田玉喜上申書

明治十年二月十六日(柳野河吹隊長)第四大隊四番小隊兵士ニテ鹿兒島出

発、道ヲ大口街道ニ取り熊本県下水俣ヲ經小川ニ至リ、

同所ニテ先鋒既ニ開戦ノ報アリ、因テ我隊ハ直ニ進軍、

熊本ヲ棄テ、二月下旬山鹿駅ニ行軍ノ処敵敗散スルニ因

リ、同所ヘ壘ヲ固フシテ守禦ス、数々官軍襲来スレトモ

悉ク是ヲ追退ケ候内、田原敗軍ニ依テ鳥之栖村ヘ退陣、

数日勝負不決、四月十四日川尻口敗ルノ際大津ノ駅ニ退

キ復官兵襲ヒ来ル、終日激戦ノ処大ニ勝利ヲ得追討スル

事二里余、四月中旬総テ矢部駅ニ引揚ゲ同所ニテ奇兵十

番中隊ト改号シ、四月下旬人吉ノ江代ニテ我隊豊後地ヘ

進軍ニ決シ、直様延岡ニ出竹田ニ至リ、数日対壘戦争ノ

処、五月中旬卒ニ敗レ切畑村迄引退キ、夫ヨリ同月下旬

日州(北川町)矢ヶ内ヘ壘ヲ築キ守禦ノ際陸地峠ノ官軍ヲ追散シ、

且彈藥其外分捕品多数アリ、同所交代ニテ梓峠ニ進撃シ

之ヲ敗リ、水ヶ谷ヨリ梓峠ヲ守ル、此時分隊長ニ挙ケラ

レ数日戦争ノ央、延岡口敗軍ニ付熊田(北川町)長井邑ヘ引上ケ、

八月中旬榎之獄ヲ破リ諸所嶮岨ヲ逾ヘ、三田井ヨリ小林

ヘ出、九月一日鹿兒島城山ヲ乗取り抛之、其后九月廿四

日官軍大挙シテ攻撃ノ際帰順仕候也、

鹿兒島県下第二大区二小区

百七十番地

明治十一年第五月

榎田玉喜

七五 兒玉實得上申書

明治十年二月十六日鹿兒島発程、翌日日州清武ニ到リ

鉄肥一番小隊ノ附属兵トナリ、同十九日同所出立、高千

穂街道ヲ經テ同廿五日熊本ニ着ス、直ニ本營ノ指揮ニ因

リ川尻駅ニ番兵セリ、四五日ヲ經過シ山鹿ニ出、其後植

木・隈府・大津諸所ニ於テ戦争ノ末、四月矢部ヲ引揚江

代迄退軍、四五月頃豊後口ニ出テ三重ノ市・三國峠・重

岡・陸地峠・三川内・矢ヶ内諸所ニテ交战シ、八月一日

該隊小隊長トナリ、翌日平病ニテ入院シ、同十七日頃

日州延岡長井村ニ於テ入院中帰順仕候也、

鹿兒島県第三大区六小区

明治十一年五月

兒玉實得

七六 吉利 節上申書

昨年二月十五日(薩原鎮守府隊長)第壹ノ五小隊押伍トナリ我県ヲ発、同月廿一日川尻駅へ達ス、同廿三日熊本城攻撃スルニ昼夜交隊シ、同廿四日高瀬進撃、(玉東町)続イテ該地ニ於テ数戦、或ハ進ミ或ハ退キ防戦スル殆ト三旬、以后川尻破軍依テ人吉・鹿兒島ヲ経テ(此地ニ於テ分隊長代理ヲ係ス)延岡へ退陣、七月十六日帰順候也、

鹿兒島県下第三大区

五小区

明治十一年五月

吉利 節

七七 前原胤二上申書

明治十年旧正月五日五番大隊九番小隊ニテ鹿兒島県発程、(二月十七日(池上四郎隊長)同十日熊本県下へ着ス、翌十一日木之葉へ進撃勝利ニテ(玉東町)其日黄昏ニ及植木迄引揚、同十三日山鹿へ進軍同所へ兩

三日番兵致シ、同十六日同所ニ於テ戦争勝利ナリ、同十

八日吉次峠并平田野村へ番兵、夫ヨリ矢部諸所へ転陣シ、(玉東町) (辺田野カ、植木町)

旧三月廿九日鹿兒島県下吉野村帶迫へ赴キ、旧四月十日

ヨリ雀ヶ宮へ番兵致シ、旧五月十二日同所ニ於テ戦争ス、(鹿兒島市吉野)

大ニ勝利ヲ得続テ番兵イタシ居候処、翌十三日再同所ニ

於テ進撃ノ央手負致シ、伊迫村病院へ五日位入室ノ上帰

郷、旧六月中旬帰順仕候也、(ママ)

鹿兒島県敷根郷

第六十一番大区三小区拾三番地

明治十一年第五月

前原胤二

七八 和田眞義上申書

明治十年二月十七日(田代五郎隊長)第二砲隊ニテ鹿兒島ヨリ求摩街道へ発程ノ途中、本營護兵ニ当番シ、同廿一日八代へ着ス、翌晝廿二日受持ノ炮一門ヲ牽テ午后四時頃ニ熊本城下へ到着、則直ニ本營へ馳付指揮ヲ受ケ、花岡山ヨリ城内ヲ炮撃ス、尋テ諸所ニ炮堡ヲ転移シ連日発炮ノ際、第三月当隊押伍ヨリ遊軍隊半隊長へ上ラレ、即時ニ木留表へ該(植木町)隊引卒シ進軍ノ令ヲ受ケ進発ス、然シテ翌朝敵山腹へ襲

三 宮城県 下

来り、我隊応援終日激戦卻之、其後互ニ对塁応炮中暫時
ニ鹽屋(河内町)ヲ海禦スルノ折、川尻敗績故速カニ可引上ノ令ニ
依り、出京町口ヨリ木山(益城町)駅へ転陣ス、余憩ナクシテ大津
口へ軍シ頗ル勝利ヲ得タリ、統テ惣軍ヲ矢部へ移シ各隊
編制替、我隊奇兵一番中隊トナル、当所ヨリ馬見原且椎葉(蘇陽町)
山路ヲ経テ日州富高新町へ出テ、不日ニシテ豊後竹田(竹田市)へ
進軍、同四月官軍間断ナク来リ戦ヲ挑ム、我隊小鷹野(小高野、竹田
市)ヲ固守ス、敵我塁ニ迫ルト雖之ヲ破走ス、各所大小戦ノ内
弾薬乏少ニ仍リ遂ニ敗潰、惣軍ヲ一ニ纏メ三國峠・旗返
シノ両道へ守備ヲ置ク、其中臼杵・三重ノ市等ノ勝報アリ、
居ル事幾ハクモナク官軍右両道へ向フ、則我半隊ヲ
指揮シテ旗返シ左翼ノ山林ノ敵ヲ七八町追撃ス、我隊三
國峠破レテ我隊重岡(宇目町)へ引上ケ支戦ス、固ヨリ寡兵ヲ以テ
守リ難キ故日州境ノ嶮岨ニ兵ヲ占メ、重岡ノ官兵ヲ三道
ヨリ進撃ス、我隊宗太郎(宇目町)越ノ間道ヨリ暗夜ニ乘シ、嶮岸
ヲ凌テ曉天敵ノ不意ニ突出、塁堡ヲ取事十余ヶ所分捕品
不少、早天ヨリ黄昏迄ノ血戦奮闘寸隙モナク、我隊廿四
名死傷ニ及ヒ、幾ント重岡ヲ抜ノ機ニ至ント欲スト雖、
僅ノ孤軍ニテ弾薬射尽シ援兵統カサルカ故引揚タリ、尔
后六月中旬豊後梓峠(宇目町)へ進撃、官兵支ル事不能シテ水ヶ谷(宇目町重岡)

陣營へ火シテ敗走、追撃事一里余其時虜及ヒ弾薬分捕ス、
翌午前十時頃我一中队先鋒トナリ大原野築堡下へ突進、
奮戦シ互ニ死ヲ一挙ニ争ヘトモ勝敗不決内吾モ銃創ヲ負
ヒ、無詮方延岡病院へ送ラル、此戦ニ我隊死傷十七名アリ、
此時ニ当テ鹿兒島方面ノ味方追々退軍当所迄混入ス、
依之未創愈ヘサレトモ長井村(北山町)ニテ帰隊ス、茲ニ於テ第八
月十八日四方稻麻竹畑ノ如キ官兵ヲ榎(河原庄)ノ嶮ニ破リ、夫ヨ
リ三田井(高千穂町)諸所ノ官軍ヲ破リ、昼夜兼行ニテ九月一日鹿兒
島城山へ抛リ茲ヲ守ル事、廿四日ノ曉四方ヨリ激浪ノ卷
カ如ク官軍大挙シテ取囲ム、我兵僅少防禦スル不能、囲
中へ潜伏徒行スル事五昼夜断食シテ、遂ニ同廿八日未明
玉江橋守兵ノ中ヲ万死ヲ遁レ辛フシテ西ノ谷へ出テ、翌
廿九日谷山警視庁へ自首帰順仕候也、

鹿兒島県第二大区七小区

八番地田上村居住

明治十一年第五月

和田眞義

七九 大山精一上申書

昨十年第二月十七日第五(池上山郎隊長)ノ一番小队兵士ニテ出水口ヨリ

三 宮 城 県 下

発足、熊本県下川尻駅ニ達スルヤ、台兵ノ斥候我ニ向テ
 発炮致シタル報知アリ、故ニ同廿二日曉ヲ冒シテ攻城ニ
 懸リ交戦終日、日夕三軒街ニ引揚、爰ニ守兵スル殆ント
 十日ニシテ第三月一日頃田原坂激戦ノ報アリ、故ニ援兵
 トシテ至レハ、既ニ援兵四集シ居タルヲ以テ其戦線ノ右
 側ナル西山(植木町)ニ登リ爰ニ哨兵スル事旬余、既ニシテ同月中
 旬眼下田原ノ戦線守ヲ失シ、之カ為縁リ町ヘ引揚ゲ、直
 ニ植木ノ右側ニ進撃シテ二三ノ胸壁ヲ乗取ルト雖モ、終
 ニ曩ノ戦線ニ追返ス事ヲ得ス、況ンヤ日己ニ黄昏、直ニ
 戦線ヲ荒木村ニ取テ対壘スル事数旬ニシテ、第四月中旬
 川尻ノ軍敗レ城兵ト連絡ヲ通シタリトノ報アリ、衆驚愕
 切齒ニ堪ス、然リト雖モ亦爰ヲ守ルニ益ナシ、終ニ举軍
 ヲ木山ニ纏メ、夫ヨリ馬見原(群馬町)・胡摩山(惟業村)ヲ越ヘ人吉ニ至リ
 テ隊名ヲ正義ト改ム、夫ヨリ亦鹿兒島県下大口(大口町)ニ転シテ、
 敵ヲ山野小河内ニ撃テ之ヲ深川ニ退ケ対戦旬余、即敵上
 木場ニ屯スルノ報アリ、故ニ直ニ之ニ向フ、敵大關山ニ
 抛ル、翌曉之ニ進撃根拠ヲ撃破シ殺傷無算、日午我敵ニ
 代テ之ニ抛ル、対壘十四日、時ニ我軍諸所利アラス、故ニ
 見兵ヲ分ケテ赴キ援ハシム、此ニ於テ敵我ノ虚ヲ窺ヒ夜
 半襲来、其鋒キ当ルヘカラス終ニ兵ヲ山野ニ引上ケ、亦

大口ニ退テ茲ニ雷撃ニ転隊ス、夫ヨリ毎戦利アラス、馬
 越(馬城市)・横川ヲ経テ庄内防戦ノ際半隊長トナリ、交戦四五日
 ニシテ都之城敗レ、山ノ口越ヨリ宮崎ニ退キ、川ヲ隔テ拒
 戦五六日、終ニ綾口ノ守ヲ敗ラレ高鍋・延岡ヲ経テ長井村
 二窘縮ス、時ニ四辺ノ炬柵一身ヲ脱去スルノ隙ナシ、進
 退爰ニ窮ル、尔後延岡ニ向テ決戦再次一ツモ議ノ如クナ
 ラザルヲ以テ、第八月十八日夜半举軍意ヲ決シ兵ヲ勒シ
 テ、敵ノ戦線中尤堅壘タル榎之嶽ヲ襲撃ス、敵險ヲ頼ン
 テ一人ノ避兵ナシ、既ニ登リ後營ヲ瞰視スレハ敵營ヲ伝
 フルノ時ナリ、衆俯撃スレハ敵狼狽措ク所ヲ知ラス纔ニ
 身ヲ以テ免ル、器械野ヲ蔽フ、追撃シテ堀川・岩戸ニ至
 ル路甚險ナリ、夫ヨリ三田井ノ輜重ヲ破リ銃器・弾薬一
 ツモ欠ク事ナク、夫ヨリ亦岸野・米良・小林(えびの也)・眞幸郷(真幸町)ヲ
 経テ横川ニ至ル時、敵邀撃シ進ム事能ハス、道ヲ隔ニ取
 レトモ亦過ルヲ得ス、故ニ間道ヨリ溝邊・山田ヲ過キ、
 日夕蒲生ニ至レハ敵川ヲ前ニシ炮台堅固、我軍流ヲ乱シ
 テ突進スレハ敵一発ヲ放ツ能ハスシテ四散ス、其夜徐行
 シテ未明吉野ニ至レトモ亦隻騎ヲ見ス、衆雀躍結束終ニ
 九月一日鹿兒島ニ突入ス、敵擾乱遺器道ニ滿チ伏屍衝
 ニ墳塞ス、此ニ於テ騎ヲ飛シテ募兵ス、既ニシテ官軍四

面重柵ヲ結ヒ、昼ハ旌旗空ヲ蔽ヒ夜ハ炬火天ヲ輝シ、落丸雹雪ノ如シ、内ハ創者陸続タリ外一人ノ援無ク、見兵裁カニ三百ニ滿タス、孤軍壁ニ嬰ル殆ント三旬ナリト雖、守攻ノ勢ヒ固ヨリ同シカラズシテ城竟ニ陥ル、実ニ明治十年九月廿四日也、此曉同所ニ於テ降伏仕候、聊戦状ヲ茲ニ具申ス、

鹿兒島県第二大区四小区

明治十一年五月

大山精一

(表紙)

西南之役懲役人筆記 四 福島県

(中表紙)

(余)
〔第拾九号〕

国事犯懲役人戦地事情形況筆記

一 河野主一郎上申書

正三位陸軍大将西郷隆盛、政府ニ尋問ノ儀有之上京ニ付、随行トシテ明治十年二月十七日(池上町部隊)第五番大隊鹿兒島ヲ発ス、陸軍少将篠原國幹之レカ指揮官ニシテ、余ハ一番小隊ニ長タリ、市來・阿久根等ニ次シ、同廿日出水米(出水市旧港)ノ津ヨリ上船、日暮肥後国佐敷(音北町)ニ次シ、明日又海路松橋ニ達ス、時ニ熊本ニ当リ烟焰天ニ漲リ炮声地ニ轟クヲ以テ、本隊ヲ離レ所部ヲ率ヒ夜ヲ冒シテ宇土ニ進ミ、斥候ヲシテ川尻ニ在ル我前軍ニ事ヲ問ハシム、還リ報シテ曰、明日我